

いしかり 馨

観光絵はがき「名産鮭大漁實況」「石狩勝景」……………	1
村山家文書解説「飛騨屋のあと石狩伐木を請負った村山伝兵衛」…村山 耀一…	5
村山家文書解説「トド嶋附近漁業慣行概要」……………村山 耀一…	14
石狩川筋のアイヌ地名（2）－マクンベツ－……………井口 利夫…	19
石狩尚古社所蔵俳句の紹介5 石狩尚古社選者 松島十湖遺墨…中島 勝久…	28
石狩尚古社所蔵俳句の紹介6 石狩尚古社選者 三森幹雄遺墨…中島 勝久…	29
樽川、南線地域の戦後の歩み・入植六十八周年を迎えて…本間 純…	30
似せられ若集……………今井 光男…	41
北海の粒買船早春の日本海を征く……………吉岡 玉吉…	50
石狩湾漁業協同組合にみる近年の石狩市漁業あれこれ…高瀬 たみ…	62
八幡町の古老田岡定男が残した石狩空襲の記録 昭和二十年七月十五日 空襲見たままの記……………三島 照子…	72
石狩市内の戦争に関連する石碑、遺構……………工藤 義衛…	81

第 29 号

2016. 3

石 狩 市 郷 土 研 究 会

観光絵はがき「名産鮭大量實況」「石狩勝景」



昭和十年十月五日、
巖鷲會一行清遊記念



裏面のスタンプ



石狩海濱建網の鮭陸揚げ（其一）



石狩海濱建網の鮭陸揚げ（其二）



石狩名産鮭新巻製造



鮭曳網（石狩河口堀神漁場）



石狩名産鮭新巻 宮内省御用品調製

観光絵はがき「名産鮭大漁實況」「石狩勝景」解説

一・絵はがきの概要

「名産鮭大漁實況」「石狩勝景」はいずれも五枚組の絵はがきである。縦十八・五cm幅九・七cmの紙カバーに挟まれている。「名産鮭大漁實況」はカバーの表面に灯台と水面から飛び跳ねる魚が濃紺で印刷されている。「石狩勝景」のカバーは灯台と沖をゆく二隻の帆船の絵で少し淡い青色の印刷である。どちらのカバーにも下部に「石狩町三輪寫真館」とある。カバー裏は白無地で、それぞれ直径五・三cmの円形のスタンプが押されている。スタンプは灯台と飛び跳ねる魚のイラストで「石狩港 待合堀松 電話二十四」とある。さらに「名産鮭大漁實況」に押されたスタンプの右側にはペンで「昭和十年十月五日、巖鷲会一行 清遊記念」と書きこまれている。

絵はがきの表面上部には右から「郵便はがき」、中央には通信欄と区分する点線が印刷されている。裏面の写真は縁取りが無く、全面を使って印刷されている。写真はコロタイプではなく写真印刷である。

二・絵はがきの内容

「名産鮭大漁實況」五枚の絵はがきのうち三枚は、漁場に係わるシーン（海浜の建網、川の地引網）と加工場のシーンで構成されている。海浜はいわゆる吉田漁場（現在の石狩浜海水浴場付近）と推測される。掘神は現在の灯台の少し下流側である。鮭地引網漁が最後まで行われた場所での多くの観光客が訪れた。「石狩名産鮭新巻 宮内省御用品調製」の人物が着ている半纏の襟に「石狩新巻[㊦]高澤海産商」と見えることからこれは、高沢海産商で宮内省に納品する新巻鮭を造っている場面だと考えられる。

「石狩勝景」の五枚のうち四枚は右岸側の風景で、石狩灯台、石狩八幡神社、海岸風景である。左岸側は渡船場の棧橋から本町側を望む

景色である。渡船場の絵はがきはキャプションが「八幡町」となっているが写っているのは若生の渡船場である。石狩灯台は他の絵はがきでも良く用いられる題材だが、このカットは初見である。

三・待合堀松と三輪寫真館

「名産鮭大漁實況」のカバー裏に「昭和十年十月五日、巖鷲会一行」と書かれているが、田中實氏のご教示によれば「巖鷲会」は札幌岩手県人会の名称で昭和十年十月六日に秋の例会が石狩町の金大亭で開かれ、会員家族を含め約百名の出席があったという。おそらく絵はがきは県人会員の中で前日から石狩に入ったグループの一人が購入したものである。

「待合堀松」のスタンプがあることから、この絵はがきは待合堀松で購入された可能性が高い。「待合堀松」は、本町側の渡船場前にあった待合所である。待合所を経営していた堀松家は浜益出身で、石狩で待合所を経営した後、経営を青木石松氏に譲り、留萌に転居した。留萌では建設会社を営んだという（田中實氏の御教示による）。

三輪寫真館は戦前に石狩町で営業していた写真館である。の絵はがき裏面の全面が写真になっているのが特徴で、「石狩勝景」「名産鮭大漁實況」以外にもさまざまな絵はがきが残されている。

「名産鮭大漁實況」「石狩勝景」の絵はがきはいずれも折り目、シワなどの無い良好な状態を保っており、当初の組み合わせが保たれている可能性が高い。用いられている写真の多くは単体では知られているものだが、この五枚がセットとなっている状態で発見されたのは初めてで、極めて貴重である。

この絵はがき、井口利夫会員が札幌の古書店から購入したもので、平成二八年二月一八日の郷土研究会例会で工藤会員が資料紹介をし、出席した会員が供覧した。その後、井口会員からいしかり砂丘の風資料館に寄贈された。（工藤義衛）



絵葉書の表面



石狩八幡町棧橋より船場町を望む



石狩郡郷社八幡神社（鳥居は文化十年の建立）



香気漂ふ石狩海濱のハマナス満開



石狩河口燈台



ハマナスの丘より石狩河口の燈台を望む

「村山家文書解読」

飛驒屋のあと石狩山伐木を請負った村山伝兵衛

村山 耀一

文書1

北海道博物館収蔵 収蔵番号100345

整理番号 215

索引番号0302



阿部屋

傳兵衛

先年より御預被

仰出候西蝦夷地宗谷

岩内とまゝい東蝦夷地

くなしりくすり右御場所

御繰合之儀二付年賦

之内御引上被

仰出右代り御場所被

仰付度被 召置候得共

松前様より申渡 (表書き)

阿部屋

傳兵衛

先年より御預被

仰出候西蝦夷地宗谷

岩内とまゝい東蝦夷地

くなしりくすり右御場所

御繰合之儀二付年賦

之内御引上被

仰出右代り御場所被

仰付度被 召置候得共

・阿部屋伝兵衛 三代目

村山傳兵衛

・年賦 〓ある金額を一年にいくら
と割当て支払うこと。

・被仰付 〓言付けになる。
・被 召置 (めしおかれ) 〓思し
召しになる。

是迄明御場所も無之
 無其儀候然ル處此度
 蝦夷檜惣山新宮屋
 久右衛門より返上ニ付願人も
 可有之哉御觸被
 仰出候右蝦夷檜惣山
 其方江御運上ニ申請候
 様被 仰出候材木石
 数并御運上金之儀者
 檜山奉行江以書付
 可申達候
 十二月
 申

是迄明御場所も無之
 無其儀候然ル處此度
 蝦夷檜惣山新宮屋
 久右衛門より返上ニ付願人も
 可有之哉御觸被
 仰出候右蝦夷檜惣山
 其方江御運上ニ申請候
 様被 仰出候材木石
 数并御運上金之儀者
 檜山奉行江以書付
 可申達候
 十二月
 申

・明（あき）＝空き。空いている
 ・無其儀＝そのようなことはなく。
 ・蝦夷檜＝エゾ松。トド松。
 ・新宮屋久右衛門＝江戸の材木商
 石狩山伐木を請負う。
 ・運上＝経営を委ねられ、その代
 価を納めること。
 ・檜山奉行＝松前藩は十六世紀後
 半頃からヒノキアスナロ
 （ひば）の伐採管理のた
 め上ノ国に檜山（ひのき
 やま）番所・奉行を設け
 た。
 檜伐採は藩の重要な財源
 であった。
 ・申十二月＝天明八年（二七八八）
 戊申十二月

松前様よりの申し渡し

阿部屋

傳兵衛

先年より（傳兵衛に）預けてきた

西蝦夷地、宗谷・

岩内・苫前・東蝦夷地

国後・釧路の五か場所は

年賦返済のやりくりのために

引上げ

その代わりの場所を

（傳兵衛に）預けたいという申し召しであったが、

これまで空き場所がなく、

そのままになっていた。そのようなところ、このたび

蝦夷槍の全ての山を新宮屋

久右衛門より返上されたので、（請負の）願人が

いるかどうかお触が、

出され、右蝦夷槍全ての山を

そなた（伝兵衛）へ請け負わせるように

仰せがあった。材木石敷

や運上金額については

檜山奉行所へ書面にて

申告しなさい。

申（天明八年）

十二月

【解説】

江戸時代の有力な木材商の飛騨屋久兵衛は元禄十五年松前に渡り、松前藩の許可を得てエゾヒノキ（エゾ松・トド松）の伐木を請負い、尻別山、有珠山、沙流岳、目名山などを請負った。宝暦三年（一七五三）三代飛騨屋久兵衛が石狩山（漁岳・札幌岳）の伐木を出願した。翌々年の宝暦五年（一七五五）石狩山エゾヒノキの伐採を開始した。

明和三年（一七六六）飛騨屋の南部大畑店の支配人嘉右衛門が店の金二八〇〇両の使い込みが分かり解雇した。その嘉右衛門が松前に渡って時の勘定奉行湊源左衛門らと結託して、飛騨屋の請負山を奪おうとたくらんだ。飛騨屋は一か年の運上金一〇〇〇両を増額、献金などをして継続をはかったが受け入れられなかった。明和六年（一七六九）、飛騨屋は一四年の石狩山伐木をやめ松前藩直営となった。翌年九月、四日市出身の江戸の材木商新宮屋伊藤久右衛門が命じられる。翌明和八年より天明六年（一七八七）まで新宮屋伊藤久右衛門石狩山伐木を請負った。

この文書は天明八年十二月に松前藩が阿部屋傳兵衛（三代目）に宛てた申し渡し書である。この当時伝兵衛は飛騨屋の宗谷場所の下請けをはじめ、西蝦夷地、東蝦夷地の請負も任されていて、経営的には安定していたところである。そこに、前述したように、飛騨屋の石狩山伐木が内部の事情で請負いが解かれ、その後、新宮屋が請負ったが、これも天明七年で終了したため、松前藩は、阿部屋傳兵衛にその後を継ぐように申し渡した。

この頃、三代目傳兵衛は松前藩から苗字帯刀を許され町奉行下代兼町年寄を命じられ問屋のほか長崎俵物買付けの総取締役も兼ねるようになっていた。この年から三代目阿部屋村山傳兵衛は石狩山（漁岳・札幌岳）のエゾ松、トド松の伐採を七年間の契約で請負うことになる。

定證文之事

定證文之事

一 貴殿御所持之石狩御山材木此度
御當所二運有之候内を忒百挺直段兩二
四丁替二相定買受慥二受取申候則代金
不殘相渡申所実正御座候尤右材木之
儀者外二類木無之二付江戸大坂共貴殿
御宿壺軒二而賣拂被成候段承知いたし
罷在候依是御當所二而外江御拂被成候事
難御成段御申御尤二奉存候得共私義者
江戸大坂江者積參不申加劔表江積參
賣拂申度存入其段申上候所御承知被下
御拂被下候万一加劔表二而望人無之賣兼
申時者無抛江戸大坂へ積參申事二御座候
然ル時者貴殿御賣場所之御邪魔二相成候

定證文之事

一 貴殿御所持之石狩御山材木此度
御當所二運有之候内を忒百挺直段兩二
四丁替二相定買受慥二受取申候則代金
不殘相渡申所実正御座候尤右材木之
儀者外二類木無之二付江戸大坂共貴殿
御宿壺軒二而賣拂被成候段承知いたし
罷在候依是御當所二而外江御拂被成候事
難御成段御申御尤二奉存候得共私義者
江戸大坂江者積參不申加劔表江積參
賣拂申度存入其段申上候所御承知被下
御拂被下候万一加劔表二而望人無之賣兼
申時者無抛江戸大坂へ積參申事二御座候
然ル時者貴殿御賣場所之御邪魔二相成候

・ 挺・丁 (ちよう) 〓 木材の
本数。

・ 加劔 (かしゆう) 〓 加賀国

・ 無抛 (よんどころなく) 〓
やむをえず。やむなく。

奉命難者ありては、御座候御座候御座候
 さいかい屋源兵衛殿大坂大津屋九兵衛殿方二而
 賣拂貴殿之御邪魔二者少しも仕間敷候
 何方二而も御邪魔者急度仕間敷候万々一
 御邪魔二相成候時者請人加判之者罷出
 少しも貴殿江御邪魔為致間敷候為其
 一札證文依而如件

御座候

古酒屋半兵衛

宿加判

寛政六年

八月三日

村山利兵衛

右者江戸大坂宿之義貴殿御宿江參候付
 則貴殿方より送り状老枚被遣被下樋二
 請取申候右送り状を以両家之内江急度
 賣拂可申候以上

則日

事二御座候間為其貴殿材木問屋江戸

さいかい屋源兵衛殿大坂大津屋九兵衛殿方二而

賣拂貴殿之御邪魔二者少しも仕間敷候

何方二而も御邪魔者急度仕間敷候万々一

御邪魔二相成候時者請人加判之者罷出

少しも貴殿江御邪魔為致間敷候為其

一札證文依而如件

材木買主

古酒屋半兵衛

宿加判

寛政六年

近江屋三郎治

寛政六年 一七九四年

八月三日

村山利兵衛

村山利兵衛殿

右者江戸大坂宿之義貴殿御宿江參候付
 則貴殿方より送り状老枚被遣被下樋二
 請取申候右送り状を以両家之内江急度
 賣拂可申候以上

則日

現代文訳

定め証文の事

一、貴殿（村山利兵衛）ご所持の石狩御山の材木について、このたび、御当所（松前）に運ばれているもの内、材木二百丁を、値段を一両につき四丁と定めて買い受け、確かに受け取りました。そして、代金を残らず、確かにお渡しました。もつとも、右の材木については、外に同類の木（ヒノキ）が無いために、江戸・大坂とも、貴殿の宿一軒で売り払いされることと承知いたしております。このことよって、御当所（松前）にて、外へ売り払うことは難しいとの仰せ、ごもつともなことで存じます。しかし、私は、江戸・大坂へは運ばず加賀（金沢）方面に運んで売り払いたいと考え、そのことを申し上げたところ、ご承知いただき、売り払っていただきませんでした。万が一、加賀方面で買い取り手がなく売れなかった時は、やむなく江戸・大坂へ輸送いたします。その場合は、貴殿がお売りになる場所のお邪魔になってしまいますので、貴殿の材木問屋である、江戸のさいかい屋源兵衛殿、大坂の大津屋九兵衛殿へ売り払い、貴殿のお邪魔には少しもならぬようにいたします。どちらにしまして、必ずお邪魔はいたしません。万が一、お邪魔になった時は、身元引受人として連判している者がまかり出て、少しも貴殿のお邪魔になるようにはさせません。よって、そのために証文を差し上げます。

材木買主

印

古酒屋半兵衛

印

宿加判

近江屋三郎治

印

寛政六年

寅の八月三日

村山利兵衛殿

右、江戸・大坂の宿については、貴殿の御宿に運ぶので、貴殿より送り状一枚をお遣わしくだされ、確かに受け取りました。右送り状にて両家（さいかい屋・大津屋）へ必ず売り払うことに致します。以上

則日（その日・八月三日）

【解説】

石狩山（漁岳札幌山）で伐採された材木は、川の流れを利用して石狩川河口の木場（八幡神社近くの川岸・ホリカムイ）まで運び集められたものと思われる。この文書は寛政六（一七九四）寅年八月三日に材木買主の古酒屋半兵衛と保証人近江屋三郎治が村山利兵衛（五代目）に宛てた証文である。石狩山から村山家が切り出した材木を古酒屋半兵衛が買い付けたこと、古酒屋としては加賀方面で販売したいが、もし買い取り手がない場合は江戸か大坂で売り払うこと、そして、その場合、村山家の販路に迷惑がかからないよう、村山家御用の材木問屋である、江戸の「さいかい屋」、大坂の「大津屋」で売り払うようにすることが記されている。

この文書から村山家は木材輸送や販路の拠点を江戸、大坂に持つていたことが分かる。村山家が石狩山伐木請負事業六年目の安定していた時代の文書である。

謝辞

文書の解説にあたっては、北海道立博物館学芸員の三浦泰之氏に細かくご指導とご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

年表でみる 飛騨屋久兵衛の石狩山伐木事業と村山伝兵衛の関係

年号	幕府・松前藩	飛騨屋久兵衛関係	石狩関係	村山伝兵衛
元禄 13(1700)		・ 初代飛騨屋久兵衛、南部大畑で木材業経営		・ 初代阿部屋村山傳兵衛、松前に渡来。藩御用の廻船業で村山家の基礎を築く。
元禄 15 (1702)		・ 初代飛騨屋久兵衛松前に渡来。福山に支店を構え、松前藩の許可を得て約 10 年にわたり蝦夷地の山々の調査をする。		
宝永 3(1706)	松前藩は石狩・厚田・益毛場所を開く。			・ 西蝦夷地留萌・宗谷の両場所を請負。さらに石狩、厚田、益毛場所を請負い、石狩場所を手配元締として支配の根拠地とした。
享保 4(1719)		・ 飛騨屋久兵衛、蝦夷槍(ひのき)山を白山(有珠山)にひらく。		
元文 2(1737)		・ 二代目飛騨屋久兵衛、この年より 5 年間、尻別山のエゾひのきの伐木を請負。1 カ年の運上金 1200 両。		
元文 5(1740)		・ 三代目飛騨屋久兵衛、尻別山・尾申別山(沙流岳)・悪消山(厚岸)のエゾひのきの伐木を請負。5 年間		
延享 2(1745)		・ 三代目飛騨屋久兵衛、松前地厚沢部目名山を請負う。5 年間、運上金 2300 両。		
寛延 3(1750)				・ 初代村山伝兵衛、宗谷・留萌の二場所を請負う。
宝暦 2(1752)		・ この年頃に飛騨屋久兵衛、石狩から豊平川沿いに定山溪・中山峠をこえて虻田方面に通行。 ・ 厚岸エゾ槍山の伐採不調で石狩山尻別川筋に伐採場所を移す。		
宝暦 3(1753)		・ 三代目飛騨屋久兵衛、石狩山(漁岳附近)の伐木を出願。		
宝暦 5(1755)		・ 三代目飛騨屋久兵衛、石狩山エゾひのき(エゾ松・トド松)の伐木を開始。毎年伐採高 1 万 2 千石、運上金 1 カ年 600 両として 8 年間の請負切替で開始。	石狩山伐木は飛騨屋が請負う。石狩川河口に木場を設け、ここから江戸、大坂に移出した。	・ 初代村山伝兵衛、宗谷・留萌場所請負が満期になる。
明和 2(1765)				・ 三代目伝兵衛「しゃつほろ場所」を請負
明和 3(1766)		・ 飛騨屋の南部大畑店の支配人嘉右衛門が店の金 2800 両の使い込みが分かり解雇する。		
明和 4(1767)		・ 飛騨屋の元支配人嘉右衛門は松前に渡って時の勘定奉行漆原左衛門らと結託して、飛騨屋の請負山を奪おうとたくらむ。飛騨屋は 1 カ年の運上金 1000 両を増額、献金などをして継続をはかったが受け入れられなかった。		
明和 6(1769)		・ 飛騨屋久兵衛、石狩山伐木をやめ松前藩直営となる。		
明和 7(1770)		・ 9 月、江戸の材木商新宮屋伊藤久右衛門、松前藩の手山の取扱を命じられる。手山の支配人南部嘉右衛門は石狩山の軸入を藩に具申。		
明和 8(1771)		・ 松前藩直営の名義をもって伊藤久右衛門、石狩山の伐木を始める。10 カ年契約。運上金 1 万 2500 両、幕府支払下米代上納を条件。	石狩山伐木は新宮屋が請負う。	
安永 2(1773)	松前藩は村山伝兵衛にカラフト島の漁業調査を命じる。	・ 飛騨屋久兵衛、松前藩への貸金 8183 両のうち 2783 両を冥加として献上、残金の引当として来午年より 20 年間、東蝦夷地エモト・アケシ・キイタツ・クナシリ四場所の夏商い場を受け取る。 (飛騨屋 場所請負事業へ転換)		・ 三代目村山伝兵衛 松前藩からカラフト島漁場調査を命ぜられ、持ち船二隻に藩士らを乗せ松前を出帆。漁場調査のかたわらアイヌに新しい漁獲法を教える。(伝兵衛 35 歳)
安永 3(1774)		・ 新宮屋久右衛門に、これより 12 年間、石狩山の伐木を命じる。		
安永 4(1775)	松前藩は飛騨屋に対し、安永 4 年から 15 年間、西蝦夷地宗谷場所を譲渡する。	・ 飛騨屋は西蝦夷地宗谷場所を請負う。		・ 三代目村山伝兵衛、飛騨屋請負の宗谷場所を下請けする。

年号	幕府・松前藩	飛騨屋久兵衛関係	石狩関係	村山伝兵衛
天明2 (1782)				・伝兵衛、福山町年寄兼町奉行所下代を命じられる。
天明3 (1783)		・飛騨屋の宗谷場所請負期間 25年延長。		・三代目村山伝兵衛、宗谷場所を下請けする。
天明5 (1785)				・三代目村山伝兵衛、宗谷に大神宮（現北門神社）を創建する。
天明7 (1787)		・新宮屋久右衛門の石狩山伐木の期限が満了となる。	新宮屋の石狩山伐木の請負が終了する。	・新宮屋久右衛門の後を継いで石狩山伐木の請負が伝兵衛に移ったが国後騒動のため袖夫不足で一か年繰延べられた。
天明8 (1788)			村山伝兵衛が石狩山伐木を請負う。 7年間	・松・トド松の伐木を請負う
文書1 村山家文書「松前様より申渡」（北海道博物館収蔵 収蔵番号 100345 整理番号 215）				
寛政元 (1789)	5月、クナシリ・目梨の乱	・8月、飛騨屋はクナシリ・目梨の乱の責任上、斜里を含む宗谷場所をはじめ騒動の発生したクナシリ、キイタップ、アッケシ、釧路などの請負場所を全部没収される。	江戸本木村町小林店喜兵衛は石狩弁天社に手水鉢を寄進。奥州大畑で作られた。 【石狩市指定文化財】	・9月、三代目村山伝兵衛は飛騨屋請負だった宗谷、国後、霧多布、厚岸、釧路の5場所の請負を命じられる。 (伝兵衛 52歳)
寛政2 (1790)	宗谷場所を三分割し樺太、斜里場所が独立。			・三代目村山伝兵衛、樺太・斜里場所を請負。
寛政4 (1792)	松前地方大暴風雨 ロシア使節ラックスマンが漂流民大黒屋光太夫らを伴い根室に來航。 通称を求める。	☆この頃、三代目村山伝兵衛（55歳）の最盛期。蝦夷地 35 場所を請負い「日本長者番付」に名を残す。		・暴風雨により伝兵衛は持船・雇船を 22 隻を失う。多大な損害。 ・伝兵衛初前藩に費用を負担する。
寛政6 (1794)		文書2 村山家文書「定證文之事」（北海道博物館収蔵 収蔵番号 100724 整理番号 216）		
寛政7 (1795)				・三代目村山伝兵衛、問屋株を取得し城下筆頭の豪商の地位を確立する。
寛政8 (1796)	他商人の妬みによる画策によって松前藩は伝兵衛に差配場所の引上げ、町年寄り、下代役罷免、問所、居所払い、土地家屋、問屋株の取上げを命ずる。		村山伝兵衛による石狩山伐木が終わる。	・三代目村山伝兵衛、8月21日、斜里に弁天社（現斜里神社）を寄進する。 < 一時没落の悲運に遭遇する >
寛政11 (1796)	◆幕府東蝦夷地を直轄 幕府は伝兵衛を官用取扱いにする。 ■松前藩はあわてて住居を伝兵衛に返還、一代侍大広間格に採用する。			< 村山伝兵衛復権し一代侍となる > ・三代目伝兵衛は居所払いを免ぜられ、家屋並びに倉庫敷か所が還付される。 再び宗谷・斜里・樺太の三場所と、苫前、留萌、石狩の秋味直管手付を命じられる。 村山家の繁栄を取り戻す。

参考文献・・・「石狩町誌 上巻」「北海道史年表」「年表で見る村山家の沿革」（いしかり暦 13号）

【説明】
初代飛騨屋久兵衛と初代阿部屋村山伝兵衛は元禄期の同時期に松前に渡っている。飛騨屋は藩の許可を得て蝦夷檜の伐木を主とし、木材事業で開拓を進めた。
一方、初代伝兵衛は松前藩御用の廻船業で村山家の基礎を築いた。
ところが、安永四年（一七七五）飛騨屋が松前藩への貸付金に対し、藩は返還が滞ったことで飛騨屋に一五年間の約束で宗谷場所を譲渡した。飛騨屋の場所請負の始まりである。この宗谷場所は三代目伝兵衛が下請けを任された。天明三年（一七八三）には、飛騨屋請負が二五年延長されたのに伴い、村山家の下請けも延長された。また、石狩山伐木も飛騨屋の経営事情で、天明八年（一七八八）から七年間契約で三代目伝兵衛が請負った。場所請負人の村山家が木材事業を経営した時代があったことが分かる。
寛政元年のクナシリ・目梨の乱では飛騨屋が責任を問われ飛騨屋請負の宗谷・国後・霧多布・厚岸・釧路の五場所が没収された。松前藩はその五場所の請負を伝兵衛に命じた。三代目伝兵衛は樺太・斜里場も含め蝦夷地三五場所を請負う最盛期であった。飛騨屋と村山家の関わりある時代があったことが分かる。

添付資料

(一) 「飛騨屋石狩山伐木図」(部分) (宝暦年間頃の図)

石狩川口付近

川口左岸に、「山方運上屋」「辨財天」「木場」が記されている



〔木場〕

木場は貯木場、もしくは木材の切り出し場のことである。石狩川口の木場は上流(石狩山)で切り出した木を筏に組んで豊平川や現千歳川から石狩川本流に流して川口の木場に集められ、そこから江戸・大坂に運ばれた。

(二) 石狩弁天社の手水鉢(平成二六年三月 石狩市指定文化財に指定)

・所在地 いしかり砂丘の風資料館に展示

・奉納年月日 寛政元年(一七八九)三月

・大きさ 高さ五六cm 横幅六九cm 奥行三五cm

・奉納者 江戸本材木町(現東京都日本橋) 小林店喜兵衛

△彫字▽ 寛政元年酉三月吉日 奉納

江戸本材木町 願主 小林店喜兵衛

(側面) 奥州 南部大畑村

【説明】手水鉢の側面に彫られた「南部大畑村」(現青森県むつ市)は木材業経営者飛騨屋が拠点としたところである。飛騨屋が石狩山伐木の伐木を請負い、南部から木こりを豊平川上流や支笏湖付近の山に送り込みエゾ檜の伐木を行った。伐採は冬に行われ一定の規格に加工し、春に雪解けを期にいかだに組んで流送し石狩川口の木場に集められ、江戸・大坂に移出されていた。このような関係で、この手水鉢は江戸本材木町で材木を扱っていた小林店喜兵衛が飛騨屋の店のある大畑村に手水鉢の作製を依頼し、石狩弁天社に奉納したものと思われる。

しかし、前頁の年表を見ると寛政三年は村山伝兵衛が石狩山の請負を任されている時(天明八年から七年間)と重なる。この手水鉢は明治七年石狩八幡神社が、石狩弁天社のあった現在地に遷祀した時から、平成二五年までの一三七年間、石狩八幡神社の手水鉢として使用されていた。



元石狩弁天社手水鉢

「村山家文書解説」
トド嶋附近漁業慣行概要

村山 耀一

北海道大学附属図書館所蔵 通し番号1291 索引番号1465

P1

ト、嶋附近漁業慣行概要

石狩國濱益郡ハ往古益毛ト称ス原名ヘロフカ
ルシ註場ト記
ヌ宝永三戌年松前藩ニ於テ蝦夷地ニ石狩厚田
益毛ノ三場所ヲ設ケ其家臣ノ領分ト定メタル
ニ方リ下國齊宮氏ノ支配ニ属シ海岸南ハ「ゴキ
ヒル川」北ハ「ル、モツペ」現今ノ
留前ヲ分割セリ而シ
テ高橋源兵衛氏ノ支配ニ移ルニ際シ「イナヲ岬」
以北ヲ増毛領トシ「ホロモイ」ヲ増毛ト改称セシ
ニ由リ益毛ハ濱ノ字ヲ冠ラシメ濱益毛領分ト
公称セリ故ニ沿海ノ陸地ハ「イナヲ岬」イナウシ
エナヲ
ト称ス岬「ゴキビル」川中央ヲ以テ南北他郡ニ接
スルノ境トシ 天保十二年丑年五月道上屋伊達氏
ヨリ宗谷詰所へ差出タル濱益毛

P2

御場所小名里数書上並慶應二卯年庄内藩支配
中徳業請負人本間氏へ交付ナリタル濱益毛領
地圖ニ據リ明治二年八月國郡令
名ノ際邊線決定ノ境界書ニ基ク 海面ハ漁撈實
業ヲ營ミ来リタル方面則チ從前他ニ障碍ヲ與
ヘタルコトナク還タ他ノ妨害ヲ被ムリタルコ
トナキ範圍ニシテ「ト、嶋」附近ハ該方面ニ胚胎

セリ松前藩ニ於テ場所ヲ設ケタルヨリ年所ヲ
經ルコト百九十年ノ後明治二年八月十五日ヲ
以テ該領分ニ濱益ノ郡名ヲ命セラレ石狩國ニ
編入セラル、モ高橋源兵衛氏支配後未タ曾テ
領分ノ境域ヲ變更スルコト無シ 石狩天塩國界
標八明治五年
開拓使ニ於テ小貫直和氏ヲ派シテ建設スル地
ナリト雖モ字イナヲ岬以前凡二十町ヲ取ル字
ヲフイニ現在スルハ之カ憑據ヲ詳ニセヌ茲シ
イナヲ岬ヲフイ同ハ海岸ノ岩石岬域トシテ建
標ノ便宜ヲ得ルカハスシテ現 漁獵ハ宝永年度
在ノ地ニ假設セラレタラン乎

以來三場所ノ一タルコトハ歴史ニ徴シテ顯著
ナリト雖モ今ヤ數百年ノ後ニ在リテ土人ノ聚
落タル當時ノ狀況ハ之ヲ詳悉スルヲ得ス降リ
テ寛政年間ニ在リテ松前藩ノ所領中漁業請負
人タル伊達林右衛門氏營業以來ノ沿革慣行ヲ
叙スルニ伊達氏ニ於テ漁撈ノ種類ハ鯨鮭鱒海
鼠鮑昆布ノ六種ニシテ其運上金ハ五百九拾兩
ヲ昇ラス慶應ノ度莊内藩ノ所領ト為ルニ当リ
請負人伊達氏ハ本間勇助氏ト更替スルモ漁撈
ノ種類ハ異同アルコトナク獨リ運上金ハ千五
百九拾兩ニ増加スルノミ然シテ伊達氏請負ノ

P3

頃濱益毛領北方ノ境界「イナヲ岬」以南「雄冬」ト称
スル部落ヲ撰定シテ 雄冬八元一村ナラシ明治
十五年二月群別村ニ合併
ス 通行家ヲ設ケ三助ナルモノヲシテ之カ留守
番タラシメ常ニ差網業ヲ以テ其生計ニ充テタ
ルモ漁法整ハスシテ収利極メテ僅少ナレハ収
支相償ヒ難ク茲ニ於テ「雄冬」沖ナル岩礁近傍ニ
游泳出没スル海馬ヲ捕獲シテ生計ノ缺乏ヲ補

ハシムルニ若カサルヲ發見シタリ尔来本間氏
請負ノ業ヲ襲クヤ慶應三卯五月羽後人佐藤重
吉ヲシテ通行家番人タラシメ猶ホ差網並海馬
漁ヲ營マシメタリシカ王政維新ニ際會シ制度
ノ變遷アルニ遵ヒ明治五申年重吉ニ於テ更ニ
海馬漁ヲ出願シテ公許ヲ得随テ冥加金トシテ
年額拾圓ヲ納付シ同二十一年迄斯業ヲ繼續セ
リ是レハ則チ「雄冬」沖岩礁ヲシテ「重吉トゞ嶋」ト
通称スルニ至レル源因ナリトス曩ニ本道廳地
理課ニ於テ調製セラレタル地形圖ニ右岩礁
ヘ「トゞ嶋」ト字名ヲ掲ケラレタルハ蓋シコノ通
称ヲ採納セラレタルモノナラン乎又鮑海鼠漁
ハ伊達氏請負ノ時ニ在リテハ其製品ヲ長崎港
ニ回送シ支那ニ輸出スヘキ種類ナレバ幕府御
用荷物ト唱ヘ入稼人ノ漁獲ヲ禁シ専ラ受負人
ノ直營漁撈ニ属サレタリ当時「雄冬」沖ノ岩礁ハ
單ニ「雄冬ノ嶋」ト称シ最モ鮑貝海鼠ノ栖息ニ適

P 4

シタレバ之カ収穫モ亦多量ナリシコトハ現ニ
渡嶋國松前郡福山町ニ住スル片桐市作氏ヨリ
申継キヲ得タリ 片桐氏八年齡八十三歳ニシテ
伊達氏濱益毛類漁業請負稼中
二十三年間 本間氏請負ノ業ヲ襲クヤ鮑漁ハ入
稼人ヲ募リテ運上金四百兩ヲ徴シ貸付漁場ト
ナシ渡嶋國松前郡福山生符町総社堂町、吉岡村
漁夫ヲシテ毎三年ノ輪捕ヲ訂約シ「雄冬」通行家
番人重吉ヲシテ密漁者ヲ監セシメタリ明治二
巳年十一月請負人廢セラレ開拓使濱益出張所

ヲ置カレ同三年更ニ東京芝増上寺ノ支配ト
ナルモ本間氏ノ漁業ハ依然斷行シ同五申年増
上寺支配ヲ廢シ再ヒ濱益出張所ヲ置カレ現品
稅施行アルニ至リテ鮑貝輪捕ノ訂約ハ消滅シ
一般各自ノ捕獲ヲ許可セラレ現ニ濱益郡漁業
組合ハ鮑突期節制限ヲ規約シ本道廳長官ノ認
可ヲ受ケ實施スル所ナリ又鯨漁ハ往昔「雄冬」沖
ニ於テ豊多ナリシコトヲ傳フルモ口碑ニ止リ
之ヲ温メルニ由ナシ明治九年群別村長谷川忠
助船頭宮本里四郎伊藤福次郎松山石松等ヲ始
メ建網拾余統ヲ準備シ「トゞ嶋」附近ヘ追鯨漁ヲ
試ミタルハ維新後該方面ニ於ル鯨漁ノ濫觴ト
ス爾來年ヲ追フテ出漁者ヲ増加スルモ當時粹
曳ノ困難アリテ多數ノ漁具ヲ操縦スルヲ得サ
リシカ近年較ヤ輕便ナル川崎船若クハ汽船ヲ

P 5

利用シ漸次組合ヲ舉ケテ營業スルノ容易ナル
ニ至レリ偶々明治二十四年五月組合員出漁中
暴風ニ遭遇シ隣郡增毛地方ニ避難シ該嶋ノ漁
況ヲ談話シタルニ因リ增毛郡組合ニ於テ始メ
テ「トゞ嶋」附近一帶ノ海面ハ鯨魚ノ群來アルコ
トヲ聞知シ突然汽船大漁丸ヲ率ヒテ浸漁を試
ミタリ右濱益郡組合徒來營業區域ヲ蹂躪セ
ラレタルノ起頭ナリトス此際我カ組合ハ穩和
ニ制止スルモ彼ハ之ヲ拒マスシテ退散スルノ
ミナリシカ逐年網數ヲ加ヘ且種々ノ謀畧ヲ逞
フシ遂ニ我カ組合建網場タル字「タンバツケ」沖

迄覬覦スルノ勢況ヲ呈スルニ至リ年々多少ノ紛争ヲ絶タサルモ「トゞ嶋」ノ所屬ヲ争ヒ漁權ヲ主張スルコトナク單ニ漁利ヲ貪ルニ外ナラズ既ニ昨二十九年三月ニ於テ兩組合頭取ノ間ニ於テ照復ノ末増毛郡漁業組合ハ濱益郡漁業組合員ノ營業上障碍ヲ為スカ如キモノ無之様懇諭セシ趣確答アルニモ拘ラス豈料ンヤ同年五月二十一日「トゞ嶋」附近沖合ニ於テ彼我ノ衝突アリ為メニ該漁期ハ各所轄郡衙吏員並警官ノ出張アリ懇諭スルニ官邊調査ヲ要スベキ廉アルニ付当期限ハ増毛郡漁業者ノ入込ヲ斟酌スベキノ旨ヲ以テセラレタリ此際我カ組合ニ於テ官諭ヲ峻拒スルトキハ讎テ彼カ暴挙ヲ煽動

P 6

スベキ哉ノ虞ヲ抱キ臨機不得止シテ「トゞ嶋」附近追鯨漁ニ限り官諭ニ應シ偏ニ調査ノ結了ヲ寬望 スルノミ然ルニ増毛郡漁業組合ハ陰カニ「トゞ嶋」ノ所屬未定ナルノ論端ヲ惹キ起シタルニ依リ官辺ノ調査ハ荏苒一星霜ヲ經過シテ決スル處ナク仍等未整理ナル旨ヲ以テ重ネテ懇諭アルノ末本年ノ漁期モ亦客歲漁期ノ例ヲ強行セラル、ニ至レリ從來該嶋附近ニ於テ彼我入會稼業ノ慣習ハ絶テ之レ無ク特ニ客歲以降強テ官諭アルニ對シ一時我カ漁業組合ノ素望ヲ撓メ復タ慣行ニ據ラス臨機入込稼行ヲ斟酌シ剩ヘ巨万ノ漁利ヲ割与シタルニ止リ二十余年連綿シタル我カ漁權ハ毫厘モ傷害セラレス

正ニ我カ組合ノ享有スル處ナリ

前叙ヲ約言スルトキハ「トゞ嶋」並附近沖合ハ「雄冬」通行家番人重吉ナルモノ海馬ヲ獵護シタルニ原因セル名稱ヲ不朽ニ傳ヘ其岩礁ハ幕府御用ノ干鮑煎海鼠製造ノ資ニ充ヘキ水族ノ栖息ニ適ヒ請負人直接ニ營業シ来リタル漁場ナリ鯨鯨ニ関シテハ明治九年以降濱益郡漁業組合ノ追鯨區地トシテ十有餘年間他ノ妨碍ヲ被ムリタルコトナク實ニ濱益郡漁業者ニ於テ公認ヲ經タル既得ノ漁權ヲ行使スルコト才得ベキ範圍タルコトヲ疑ハス加旃其所属ニ於テハ海岸

P 7

國郡界タル「イナヲ岬」ヨリ一望シテ我カ國郡ニ隸屬スヘキヲ疑ハザルハ「イナヲ岬」「雄冬」間ノ距離二十町程ノ海面ニ露出ノ嶋此則チ岩礁ナレハ測器ヲ要セズシテ元濱益毛領分タルヲ測斷スルニ足レリ

明治三十年九月 日調

北海道石狩國
濱益郡漁業組合

【解説】

この文書は北海道大学附属図書館に所蔵されている「村山家文書」に残されているものである、明治三〇年九月に当時の濱益郡漁業組合が作成した雄冬のトド嶋附近の慣行をまとめたものである。

松前藩は宝永三年（一七〇六）、西蝦夷地に石狩、厚田、マシケ（益毛）の三場所を設けた。このうちマシケ場所は現在の石狩市浜益区と増毛町を一円としたものであった。正確な区画として、北はルルモツペ（留萌）境と南はトミサンベツのアイカッブ岬までとされ、広い区域であった。

松前藩は浜益川河畔に生息していたアイヌ人の全戸をへロキカルウシ（元モイ村・現浜益支所のある地区）に移転させ、この地にマシケ場所という名称を付け、藩の知行地とし、知行主は松前藩土下国要季が当たり、幕末時期まで下国家が継承した。

天明五年（一七八五）、松前藩はマシケ場所を二分し、雄冬岬北の地ホロトマリにマシケ場所を設け、雄冬岬から南、トミサンベツ、アイカッブ岬までの区域をマシケにハマの字を加えてハママシケと称した。

寛政二年（一七九〇）、ハママシケ場所の区域は南は送毛、尻苗を越えてゴキビル川までと改められ、したがってハママシケの区域は北は雄冬より南は濃昼までとされるようになり、伊達林右衛門が両場所請負った。

浜益海岸にはむかしからトドが多数出没していたようで、雄冬もその群棲する場所であった。寛政八年、ハママシケ運上屋は雄冬に通行家を設け、三助という者を雇って番人とした。三助は春には鯨刺網を行い、その暇を見てはトドの猟をして生計の補給をしていた。

安政六年（一八五九）、蝦夷地の警備を目的として幕府の命を受けた庄内藩がハママシケに本陣を構えた。慶応元年（一八六五）五月、ハママシケ場所請負人伊達林右衛門が場所請負を放棄し、中川屋本間

要助が場所を請負った。中川屋は羽後の住人佐藤重吉を雇って雄冬通行家番人を行わせていた。佐藤重吉は鯨刺網と、トド猟を許可され前の番人三助同様鯨刺網のかたわら矛を操って雄冬沖の島（岩礁）でトド猟を行っていた。

佐藤重吉によるトド猟は、明治二十一年まで続いた。重吉がトド猟をした島は「重吉トド島」と呼ばれ、トド島（海馬島）に継承されている。

明治の初年頃の浜益の鯨漁は前浜沖の建場で網を建てて漁をしていたが、鯨の乗網率がかんばしくなく、建場所を離れて他の地域に鯨を追って漁業を行う追鯨漁が明治九年頃から浜益でも取り入れるようになり雄冬の「トド島附近は鯨の好漁場」であった。このトド島の追鯨漁を巡って浜益村と増毛村の鯨漁師の間で紛争がおこった。これを後に「雄冬事件」と称している。

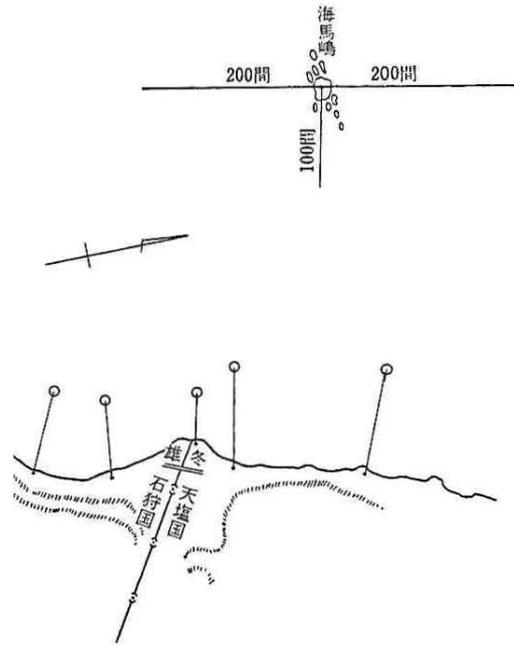
この事件は明治二四年（一八九一）五月、トド島付近に追鯨出漁した浜益漁業者が、たまたま南東の強風に遭い、増毛領内雄冬に避難し風を待っていた。この避難した浜益の漁夫と増毛領雄冬の漁民の間で、避難の状況や鯨漁の状況について語り合い、浜益漁夫は「トド島附近は鯨の好漁場」という話をした。この話を聞いた増毛領雄冬の漁業者は風を見て同島附近に出漁投網して見ると、予想以上に鯨の群来で最高の漁場であることを確認した。しかし、本来増毛の漁業者がトド島附近で投網することは、密漁行為であり、浜益の抗議で退去した。しかし、しばらくするとまた出漁ということで、紛争が絶えることがない事態に発展した。

当時の古老の話によると、追鯨出漁船には小石を積み増毛漁船との簡易石合戦を行い、また船頭の中には日本刀を所持して出漁したともいわれていた。明治二十九年（一八九六）三月、浜益漁業組合は、この事実を管轄の札幌外九郡長に訴え、その制裁を仰ぐことになった。しかし、年度内解決には到らず、翌明治三〇年（一八九七）一〇月、両漁協はトド島地域を「雄冬海馬嶋追鯨漁業入会区域」とする調停案

を定め、入会規約を締結し、長期にわたって続けられた漁場紛争も解決された。

この文書は「トド嶋」に関わる鯨漁の歴史的経緯が記されたものであり貴重なものと考えられる。とくに浜益領と増毛領の境界が「イナヲ岬」と記されていることは『浜益村史』からも確認できる。

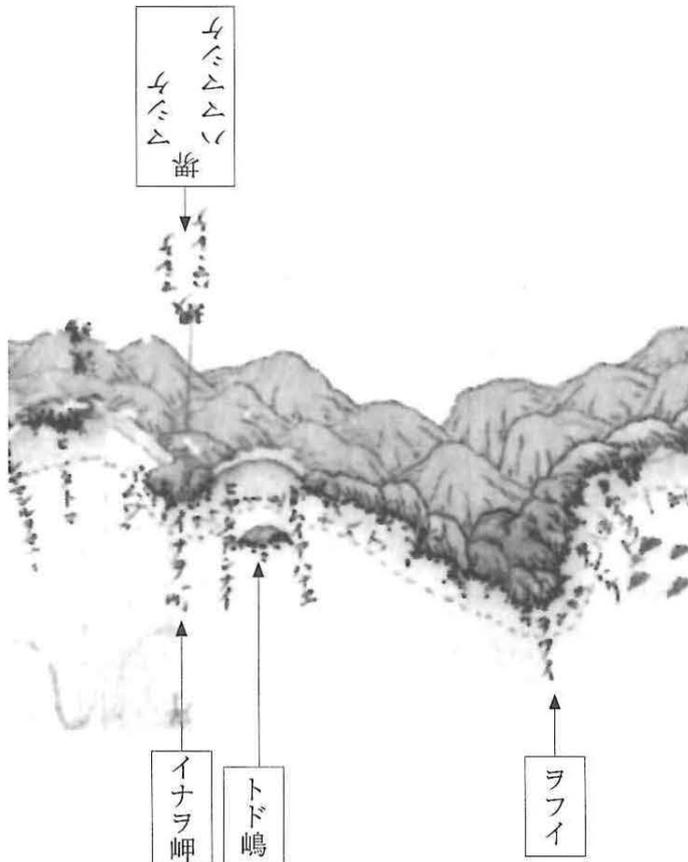
※文書の行書体で表した部分は、説明を加えた部分で割注で表記されている部分である。Pの数字は文書の罫紙の順番である。



追鯨入会漁業区域図
 (『浜益村史』より1980)

「蝦夷地理数書入地図」(天保年間)

早稲田大学図書館蔵



【説明】

ハマシケ領(浜益)とマシケ領(増毛)の境界に当たる「イナヲ岬」は、現在の雄冬地区内の浜益区、増毛町の境界地点に一致する。

石狩川沿いのアイヌ地名 (2) マクンベツ

井口 利夫

(1) マクンベツは何処の地名か

「マクンベツ」と聞いて直ぐに思いつくのは、石狩河口橋の東側に広がる河川敷内の「マクンベツ湿原」のことでしょうか(図1)。マクンベツ附近の現在の地形)。この「マクンベツ」の付く名称からは、「湿地」のイメージしか浮かばないかもしれませんが、「ベツ」がついているので分かるとおり、元々のアイヌ地名は川の名だったはず。石狩川の舟運にたよっていた江戸時代の記録には「マクンベツ」はよく出てくる地名なのですが、明治時代以降の石狩川の治水工事(特に昭和6年竣工の捷水路工事)後はこの辺りの地形がすっかり変わってしまったので、かつての面影をしのぶ痕跡はほとんど残っていないようです。

石狩河口橋のすぐ上流の運河につながっている、旧石狩川の跡の池のような部分が「真勲別川」と名付けられています。これはアイヌ



図1 マクンベツ附近の現在の地形

1/5万分図「石狩」H 20 修に加筆。かつてマクンベツのあった湿地を横切るように石狩川の堤防が出来ていて、堤防の内側に残された湿地を、現在はマクンベツ湿原と呼んでいる。

地名マクンベツを残そうとした配慮なのかもしれませんが、此処は旧石狩川そのもので、元々の地名ではありません。

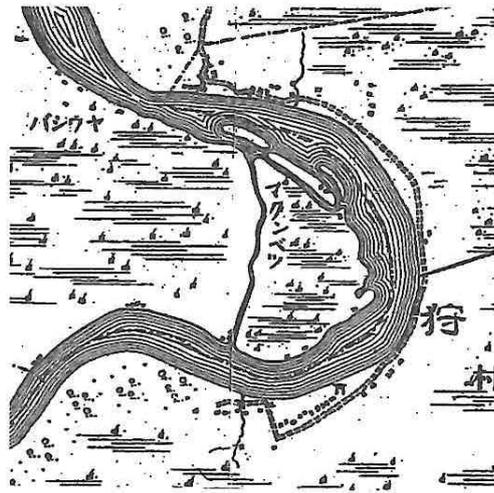


図2 明治24年(1891)頃の地形

「北海道假製五万分図/石狩」石狩川が大きく曲がって囲まれた湿地の中に「マクンベツ」と書かれた川があるのが分かる。

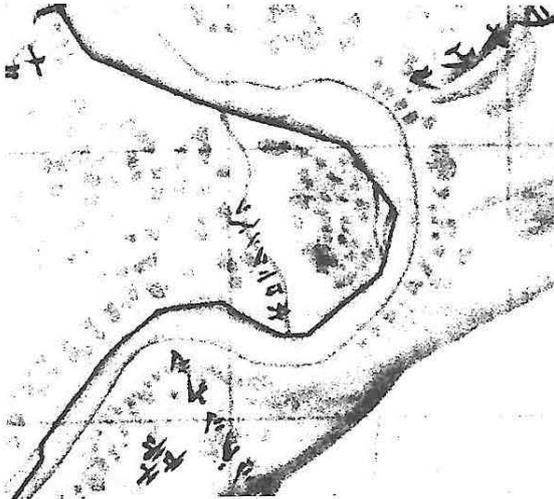


図3 「伊能問宮図」

(1800年代に魔宮林蔵が測量)

図2と同じ川に「ホロマクンベツ」と書かれている。

「マクンベツ」と書かれているのが分かります。これが元々の川の名だったようで、この川の一部は、どうやら現在もゴルフ場の中にわずかに残っているようです。

前回にも紹介した伊能問宮図(図3。約二百

石狩川改

修工事前の

明治二〇年

代の地図(図

2) を見る

と、石狩

川が大きく

曲がって囲

まれた湿地

の中に川が

あって、こ

こに「マク

ンベツ」と書

かれている

のが分か

ります。これ

が元々の川

の名だった

よう

で、この川

の一部は、

どうやら

現在もゴル

フ場の中

にわずかに

残っている

よう

です。

前回にも

紹介した

伊能問宮

図(図3。約

年前、文化一〇年代の間宮林藏の測量による)にもこの川が描かれていて、ここでは「ホロマクンベツ」と書かれています(この図の地名に何故「ホロ」が付いているのかは後で述べます)。

(2) マクンベツとは何か

アイヌ時代の元々の地形が分からなくなってしまうたのでは「マクンベツ」というアイヌ語の地名がどういう意味だったのかを推測するのは難しくなります。

山田秀三の『北海道の地名』(以下、山田地名)には石狩市のマクンベツはありませんが、宗谷の幕別(マクンベツ)と十勝の幕別(まくべつ)町の項に「マクンベツ」の解説があります。

《宗谷の幕別》

……道内各地にマクンベツ(注1)があったが、その多くは本流から分かれた小分流で、少し行つてまた本流と合している川筋の名である。それを「山側に入っている川」という意味でマクンベツと呼んでいた。……(傍線Ⅱ井口)

注1 アイヌ語では清音と濁音の区別がないので、「ベツ」でも「ペツ」でも意味は同じです。ベツのアイヌ語 pet は、「t」で終わっていて母音がありません。アイヌ語の表記では「t」で終わる場合は小文字の「t」で表すのが慣例です。以下、アイヌ語そのものを表す場合は小文字で書くことにします。

《十勝の幕別町》

……少し前までは、この字を書いて「まくんべつ」と呼んでいたのだが、後に漢字に引きつけられて現称になった。この町内にあったマクンベツ「mak-un-pet・後(山の方)に・ある(入っている)川」から出た名であるう。

大川の分流が山側を回ってまた本流に合している場合に、その

分流をこの言葉で呼んでいたようで、……大川筋には方々にあった名で、すぐ下流、豊頃町に入った処にもあったが、幕別町の名のもとになったマクンベツの記憶はひどくおぼろげになっている。……

地形としての意味

町名の元になった幕別町ですら、元のアイヌ語の地名についての記憶がおぼろげになっているようですが、幸い「マクンベツ」の地名は道内各地に残っていて(注2)、その共通する地形は山田秀三の解説にある

「本流から分かれた小分流で、少し行つてまた本流と合している川筋」ということのようにです。

注2 「マクンベツ」の地名は永田方正の『北海道蝦夷語地名解』(以下、永田地名解)では7カ所採録、松浦武四郎の『東西蝦夷山川地理取調図』(以下、松浦山川図)でも10ヶ所以上採録されています。

山田秀三の解説と同じ内容を、明治二五年に岡部方幾がとても分かりやすく図解しています。なお、岡部方幾はマクンベツの日本語訳を「分流」としていますが(図4)、どうもピッタリの訳語とは思えません。

Mak un pet マクンベツ 分流

大河の本流より分れて又た再び本流に合する川をマクンベツといふ



図4 マクンベツの語義
(岡部方幾 / 明治25年) 田実(池田一九九六)が例から「二股川」と書き、早田国光(二〇〇八)

は帯広の例で、本流から外れて寄り道をしてから再び合流していることから「道草川」と書いています。しかし、石狩市のマクンベツの場合、図で見るとおり石狩川が大きく蛇行する部分にあつて、古くから船路の近道として利用されていたので、早田の云うような「道草川」ではなく、むしろ「近道川」です。

いずれも各地に共通するようなピッタリの訳語になっていません。一語で表す適当な訳語が無ければ、少々回りくどい表現になりますが、岡部方幾や山田秀三の解説のように説明する他ないでしょう。(小生は密かに「出戻り川」がピッタリではないかと思つていますが、どうも語感が良くないのか、御賛同を得ていません)。

山田秀三は「マクンベツ」のアイヌ語の語源について、

マクンベツ = mak-un-pet

「後(山の方)に・ある(入っている)・川」から出た語と説明しています。

知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』(以下、知里小辞典)では、

mak mak うしろ、奥、山手。(対→sa)。

mak-un マクン 《完》奥にある(奥にゆく)、後にある。

とあります。山田秀三の「山側に入っている川」という解説は、この知里真志保の語源解説を踏まえているようですが、この地名の説明としては意味がピッタリしないと思います。

現在のアイヌ語の意味と地名の付いた古い時代の意味とは変わってしまったのかもしれませんし、「マクンベツ」というアイヌ語は長い間に「普通名詞」として使込まれて、語源とは少し離れた意味の地形を指す言葉になっているのかもしれない。

マクンベツは古い石狩川の跡

アイヌ語の語源解釈はしっくりしないとしても、石狩川のアイヌ地

名「マクンベツ」が、本流から分岐してまた本流に合流するような支流の地名であることは確かでしょう。

なお、石狩市のマクンベツは洪水などのために一時的に出来た単なる分流ではなく、古い時代の石狩川本流の痕跡だったことは学術調査の結果から

も明らかです(図5)。

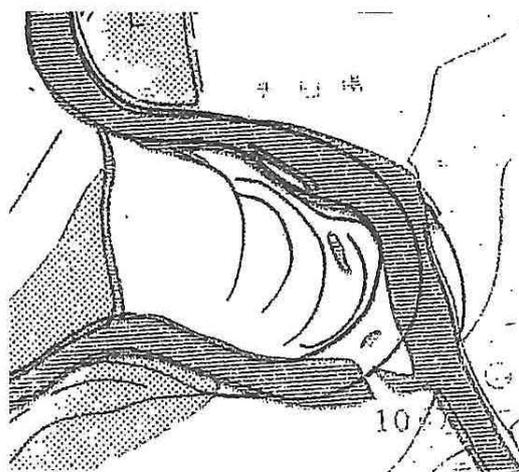


図5 マクンベツ附近の石狩川の河道の変遷
「河道変遷図」(科学技術庁 1961)

何本かひかれた曲線は石狩川の古い河道の跡で、マクンベツが石狩川の古い時代の河道だったことがわかる。

また古くから、石狩川の古い河道だったという伝聞があつたようである。『遠山村垣西蝦夷日記』(文化三年(一八〇六)。以下、

遠山村垣)にも、

「マクンベツ 川幅七八間

右石狩の古川にて、当時川瀬の右の方(注Ⅱ左岸)に有之、本川迄の間雑木□□菰等生ひ立候洲有之、船右川を漕抜て凡六七町にて本川え出、……(傍線、注Ⅱ井口)」

とあり、石狩川の昔の流れであつたと伝えていきます。

このような起源を持つ川ですから、百年や二百年で容易に流路の変わるようなことは無かつたと思われれます。江戸時代の旅行者は遠回りになる本流側を通らず、ほとんどはこのマクンベツの方を通っています。川の大きさについての記録もいくつか残されていますが、

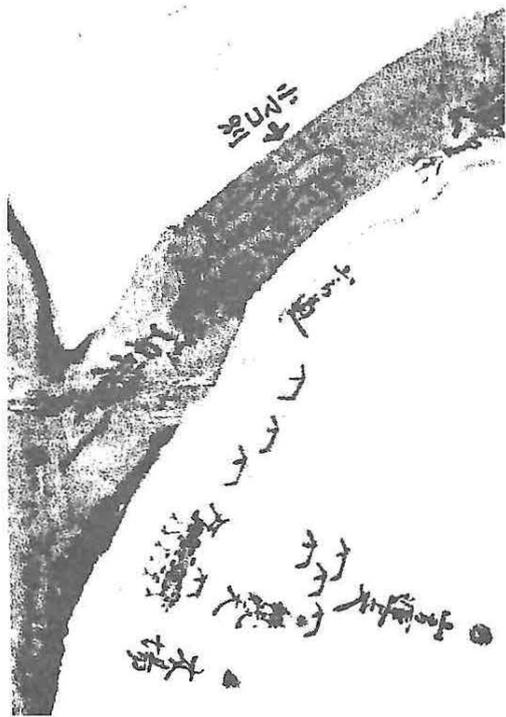


図7 「飛騨屋久兵衛石狩山伐木図」

下呂町藏。宝暦年間（1750年代）の図。島は一つしか描かれていないが、本流側に「小マコ別」と書かれている。



図6 「西蝦夷地イシカリ御場所略絵図」

安政年間の図。「蝦夷全地」より手写。島が二つ描かれていて、「ホンマクンベツ」と書かれている。

(遠山村垣) (再航) (観國録)

川幅は 七、八間・十間・二間

長さは 六、七町・二十丁・十町以上

とあって、幅は4〜18m、長さは1〜2kmと、数字はかなりばらばらです。

(3) 「ポロマクンベツ」と「ボンマクンベツ」

伊能間宮図にある「ホロマクンベツ」は旅行記などに「マクンヘツ」「まごべつ」「マコンベツ」などとして頻繁にでてくる川と同じ川を指していることは疑いありません。

では何故、伊能間宮図では単にマクンベツではなく、ホロマクンベツと「ホロ（ポロ）△ポロ＝大きい」が付いているのでしょうか。

この理由をいろいろ調べてみたところ、江戸時代のこの附近の細かい地形や忘れられていた幾つかのアイヌ地名があることが分かり、それぞれの場所を復元する手掛かりも得られました。

ボンマクンベツ

古文書や古図の中に「ホンマクンヘツ」「ほんまごべつ」という地名を見かけることがあります。

安政年間（一八五〇年頃）の「西蝦夷地イシカリ御場所略絵図」（図6）に「ホンマクンベツ」とあり、この附近にこの地名があったことが分かりますが、この図だけでは何処を指す地名かは判断ができません。

先出と同じ文化三年の遠山景晋の別の記録『未曾有後記』には、石狩から遡上する途中の地名として、

「……とくひら・よこしべつ・まごべつ・ほんまごべつ・とうやうし・はつしやふ・びとい・しかなぬ、とうべつ、といしかり等の名有。……（傍線＝井口）」

とあります。地名の順からみて「まごべつ」は「マクンベツ」、「ほん

まごべつ」は「ホンマクンベツ」の訛りのように思われます。

また宝暦年間（一七五〇年代）とされる「飛騨屋石狩山伐木図」（図7）には島は一つしか描かれていませんが、島の本流側に「小マコ別」と書かれています。

これから考えると、飛騨屋石狩山伐木図にある「小マコ別」の「マコ別」はマクンベツで、「小」はボン＝ホンの和訳と考えれば、「小マコ別」は「ボンマクンベツ」を和名化した地名と考えてよさそうです。したがって、「ほんまごべつ」も「小マコ別」も、恐らく各図にある本流側の方の川名だったに違いありません。

ボン・マクンベツは、マクンベツに対して「小さい・マクンベツ」の意味で、本家のマクンベツに対してこう呼び分けていたのでしょうか。

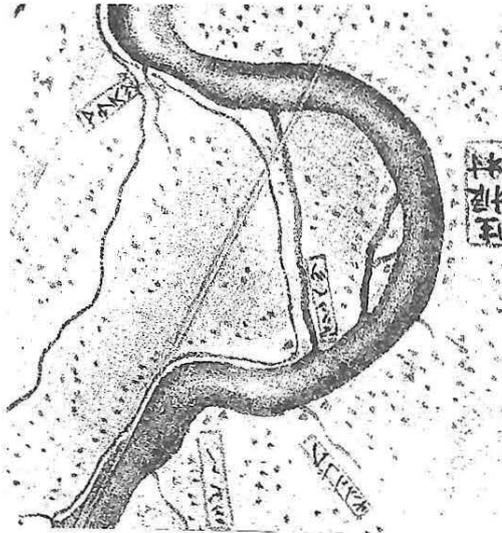


図8 「札幌西部図」（明治6年）

「マクンベツ」と書かれた川の東側（右側）にも小さな川が描かれている。

明治六年の「札幌西部図」（図8）を見ると、川曲がりによって囲まれた土地（このような土地をアイヌ語でヌタブという）が、マクンベツによって分けられて島（洲）になって

（洲）は大小2つの島（洲）に分かれていたことが分かります。この小さな方の川の名が「ボンマクンベツ」だったのでしよう。

この「ボンマクンベツ」は『陸測明治42年修正測図』（図9。以下陸測M42修）にも、『陸測大正5年測図』にもはっきりと描かれていて、昭和初年に大々的に行われた石狩川の改修工事までは確かに残っていたようです。

念のために前出の伊能間宮図（図2）を改めて見直してみると、このボンマクンベツに相当する小川はしっかりと描かれていることが分かります（2本も描かれている）。さらに江戸時代の各図を調べてみると、文化末年とされる「イシカリ川之図」（藻岩北小蔵。図10）や、前出の「西蝦夷地イシカリ御場所略絵図」（図6）にも描かれているのが分かります。図6、10には島が2つ描かれているので、島と島と



図9 明治42年（1909）頃の地形

（陸測明治42年修正測図 / 石狩）

札幌西部図から36年後の明治42年の測量図にも「マクンベツ」「ボンマクンベツ」が残っているのが分かる。の間がこのボンマクンベツを表しているのかもしれない。マクンベツがポロマクンベツと「ポロ」を付けて呼ばれた理由を考えてみます。古い時代には、本流側のボンマ

クンベツという地名が網引場などの地名として引き合いに出されることが多かったのではないだろうか。

そのために本家のマクンベツの方も、ポンマクンベツと区別するため、わざわざ「ポロ」を付けてポロマクンベツと呼ぶことが多かったのではないだろうか。間宮林藏が測量調査した当時の状況は、丁度

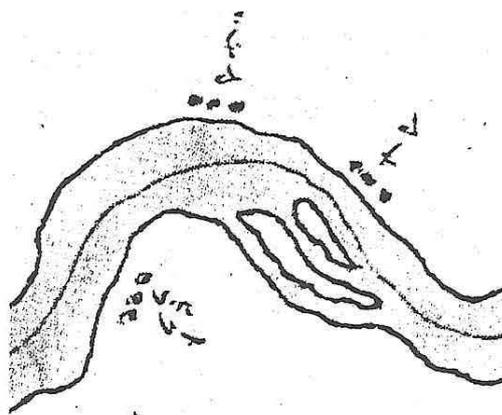


図10 イシカリ川之図

(藻岩北小藏)文化末年頃の図。

川曲がりの場所に島が二つ描かれている。大きい島の左下の川がホロクンベツ、島と島の間の川がポンクンベツ。河岸の点々はアイヌ家の場所を示す。

そういう時代だったの
でしょう。

その後、

漁場名など

にはポンマ

クンベツの

代わりに、

後出のよう

に洲の名前

の方のホロ

モシリとか

モシンレプ

の方が使われるようになって、ポンマクンベツの地名が徐々に使われなくなつて、ポロ・ポンと呼び分ける必要も無くなり、本家の方も単にマクンベツと言うだけで不便が無くなったのではないかと想像されます。

(4) マクンベツ附近の地名の復元

ポロマクンベツやポンマクンベツの他にも、この附近にはアイヌ地名や、アイヌ地名を流用したらしい漁場名などがいくつかが散見されます。この内には現在では全く分からなくなつてしまつた地名もあるようです。以下に、そうした地名も探し出して、それぞれの地名がかつ

てあつたはずの場所を検討してみました。

まず永田地名解にある「モシリレプ」「ポロモシリ」「ポンモシリ」という地名について触れておかなければなりません。

これらのアイヌ地名は、永田地名解では「石狩川右岸」の項の末尾に載っているもので、マクンベツやポンマクンベツに係る地名とは気がつかない人がほとんどだと思います。

Moshiri (注1) rep モシリレプ 沖島(石狩河口ニ在ル島ナリ

此島ノ北流即チ「ワクカオイ」ナリ、

石狩及上川ニテハ川ヲ沖(レプ)ト

云フ)

Poro moshiri ポロモシリ 大島 石狩川ノ中島

Pon moshiri ポンモシリ 小島 同上

注1 永田方正は moshiri (語尾が母音) と書いていますが、アイヌ語の

表記としては正しくは moshir (語尾が子音) です。

また、moshir-rep になると moshir の r の後に rep の r が続くので、

moshir の r が音韻転化して n になり、moshir-rep ≡ モシンレプと発

音されます。後出のように、江戸時代の記録にも「モシンレプ」と書

かれていますから、地名としてもそのように呼ばれていたことが確認

できます。

永田方正はこの3つの地名を石狩川(石狩郡)右岸の最後に載せているのですが、一方「モシリレプ」の説明では、河口近くの旧渡船場の付近の洲の名前と考へてもいたようです。また、後の2つの地名については場所の説明もなく、当時(永田方正が石狩郡のアイヌ地名調査したのは明治二二年のことです)既にどこの地名か分からなくなつていたのでないでしょうか。



図 11 マクンベツ附近の川筋図
松浦武四郎「川々取調帳」より部分抄写。川筋はかなり変形して描かれている。原図は川筋が太く描かれていて文字が見にくいので、川筋を細くして写した。

「ポロモシリ」と「ボンモシリ」

マクンベツ附近のその他の地名について、松浦武四郎の「川々取調帳」にある石狩川の川筋図(図11)を見てみます。

この図にある「マクンヘツフト」「マクンヘツチャロ」については、先に紹介した山田秀三の十勝の幕別町の解説の後半に、

「その上流側の分流する処をチャロ(char 口)で、下流の合流する処をプツ(pu 口)でいう……」

とあるとおり、「ヘツフト(ベツプツ)」は下流側の川口(川尻)、「ヘツチャロ(ベツチャロ)」は上流側の川口を意味します(注2)。

注2 川口(川尻)はアイヌ語でベツプツ(petpu(川・口)又はベツプトウ

petpu(川・その口)と云います。

マクンベツのように上流・下流の両方に口の有る場合、上流の方の

口をベツバル(petpar(川・口)又はベツパロ(petpar(川・その口)、

あるいはベツチャル(petchar(川・口)又はベツチャロ(petcharo

(川・その口)と呼んでいたようです。

石狩地方で同様の呼び方のある例をあげると、

〈モエレ沼〉

入口〓モエレヘツハロ(※ヘツ〓ベツ、ハロ〓パロ)

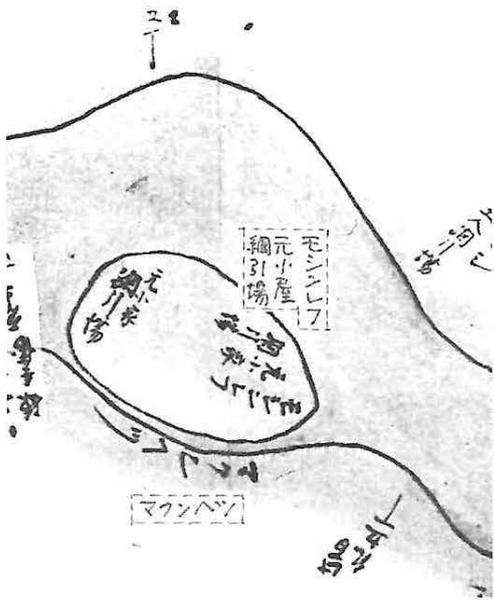


図 12 「安政五年年書上絵図」(1858年)
札幌中央図書館所蔵図に一部加筆。(村山家文書に同一図がある。)
「モシレツ」が網引場(漁場)の名前として使われていたことが分かる。

出口〓モエレヘツフト(※フト〓プトウ・プト)

〈江別川(千歳川の長都沼より下流の旧川名)〉

入口(長都沼)〓イベツパロ

出口(石狩川への合流点)〓イベツプツ

があります(池田一九九六、井口二〇〇九)。

なお、この図には「マクンベツ」の地名がありませんが、上述のとおり、下流側川口に「マクンヘツフト(マクンベツ・その川尻)」、上流側川口に「マクンヘツチャロ(マクンベツ・その川口)」とあるので、この川がマクンベツそのものであることに紛れはありません。

川筋が変形しているので分かりにくいですが、「ホロモシリ」の右側の「ホンモシリ」を囲んでいる川が「ボンマクンベツ」でしょう。つまり、マクンベツとボンマクンベツにはさまれた大きな島(洲)が先の永田地名解に出ている「ポロモシリ(大きい・島)」で、ボンマクンベツと本流に挟まれた小さい島(洲)が「ボンモシリ(小さい・島)」と呼ばれていたことが分かります。



図13 「西蝦夷地石狩場所絵図」

安政年間の図。

川岸に「マクンベツ」とあり、島には「モシンレフ」とある。

モシンレフ

永田地名解の「モシリレフ」は、注記したように普通は「モシンレフ」と発音されます。したがって、「安政五年書上絵図」(図11)のマクンヘツのそばの島に書かれている「モシンレフ／網引場／元小家」の「モシンレフ」や、安政四年頃かとされる「西蝦夷地石狩場所絵図」(図12)のマクンヘツのそばの島に書かれている「モシンレフ」は、正にこの地名を指していると思われる。

先に挙げた永田地名解のモシンレフの説明の中に「石狩及上川ニテハ川ヲ沖(レフ)ト云フ」とありますが、この意味は「石狩地方では川の本流側をアイヌ語で(日本語の「沖」という意味の)「レフ」ということとす。

つまり本流側の島⇨ポンモシリリ(の別称が、「沖の・モシリ」⇨モシンレフ⇨モシリ・レフ(島・沖の⇨島の・島⇨本流側の・島)という意味である、という説明だったことが分かります。

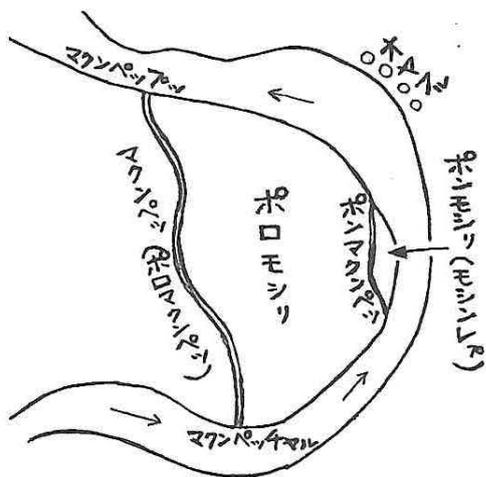


図14 マクンベツ附近のアイヌ地名の復元(井口二〇〇八を一部改変)

古地図や古文書の記録から、かつてあったはずのアイヌ地名を復元した。多くの地名がつけられていて、このあたりがアイヌの人々にとって関心の高い土地だったこと物語っている。

どうやら「モシンレフ」は永田方正が考えていたような川口付近の地名ではなく、マクンベツのそばの島の名前だったのです。

マクンベツ附近のアイヌ地名の復元

これまでに紹介した古地図や古文書の記事、その他20点余りの古い記録の様々な情報を総合して整理すると、マクンベツ附近のアイヌ地名は図14のように復元できそうです。

松浦武四郎がマクンベツの近道をせずに、石狩川沿いに大回りしてヲヤフルの前を通った時の記事(丁巳日誌／再高石狩日誌巻の一)も、この図を頭に入れて読むとよく理解できます。

「ヲヤウ(井口注⇨ヲヤフル)

……マクンヘツ通りを行く時は、此下より入るが故に不通なり。

……此処を過るに、実に枝川(井口注⇨マクンベツ)を行よりは三倍とも思わる也。過て

モシンレフ 右

曳場有。此処島の形ちに成居る也。是をホンモシリと云なり。またマクンヘツより入て出る時は、此処に島ニツ出来て居ることをしるによろし。少し行

ホロモシリ 右

此間の川をマクンヘツと云也。各引場有。(傍線＝井口)

つまり、マクンベツを通る時は、ヲヤフルより下流側でマクンベツに入ってしまうので、ヲヤフルの前を通らない。マクンベツを通るより三倍もかかるように思われる。過ぎると、モシンレバ(即ちモシンレプのこと)が右側に見える。モシンレプには網引場があり、島になつていて、別名を「ポンモシリ」と云う、と書いています。以下の文は意味不明のところがありますが、結局2つの島になつていて、本流側の島を「ポンモシリ」と云う、ということでしょう。

アイヌ地名マクンベツは、現在ではほとんど忘れられかけている地名ですが、この附近にかつてこれだけ多くのアイヌ地名があつたという事は、アイヌの人々にとつてこの附近一帯がとても関心の高い土地だつたことが分かります。幕末から明治時代にかけては、アイヌの人々のみならず、和人にとつても盛んな生業活動があつた土地だつたことを、これらの地名が雄弁に物語つていようです。

【引用・参考文献】(引用古地図類は本文参照)

井口利夫(二〇〇七・二〇〇八・二〇〇九)「伊能間宮蝦夷図の石狩」
勇払横断線の地名(1)・同(2)・同(3)・「アイヌ語地名研究」
一〇一・同一一・同一二 同会

池田 実(一九九六)「旧地名を訪ねる―川の名・パロとチャロ」『北海道の文化 六八』北海道文化財保護協会

伊能忠敬・間宮林蔵(一八一〇年代／文化一〇年代・二〇一四)『大日本沿海輿地全図』(仮)伊能大図写』アメリカ議会議会図書館

蔵『伊能大図総覧』角川新社

岡部方幾(一九九二・二〇〇一)「地理上の「アイヌ」語」『人類学会雑誌 7-74』東京人類学会・復刻『アイヌ語考第二巻』ゆまに書房

科学技術庁(一九六一)『石狩川河道変遷調査』科学技術庁資源局資料第三六号 科学技術庁

遠山景晋(一八〇六・二〇〇二)「未曾有後記」『近世紀行文集(1)蝦夷編』葦書房

永田方正(一八九一・一九八四)『北海道蝦夷語地名解』北海道庁・復刻 葦書房

刻 葦書房

早田国光(二〇〇八)『十勝アイヌ語地名手帖』私刊

松浦武四郎(一八五七／安政四・一九八二)『丁巳日誌／丁巳東西蝦夷』

山川地理取調日誌』秋葉實編。北海道出版企画センター

一郎(一八五六／五八／安政三／五・一九八八)「川々取調帳」『武

山田秀三(一九八四・二〇〇〇)『北海道の地名』北海道新聞社・復刊

葦書房

あとがき

本稿は石狩市郷土研究会の例会で発表した内容をまとめ直したものです。その骨子については、既に「アイヌ語地名研究 一一」(二〇〇八)に発表してありますが、その際にはスペースの都合で掲載できなかつた絵図や補注も大幅に増やして、なじみのない方にも少しは分かりやすいようにしたつもりです。

なお、前報「花畔」を本会誌へ掲載して頂いた際には、絵図を見やすくすること等々、会誌編集担当の工藤義衛氏のお手をいろいろと煩わせました。後れ馳せながら、記して心からの謝意を表します。

石狩尚古社資料館所蔵俳句の紹介5

石狩尚古社選者 松島十湖の遺墨

中島勝久

偶吟 増税をの、しる爺や畑の梅 十湖

偶吟 増税をの、しる爺や畑の梅

切賣しくても梅の花 十湖

切賣しくても梅の花

舞姫の皺もうすれる桜かな 十湖

舞姫の皺もうすれる桜かな

松島十湖(まつしまじつこ)・本名 吉平、嘉永二(一八四九)年静岡
 県浜名郡豊西村(現在浜松市)生まれ。俳人、報徳運動家、県議、松島
 源左衛門の長男として生まれる。幼名吉太郎、吉兵衛のち吉平と改称。
 別号は白童子・七十二峰庵・大有庵・犬蕪庵と号した。小笠原郡横須賀
 撰要寺住職、戒誓玄常に書、法典の教えを受け、のちに国学を有賀豊秋
 に漢籍、詩文を高橋月查、小栗松靄に学ぶ。十五歳で俳諧を榎木夷白に、
 死後は伊藤嵐牛、橋田春湖に教えを受けた。俳人として十湖は全国に門
 人がおり、地方俳壇の一つの尾根を形づくっていた。十湖の句碑は全国
 に八十基以上建っている。

十湖には二つの面があった。一つは句作による芭蕉文学に傾倒する精
 神的なもの、もう一つは二宮尊徳を崇拜して経済、道徳によって指導す
 る実践的なものである。十湖の句に教訓的なものが多いといわれるのも、
 この二つのものの統一された焦点にあるように思われる。また、小田原
 の報徳学者福山滝助について報徳思想を学び、明治元(一八六八)年中
 善地村報徳社を組織、営繕司に一時出仕。明治五年報徳遠議社を結成、
 社長となる。翌年より戸長、桓武学校幹事区会、村会議員を務め、十二
 年県議会議員、十五年引佐鹿玉郡長となる。十八年西遠農書館を創設。
 二十二年遠陽大同倶楽部を組織、翌年東京大同倶楽部に加盟、再び県会
 議員となる。明治三十一年には、北海道毎日新聞俳句の選者、三十五年
 小樽新聞の俳句選者を務めている。『石狩尚古集』の選者、(明治三十五
 年)。大正十五(一九二六)年没。享年七十八歳。

著書に『夷白発句集・道の葉・俳諧三匹猿』明治十八年『十湖発句集』
 明治十八年『草深集・賤機織』明治十八年他あり。『松島十湖翁句碑と遺墨』
 (昭和五十七年・六十二) 牧田守弘。平成三年浜松文芸館で十湖展が開
 催された。石狩市にある石狩尚古社資料館には、十湖の掛軸・短冊等が
 展示されている。

初出・NPO法人石狩市文化協会編 二〇一四「俳句のまちいしか
 り」第十回俳句コンテスト作品集

石狩市樽川、南線地域の戦後の歩み

入植六八周年を迎えて

本間 純一

一・本間家のこと

第二次世界大戦や戦後の混乱期も過ぎ、もう七〇年にもなりました。石狩町も大きく変わりました。市への昇格、厚田・浜益との合併、石狩湾新港の発展。石狩市の人口も六万人になっています。

樽川、南線地域も石狩市の人口の半数三万人弱の人が住む街に変わりました。ここに、戦後の苦しみ、悲しい出来事や楽しかった事などを思い浮かべながら当地域の歩みを振り返ってみたいと思います。

私は、昭和十一年三月に新潟県佐渡郡両津町（現佐渡市両津）で生まれました。両津は港町で西北に大佐渡山脈、東南に小佐渡山脈、中間が国中平野です。佐渡島は周囲二六三、七km、面積八五五、二七kmある島です。

父は昭和一六年春よりカラフトの真岡を中心に鉄道工事に就労、当地で終戦をむかえ、昭和二三年に引き揚げて石狩町大字樽川村西三線に入植しました。食糧難で苦労したので、畑を耕作することで食料を確保出来るとの思いがあり、開拓地に入植することになったのです。

私は（当時一三歳）、昭和二四年二月五日、晴天に恵まれた新潟県佐渡の両津港より沖に停泊中の連絡船小樽丸に親子七人で乗船し、午後五時頃両津港を出航しました。

翌六日一〇時頃より大時化になり、多勢の乗客が船酔いで苦しみながら七日の朝無事に小樽港に着き、汽車で軽川駅（現手稲駅）に着きました。駅まで父親が馬車で迎えに来ていました。馬車には弟や妹が乗りましたが、私は乗れず4kmの道を歩き夕方の五時頃始めて石狩の樽川に着き、石狩での新しい生活が始まりました。

当初の住まいは、バラック建てでした。家族八人で八畳一間に四畳の

台所、床は板張りにむしろを敷き、窓はガラス戸一枚、玄関戸は板張り、内側にはムシロを下げて吹雪が家の中に入るのを防いでいました。玄関は土間で四畳、馬一頭を八畳間で飼育するという生活でした。



本間家初めての家と父と兄、弟・昭和27年秋

その頃は花畔、南線、樽川地区でも旧石狩川や旧発寒川から揚水による大型灌漑用水路の工事が盛んで各地で造田され、一大水田地帯として発展していく途上でした。

ところが我が家の入植した土地は泥炭地で、酸度も高くPHで四度から四・三度という強酸性土壌でした。作付けした作物の収穫量も少なく大変でした。当時の我が家の作付けした作物は、ライ麦、そば、

馬鈴薯が主で大豆、小豆、西瓜、南瓜などでした。

昭和二四年は冷害で作物が取れず、食物の蓄えも少ないところに、家族が増えたため大変な思いで親子で助け合いながら、翌年の春まで頑張りました。

昭和二五年は、北海道より生後一〇ヶ月の貸し付け牛が「頭当たり、綿羊二頭、豚三匹、ニワトリ一五羽を飼育し、畜舎も増築しました。

昭和二九年に住宅も新築し、酪農経営を目標そうと決心しました。

附・昭和二〇年代の樽川地区の酪農

昭和二一年（一九四六）樽川村西四線附近に、開拓者が入植。計画戸数は入植一三戸、増反一〇戸、面積一五〇ha。

昭和二三年（一九四八）親和開拓農業協同組合が組織された。（初代会長は岡野愨）

名前	入植年度
岡野 愨	昭和 21 年
柴田信雄	〃
榎木福蔵	〃
中野文蔵	〃
齊藤時雄	〃
五十嵐八郎	〃
筒井 功	〃
平井忠吉	22 年
板井元太郎	23 年
千葉 武	〃
本間幸吉	〃
尾崎守衛（亀谷文信）	〃
石川富也	30 年

表 1 親和開拓農業協同組合 13 名

昭和二八年（一九五三）六月に明治乳業（株）所有地の一部農地開放、四八町歩に八戸入植

明治牧場従業員（入植者）

永原滝男 菅原 登 越野貞雄 菊池守永
漆 謹也 松井四郎 萩原末吉 宮田慶二

二・南線学習会・酪農青年研究会（酪青研）・4Hクラブの活動

（昭和三〇年代）

昭和二八年頃より南線小学校の教室で冬期間、青年学級が行われていたが、私は昭和三〇年一月より参加しました。三月末の閉校の時に、夏の間も勉強を続けたいと思い受講生に諮ったところ、多数の賛同を得たので、当時の南線小学校の村岡幸正校長先生に教室の使用をお願いしたところ、学校側も協力するから頑張りなさいと励ましてくれました。

南線青年団の会合で、野幌高等酪農学校の通信教育を受ける話をしたところ、男女とも多数の参加希望者が、一七名で南線学習会が発足した。学習会発足後も会員が増え続け、三二名になりました。

野幌高等酪農学校より、野喜一郎教頭先生、北村キク先生等を招き、講習会や現地指導を受け、八月には野幌酪農学園で行われた一週間の夏期講習会に一〇名ほど参加しました。

南線学習会役員名 昭和三〇年度

会長 本間純一
副会長 尾田法幸（昭和三一年度会長）
副会長 菊地浪子（現鳴海浪子）
役員 高橋英夫
高田英太郎
萩原雄吉

福田百合子(旧姓)
村上美智子(旧姓)

昭和三〇年四月に、樽川酪農組合より学習会に、乳質改善共励会の審査に協力の要請があり、会合を開き協議した結果、酪農の勉強になるので協力することに決定し、尾田数男集乳所主任の指導もと、三、四人で数班に分かれ酪農家を巡回、女子も数名参加しました。

冬期間、酪農組合主催の乳牛飼養

管理共励会は、昭和三〇年一月に発足した。樽川酪農青年研究会が審査にあたった。学習会からも数名参加しました。

野幌高等酪農学校を卒業後、町内4日クラブ主催の技術競技会、研究発表会に会の名称を南線学習4日クラブと改称し参加、昭和三三年五月石狩町農村青少年連絡協議会が設立され、南線学習4日クラブも一五名程参加したが、私が青年団を退団したことに南線地区の父母が反発、会員を会から退会させた為、会は解散しました。

連絡協議会に参加したクラブは、高岡4日クラブ、美登位4日クラブ、花畔4日クラブ(後に北生振みずほクラブが加入)でした。当協議会は農業改良普及所長田中實先生をはじめ、改良普及所の先生方の指導を受け発展を続けたが、昭和四四年度に石狩連合青年団と合併しました。

石狩町農村青少年連絡協議会役員(昭和三三年度)

- 会長 本間純一(南線)
- 副会長 後藤文夫(美登位)
- 副会長 森 敬子(美登位)
- 書記 福田 勲(高岡・昭和三四年度会長)
- 会計 小野興宏(花町)
- 外役員数名

合計	牛乳の取扱	飼料の給与状況	牛体の手入れ	創意工夫による牛舎の保温	審査項目
100	10	20	20	50	採点
	衛生的にして特に凍結防止に注意しているか	1、合理的飼料の給与 2、給水の状況 3、凍結飼料を与へていないか	1、ブラシのかけ具合 2、敷藁の状況 3、運動の有無	1、スキ間風の有無 2、天井の有無 3、出入口の二重 4、各囲いの有無 5、窓は二重、防寒布の有無	審査区分

表2 昭和30年冬期飼養管理共励会審査基準

合計	脂肪率	等級率	風味検査	塵埃検査	乳温度検査	細菌検査	各戸審査			審査種目
							牛乳管理	器具類取扱	清潔	
100	5	5	20	10	10	20	10	10	10	採点
	3.4% 5点 0.1%減ると1点減	100% 5点 2%減ると1点減	A 20点 B 17点 C 12点 D 8点	A 10点 B 7点 C 5点 D 0点	12℃ 10点 1度上昇に1点減	100万以下 (20点) 200万以下 (15点) 300万以下 (10点) 400万以下 (5点) 400万以上 (0点)	A 10 B 7 C 5 5	A 10 B 7 C 5 5	A級 10点 B級 7点 C級 5点	採点区分

表3 昭和30年乳質改善共励会審査基準

戦時中、戦後の極端な食料不足と、農家の長年の米作りの思いはずざましく各地の水田熱はとどまることを知らず、昭和二二年から二七年頃は造田に労力を使い乳牛の飼育はおろそかになりました。昭和二八年、二九年頃は落等乳が全乳量の二七%～二八%もあった月もあり、樽川の牛乳は原料乳で受け取ると云われたこともあり、原料乳では乳価も低く収入も少なくなり、ます。

昭和二八年、二九年は米作も冷害と病害虫発生で、農家の経営も苦しくなりました。樽川、南線地区では酪農が見直されてきました。まず乳質を良くすること。乳牛の管理と飼料作物の改良、設備の見直し等です。

- ① 乳牛の健康管理
- ② 合理的な飼養管理（良質な飼料給与）
- ③ 牛舎の採光、換気、衛生
- ④ 衛生的な器具の取り扱いと搾乳
- ⑤ 短時間の冷却、攪拌の励行冷水のかけ流し

乳質改善共励会も最初は理解できない人もいましたが、毎月牛舎を廻ることにより、酪農家の理解も深まり、同時に学習会会員も理解と興味を持つようになりました。

昭和三一年四月より、学習会会長は尾田法幸さんに代わり、会員一同団結し各共励会の審査を行いました。三二年からは樽川酪青研会委員が主体でした。三三年四月に樽川酪青研会長は川上勇さんがなりましたが、秋に酪農の勉強のため渡米しました。その後樽川酪青研会長は私が引き継ぎました。

昭和二九年には牛乳の落等率が二七～二八%もありましたが、三四年には三%台までになり良質な牛乳を出荷できるようになりました。

昭和三五年度は、樽川酪青研会員のいる酪農家と良質な牛乳を出荷していた酪農家とで、北海道乳質改善共励会に挑戦することになり、



北海道琴似農業試験場指導による親和開拓農業協同組合泥炭の堆肥作り試験

前列右より五十嵐八郎、柴田信雄。後列右より千葉武、亀谷文信、本間純一

(昭和31年8月2日)

樽川酪農青年研究会名で出品することになりました。六月から九月の四ヶ月間、北海道酪農検査所の厳正な審査を受け、見事全道一の農林大臣賞を受賞する栄に浴しました。

昭和三六年度から、樽川酪農組合員全員で、札幌組合主催の石狩地方乳質改善共励会に出品し、三七年最高位賞、四四年には最優秀賞を受賞しました。そのほか毎年金賞一席か、優秀賞一席より降りたことはなく、樽川の良質な牛乳を出荷し続けることができました。

樽川、南線地区が、水田酪農地帯として発展できたのは、樽川集乳所の尾田主任の良き御指導と歴代酪農組合長、組合役員の御指導、若き酪農青年とが一つになり経営の改善、良い飼料作物の増産等に取り組んだ結果だと思えます。



親和開拓組合共同作業・昭和 32 ～ 33 年頃



尾田主任と酪青研員による乳質改善牛舎廻り



酪青研員と細菌検査。福田哲郎、福田百合子、筆者



酪青研員によるセジメンテスト審査



石狩地方農村青少年連絡協議会技術交換会



石狩町農村青少年連絡協議会夏期技術交換



極東パイロット農場



石狩町 4H クラブ OB・平成 3 年頃

○ 昭和三十六年一月

極東第二地区開拓パイロット事業に着手、翌三十七年より開墾を始めたが、笹藪や泥炭地で排水も完備されていないため困難を極めました。開墾作業中にトラクターがぬかり、トラクターをぬかるみから出そうとして、一人の若い犠牲者を出してしまいました。昭和三十七年八月二九日午後八時頃の悲しい事故でした。

昭和三十七年六月一日 極東第二パイロット事業地区認可

七月一日 起工式

昭和三十七年 ファーガソントラクター 三台
 昭和三十八年 大型牛舎 二棟
 ブロックサイロ 六基
 車庫 三棟
 堆肥場 三方所
 乳牛 約七〇頭

極東パイロット事業参加者

高橋晴夫・福田健二・川上勝・藪中俊一・田代吉治・
 伊藤幸雄・村田敏明・竹治春雄・本間純一 以上九名

○ 昭和三十九年一月

樽川地区農業改善事業による共同畜舎二棟が完成した。樽川、南線地区も年ごとに乳牛が増えて経営大型化を目指す方々も出てきました。

戦後の地域の酪農発展に尽力された方々をご紹介させていただきます。

1. 町の偉大な酪農指導者
 安藤与吉 明治一九年生まれ

2. 戦後の地域の酪農の発展に尽力された指導者

尾田数男 大正六年生まれ

3. 戦後の酪農組合の先頭に立ち酪農組合の基礎を築いた人
 中島久一

4. 横井一（初代横井元八氏より三代目）二代目酪農組合長

5. 高砂春雄 大正三年生まれ。三代目酪農組合長

6. 川上鶴吉 明治三十八年三月五日生まれ（初代川上市造氏二男）

四代目酪農組合長

年次	昭和15年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年
酪農家数	75	67	66	65	62	63	64	77	89
乳業頭数	328	310	308	306	217	223	234	266	324
乳量 (t)	570	370	390	395	370	410	430	550	610
年次	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年	41年
酪農家数	92	96	95	100	96	90	90	81	73
乳業頭数	365	415	480	480	500	475	585	600	667
乳量 (t)	670	770	800	780	790	870	1,160	1,170	1,370
年次	42年	43年	44年	45年	46年	47年	48年	49年	50年
酪農家数	70	60	57	53	49	39	23	22	21
乳業頭数	647	581	634	676	665	647	484	580	480
乳量 (t)	1,420	1,510	1,700	1,630	1,620	1,435	1,241	1,487	1,243

表3 樽川酪農の年次別状況

三. 花川南地区（一部北地区を含む）・樽川地区発展と内外緑地(株)

(氏名の敬称略)

昭和三五年一二月五日

内外緑地株式会社設立。札幌市。

昭和三六年 春

高田二、内外緑地(株)に原野一〇町歩内外緑地に売却。続いて高田三、高田五郎も同社に売却。

昭和三八年

横井一、福田藤男氏、五人の方々合わせて

五〇町歩を昭和三八年秋までに内外緑地(株)に売却した。いづれも紅葉山砂丘の原野。

見上勝太郎氏原野一〇町歩を大洋商事(株)

昭和三八年四月

(札幌)と売買契約成立。現、樽川八条一

丁目、二丁目

大洋商事(株)が平和団地を宅地として販売を

五月

始める

八月

平和団地に四戸が住宅を建築、入居を始めた。

昭和三九年三月一八日

南線地区発展期成会結成(会員四〇名)

期成会会長 高田二

副会長 尾田延義

事務局 高田光一

役員 他数名

昭和三九年四月二〇日

内外緑地(株)と南線地区発展期成会との間に

住宅団地建設のための用地(農地)三六〇

坪(三六〇町歩)の土地売買契約が成立

した。

花畔南、樽川東二地区の世帯数約五〇戸、

人口二四一人。

内外緑地(株)が新札幌起工式開催

昭和四〇年九月一七日

内外緑地(株)が新札幌起工式開催

九月

一月

昭和四一年六月

同社は第一次二〇万坪の分譲を開始

昭和四一年一月

新札幌団地内に五九戸の貸家が完成し入居

昭和四二年一月

が始まる。

昭和四二年五月二日

新札幌第一町内会結成。町内会活動始まる。

昭和四二年一月一日

内外緑地(株)が紅葉山砂丘(東六線)にボー

リングを行う。温泉が湧出(温度二六、五

度、湧出量毎分五〇ℓ、泉質は単純温泉)。

北海道中央バス(株)の新札幌団地線開通。

花川南町内会婦人部誕生、初代婦人部部长

佐藤ヤエさん。

新札幌団地第二町内会発足。会長小泉正雄

内外緑地(株)は温泉ボーリングと分譲住宅の

合同起工式を開催。

内外レジャーランド(株)設立。資本金一五

〇〇〇万円。

新札幌団地の商店が商店会を結成する。

石狩町開町一〇〇年(開基三〇〇年)記念

式典挙行。

農集電話から団地集合電話に切替、共同電

話方式で開通。

内外レジャーランドオープン(野生の鹿数

頭飼育)。

南線地区発展期成会解散。

内外緑地(株)が新札幌団地上水道事業経営

を北海道から認可される(計画総水口七、

〇〇〇人 計画日最大給水量一、四〇〇

m)。

石狩町公民館南線分館開館。

昭和四四年一〇月一〇日

昭和四四年一月三日

昭和四四年六月一七日

四四年一月四日

札幌北警察書新札幌団地駐在所公務始まる。

四四年一月九日

新札幌団地集会所落成式。

四五年一月

第二町内会から第三町内会が分離独立（石狩市年表）。

昭和四五年四月一八日

石狩町新札幌団地出張所開所式。業務始

四五年五月一九日

石狩町のゴミ収集が始まる。

四五年七月一日

新札幌団地新浄水場（水道）通水始まる。

四五年一〇月一日

国勢調査による、新札幌団地内世帯数六二二世帯、人口二、一九三人。

昭和四六年三月一日

北海道住宅供給公社と南線地区地主の間で、住宅団地用地（南線と花畔地区）を合わせて約二三二haの売買契約が成立した。祝賀会が開催される（田中年表追・石狩市年表）。

第一町内会より、斜め防風林の北東側（旧

花畔南線）で第四町内会・第五町内会、

第六町内会として分離独立した。

昭和四六年一月一日

常設の南線保育園（定員九〇名）開園

一月二一日

南線小学校七〇周年記念式典開催（児童数二五九名）。

一月二七日

石狩湾新港開発地域内の用地買収について、北海道企業局と石狩町地主会との交渉が妥結二八日から三〇日にかけて契約が集結された。買収総面積約八五%に当たる。

一、二二七haの土地について調印。

地主二九六名（石狩湾新港史、地連協では

一、二六〇ha）。

昭和四七年二月二日

日本万国博覧会記念館スカンジナビア・パビリオン新札幌団地にオープン。

四月

新札幌防犯協会が設立され、連合会に加盟した。

平和団地世帯数一四戸、平和団地町内会設立（初代会長山口幸吉）

（現、樽川南第一町内会）

ボーリング場（ポウルニューサッポロ）オープン（五二レーン）。

七月二二日

新札幌団地連合町内会結成（六町内会加入約一、二〇〇戸）。

昭和四八年八月一日

加入町内会・第一町内会・第二町内会・第三町内会・第四町内会・第五町内会・第六町内会。

南線協栄組合設立（初代会長・横井一夫・

会員八五戸）。

石狩臨時町議会で石狩町樽川地区の一部を

小樽市に編入する事を可決（八九〇、六ha）

その後八九九、六一五haに変更。

昭和四九年

新札幌団地交通婦人会発足。

三塚ヨシエ会長 会員一三一名

四九年一月二四日

暴走車による南線小学校児童の死亡事故が

きっかけだった。

石狩町と小樽市との境界変更が実施され

た。

昭和五〇年四月一五日

南線協栄組合が新札幌団地連合会町内会に

加入

石狩町単独で医療費無料を六八歳から六七

一〇月一日

八月三十一日	歳に引き下げを実施する。 新札幌団地開基一〇周年記念式典並びに祝賀会が当団地内において開催された。	昭和五六年四月一日	南線小学校から分離して新設校石狩町立花川南小学校が開校した。
五〇年一〇月一日	石狩町の世帯数四、三七八・人口一六、二一二人・国勢調査。	昭和五七年四月二日	花川南交通安全母の会設立総会
昭和五一年六月三〇日	樽川農事組合（現、樽川町内会）が新札幌団地連合町内会に加入。	昭和五九年	平和団地 花川南連合町内会に加入
五一年一〇月一日	新札幌団地世帯数二、〇四六・人口一六、八三一人。	五九年一二月二二日	花川南青少年健全育成協議会設立総会
昭和五二年一二月一日	字名改正施行により「新札幌団地」の通称名から「花川南」、「花川北」に変わる。	昭和六〇年一二月一〇日	陸美町内会創立総会。第三町内会から分離独立。
五二年一〇月一日	新札幌団地世帯数二、三八〇・人口七、八四五人	六〇年	第三町内会より栄町内会分離独立
五二年一二月一日	花畔の一部の字名が改正され、新しい住所（北六条一丁目から五丁目までと北七条一丁目）。	昭和六三年二月二二日	第二町内会より南町内会分離独立
昭和五三年四月一日	石狩町立花川南中学校が開校	平成五年一〇月二六日	道営グリーンコート町内会、花川南連町に加入。
五三年一〇月一日	新札幌団地世帯数三、〇〇四・人口九、八三六人	平成六年	石狩湾新港が国際港として開港。
	住民基本台帳によると石狩町の世帯数が七、六四二・人口が二六、〇〇〇人。	平成七年	町立樽川中学校開校。
五三年一二月一日	新札幌団地出張所が花川南出張所と改称。	平成八年九月一日	明乳パストラルシテイ分譲開始。
五三年	花川南連合町内会婦人部連絡協議会が結成（七町内会婦人部が加盟）		石狩市と北広島市が市政施行となった。
昭和五四年一二月二日	第六町内会より、ニューアカシア町内会、江南町内会が分離独立。		石狩市は道内三四番目の市昇格
昭和五五年一〇月一九日	旧新札幌団地連合町内会を花川南地区連合町内会に変更。		（八月末、世帯数一八、二六八・人口五三、五六五人）。
			樽川地区、明乳パストラル町内会設立（初代会長 西尾昭一）。
			南線協栄組合よりパイロット町内会独立（会員九戸）。
			パイロット町内会花川南連合町内会に加入。
			花川南連合町内会
			入町内会一六町内会・加入戸数八、五八二戸・未加入町内会一町内会・戸数約500戸

主な参考文献

- 石狩町女性史年表 二〇〇二 駒井秀子 石狩町郷土研究会
石狩酪農今昔物語 一九九二 尾田数男
サツラク農業協同組合三十年史 一九七八 サツラク農業協同組合三十年史編纂委員会
潮風と共に三十年 一九七八 サツラク農業協同組合三十年史編纂委員会
一九七八 花畔農協創立30周年記念誌編集部 花畔農業協同組合
日本酪青研二十年史 一九六七 日本酪農青年研究連盟編
〔風紋〕南線協栄組合創立一五周年記念誌 一九八七 南線協栄組合創立15周年記念実行委員会
南線神社概史 南線神社創建百年記念誌 一九九八 南線神社創建百年祭実行委員会
樽川神社沿革史 一九九五 和佐正明編 宗教法人樽川神社
石狩市21世紀に伝える写真集 二〇〇二 21世紀に伝える写真集編集委員会 石狩市教育委員会
風雪に耐えたアカシア並木 国重家の歩み 二〇〇四 国重義臣
石狩市年表 二〇〇二 石狩市
〔流歴〕花川南連合町内会三十周年記念誌 二〇〇六
石狩町誌上巻 一九七二 石狩町
石狩町誌中巻一 一九八五 石狩町
石狩町誌中巻二 一九九一 石狩町
石狩町誌下巻 一九九七 石狩市
石狩町年表 一九五八 石狩町教育委員会
石狩町年表追記 田中實編(自筆追記) 一九七七 樽川地主会
樽川百年史 一九七七 樽川地主会
広報いしかり

似せられ、^{ヤンしゅう}若衆

今井 光男

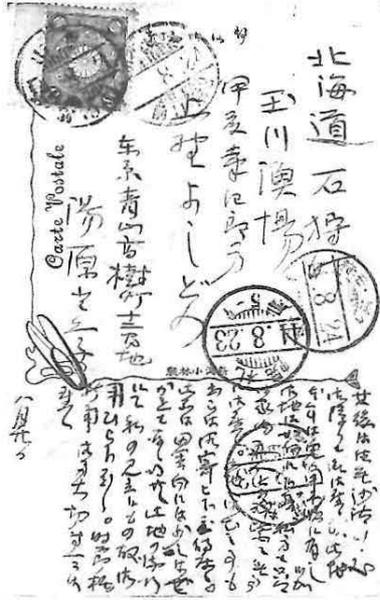
これからお話しする年代は、昭和一六年頃から私が本格的に漁夫として体験した作業や生活の一部と曾祖父母から聞いた話です。

「若衆」と言いますと、鱈背（いなせ）で格好が良かったくましい漁夫さんを思い浮かべられると思いますが、私の場合は「映画の寅さん」の台詞ではありませんが、「生まれは小樽市豊川町、手宮という繁華街の都会っ子」なんです。

たまたま両親が石狩町弁天町で生まれ育って、母親の実家に漁の時期やお正月、お盆に足を運んだことが石狩を知るきっかけとなった訳です。

母親が結婚をして花畔村北六線に住居を移したのは、昭和四年でした。叔父、叔母、従兄等は志美尋常小学校卒業でしたが、養父の今井進一等兄弟は石狩尋常高等小学校卒業でした。これは漁業の漁期の関係で住居を移動して生活していたためです。

母親の父が、明治三九年に石狩川河口で水難事故に遭い、早死にしました。父親が亡くなった一家は、父親の義兄である伊藤幸四郎の世



上野よし宛の葉書

上野よしは筆者の義父伊藤幸四郎の娘。住所の「玉川漁場」はかつて玉川啓吉の漁場だったことによる。

話で花畔村北六線に弁天町から通い漁をしていましたが、住居を構え定住するようになりました。

義兄の伊藤幸四郎は志美シビウスの鮭漁の親方だったといえます。

漁場と言っても鮭鱒の流し網漁は、祖父達が零細漁民救済を旗印に河川での流し網漁を国に求める運動を起こしましたが、漁業者代表理事等が騒乱罪で投獄されることにまでなりました。

昭和二年に河川での漁が許可され、石狩川河口での漁業は大きな変化がありました。今井の家では河川で小魚を捕って佃煮にしたり、ヤツメ鰻魚などをして生計をたてていました。

ヤツメ筒の資材は、本州方面の男葦を使用したそうです。アンカーも木の板で作り、使用後は川水で腐ってなくなり、曳き網漁や流し網漁などの邪魔に成らないようにし、浮き沈みの調整は、錘小石を使用しました。

筒漁の仕掛けは、五〇個から六〇個仕掛けたといえます。大正から昭和初期にかけての漁獲量は、昔で言う四斗樽二本ほどあり、秋口九月から真冬の一月末の寒ヤツメでは、鮭漁と漁期がぶつかり、人出を都合するのが大変だったようです。

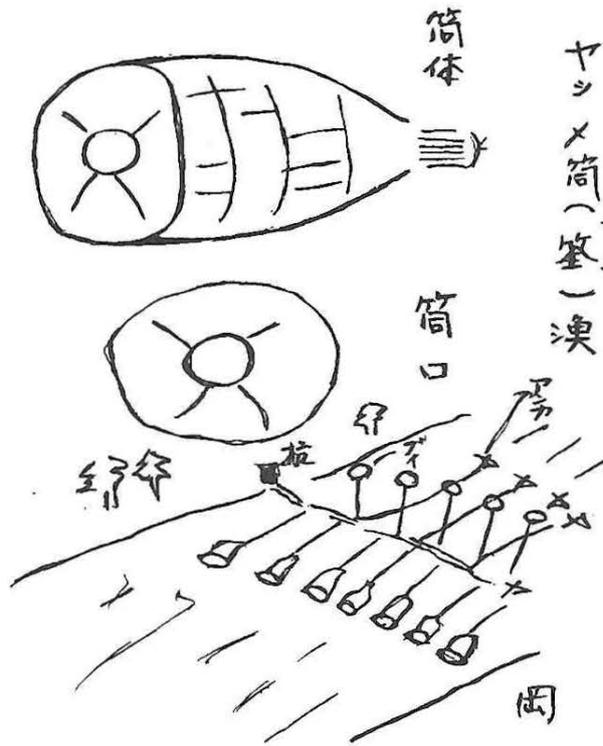


昭和十二年大塚由松宅前の旧道（石狩街道）

殆どのヤツメは、乾燥され東京方面の葉鋪問屋に送られていたそうです。

ヤツメを乾燥させるため、夏でもストーブが燃やしていたのが子供

ヤツメ筒(塞)澳



鍾りに小石を入れた

の頃の私は不思議に思ったものです。

私が花畔の実家に入り出す様になった時にはヤツメ漁の面影が残っていて、天井には屋根を突き抜ける煙筒と、垂木の張りにフックのようなものが沢山並べて打ち付けられていました。ヤツメ鰻の乾燥場所確保に頭を悩まされたそうです。

昭和二年に石狩川の鮭鱒流し網漁業が許可され、同六年には、新川が石狩川本流となったため漁場の位置が変わったそうです。ヤツメ漁

は花畔北六線の前浜から矢臼場に、鮭鱒漁は石狩川ショートカットで新しくできた新川場所に移るようになりました。



その上、ヤツメ漁は自宅での加工が時間がかかるようになると同時に、若手の労働力が兵役に取られるようになり漁業はうまくいかなくなったようで、旧石狩川(茨戸川)

での小魚漁での佃煮、乾し魚作りに限られるようになったそうです。

また、戦時中で食料の統制がしかれ、佃煮に使われる砂糖や水飴醤油等も手に入らなくなり、私も石狩へ行く楽しみもぐんと少なくなりました。



昭和二年鮭鱒流し網許可記念写真
於石狩町役場前(現石狩小学校付近)

注 生振捷水路

石狩川の治水方針は、曲がりくねった蛇行（だこう）部分をカットして、直線的な流れに修正する「捷水路方式」が採用され、計画流量約四一七〇立法メートル/秒を流すことを目標に、石狩川最下流から上流へ、まず5つの捷水路工事が進められることになった。

大正7年、石狩川ではじめて着手された「生振捷水路」は、石狩川捷水路のなか最長三六五メートルで、開通までに十四年を要した。新水路の掘削は、陸上は掘削機エキスカベータ、水中はポンプ式浚渫（しゅんせつ）船という、いずれも最新の大型機械が投入された。機械の補修や工事資材を製造する治水工場がつくられ、工事関係者のために商店や床屋、芝居小屋まである通称「生振治水市街地」が一時的にできた。また、新水路右岸には「香取神社」を創建して工事の安全を願うとともに、慰霊祭も行われた（現在は石狩八幡神社に合祀）。

こうして昭和6年に生振捷水路は完成、通水時には石狩川の江別地点の水位が1mも下がって、係留中の外輪船・上川丸が陸に浮いたという。捷水路のはじまりの地には「石狩川治水発祥之地碑」が建っている。

*

私は小学校に入る前から母親に連れられて、花畔の北六線に遊びに来ていました。また父親の実家がある八幡町にも行ったりしていましたので、自然の多い石狩が好きでした。学校に入学してからも休みになると石狩に足が向いていました。母親は幼い私の一人旅を良く許してくれたものです。

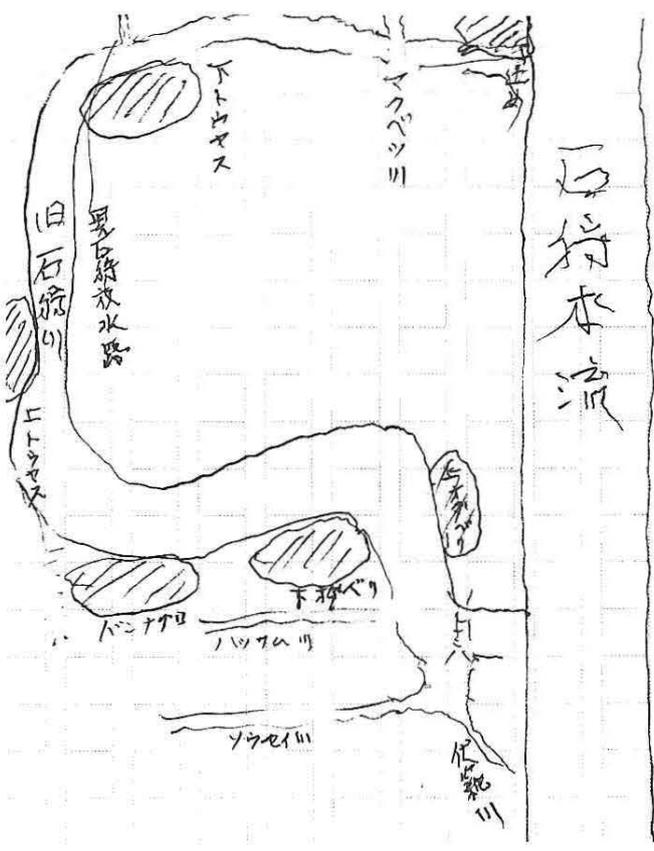
石狩の自然は、春になると手のひら大の鮒が産卵のために、群れをなして小川に遡るのが見られます。夏には浜の波が高い時は、川遊びをします。川の中央にある中島（現佐藤水産）の向かいが遠浅になっていて、シジミ貝が獲れたものです。カラス貝といって二〇センチ位

の貝も沢山獲れました。

赤トンボの大きさも一五センチ以上ありましたし、盆踊りの頃ともなると蛍狩りが昭和一八年頃まで出来ました。今思うと、嘘のような自然だったのです。

私が本格的に漁夫になることになったのは、今井の家に入りし、田舎に馴染んでいたことと、今井本家に跡取りがないためです。

遊びに来ているときと漁夫としての仕事に入った事は別問題で、漁夫として入った次の日から今までとは一変して、礼儀作法から家の仕



来りまで厳しく教えられ、更に漁法や漁具等の呼び方まで教えられ、一度では覚えきれず何度となく注意されました。曾祖母を「大婆様」、養父を「親方」、養母を「大姉さん」、同居の

従姉にも「お姉さん」と呼ばなければなりません。大婆様より先に食事をしてはなりませんでしたし、お茶碗の縁に口をつけてはならない等々厳しい者でした。

親方より先に風呂に入ること許されませんでした。親方が組合の会議で遅くなる日などは、暗いランプの下で待つしかありませんでした。現在のように電気やテレビも無い時でしたので、幼いときの楽しさを思うと苦痛でした。

唯一の救いは、戦時中一時的に志美小学校に児童疎開入学をしていた時の学校仲間の友達がいたことや、従弟にあたる人達が近くに住んでいたことだと思えます。地域もよく知っていて、時間があるとよく遊びに行つて話をしました。息抜きに行つていたのも事実です。

次に覚えなければならぬのは、漁をする場所です。川筋の浅瀬、深見で漁の出来る場所、川面の移動する道筋を教えられました。時代が時代ですので、船外機などはなく移動手段はサツカイ（早權）や櫓、サオ等で、時折帆などを使用しましたが、川の中に沈んでいる万年木等をさけて移動したものです。

*

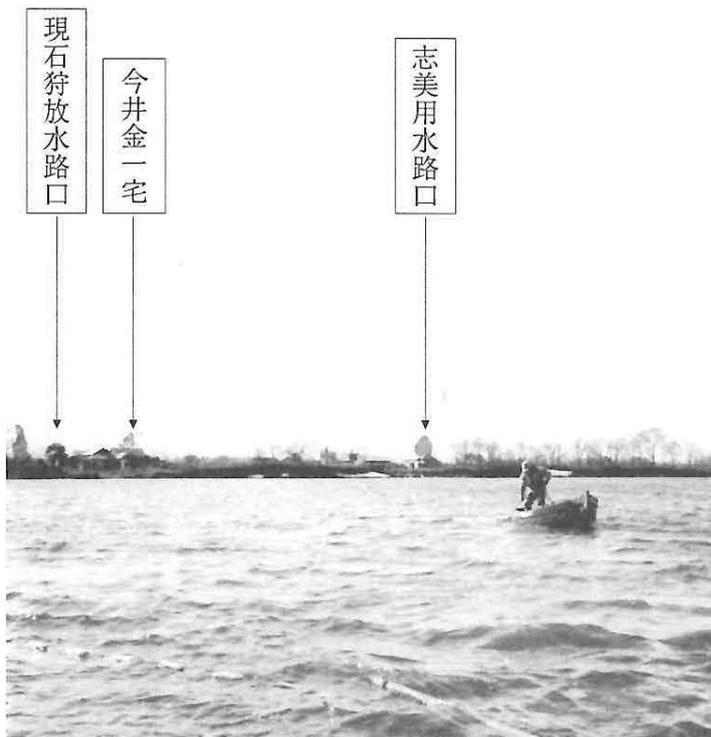
漁場は、茨戸観音橋附近、創成川、伏龍川、発寒川の交流付近は小魚も多く入りますが、ゴミも多く入りますので、魚選びが大変です。オタベリは右岸も左岸も漁場になっておりました。川を下つて花畔渡船場付近、小学校の裏側になります。

上トウヤウシ（一本木）は北八線当たりの左岸になります。下トウヤウシは（現、石狩放水路）の向かい北生振になり、現、佐藤水産の向かいあたりに、畳三〜四畳ぐらいの中島があり、そのあたりまで川の三分の二ぐらいまで遠浅になっていました。

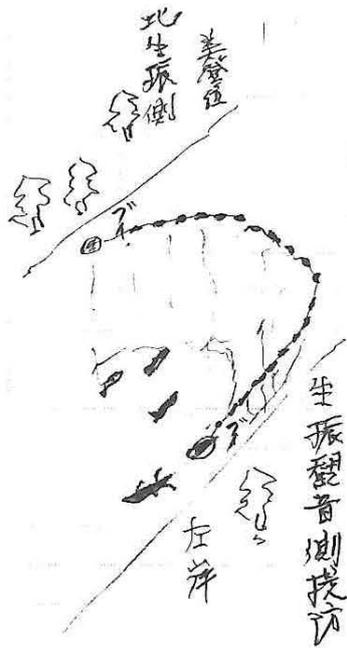
マクンベツ川を下つて石狩川本流に出て、上流一キロメートルあたりが、ウツナイの上がりチカ漁場となり、更に上流の川止めの沼地から新川の新漁場流し網場となつており、左側の堤防の上に流し網

漁の人達の集落がありました。

昭和二〇年代には、川の主のような鯉がゴロゴロ獲れました。



トウヤウシ漁場より現放水路を望む



昭和二十七年
志美用水路口



当時の志美用水路口

鮭漁の流し網の漁期は九月一日からです。毎月の一、二、三日は鮭の資源を保護するための休漁となりましたが、漁夫にとっては網などの手造りのため休みにはなりませんでした。

鮭漁は、投網時間が決められていますし、漁をする順番も一週間ごとと漁夫人達が集まり決めます。日の暮れから日の出までの時間が漁をする時間ですので、北生振九線、右岸の美登位基線、新居渡船場付近から下流約四キロメートルの六戸という墓地付近までの漁区間で、次の相手方に投網を連絡するには、旧河川の沼地に到達したら、懐中電灯で合図をします。

川の流れによって三〜四回ぐらいの作業になりますが、七〜八回の時もあり、休む間がありません。一年間の生計が鮭漁にかかっているといっても過言ではありませんでした。

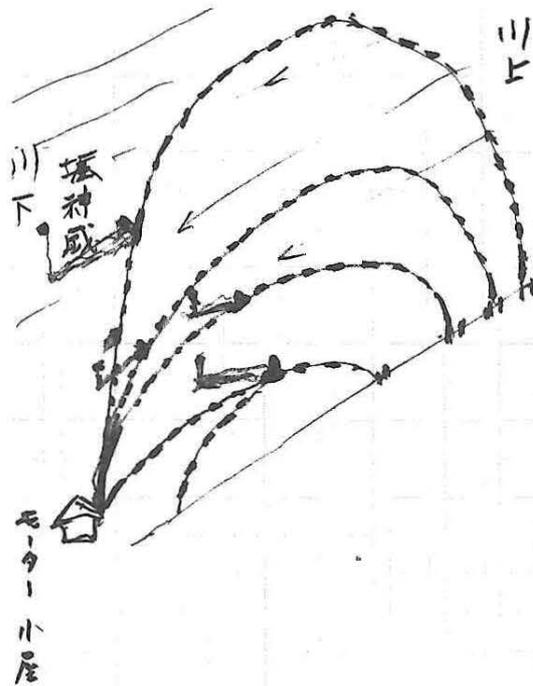
昭和二十七年、漁業法が改正され河川での鮭鱒漁が禁止され、組合による孵化事業と北洋漁業、茨戸川の内水面漁業を残す改革がされました。組合による孵化事業参加で、私も急に養父から丁寧漁場に行くように命ぜられました。

他で雇い経験のない私にとっては、大変不安に感じられました。新川時代の仲間や青年団の仲間がいましたので多少気持ちは楽でした。家の方では、内水面漁業をしており、若衆を賃金で雇い入れて、地曳網を続けていました。

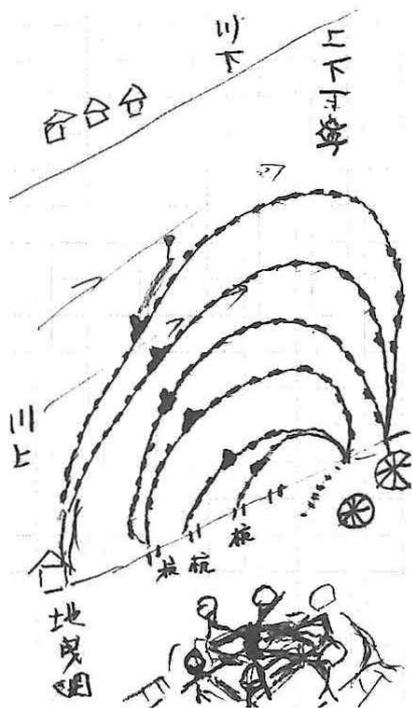
ただし、組合参加には、資金米の提供や賃金の支払いは無く、組合からの配当という形がとられ、直接労働する組合員には賃金が支払えず、厚田、浜益など地方から雇い入れられた若衆に賃金と漁獲割り手当が支給され、私は少々抵抗を感じていました。

昭和二十九年の大漁の年を除いて不漁続きで、漁夫をやめなければならぬほど生計が立たなくなりました。私は二十七年、二十八年に丁寧漁場で、二十九年、三十年、三十一年と上丁寧漁場に勤めました。三十二年からは石狩河川地曳網最適の場所とされていた堀神威曳所に配置転換

を命ぜられました。しかも、帳場としてなので大変驚き強く断つたのですが、聞き入れてもらえず他の人が協力してくれるというので受けることにしました。



上丁寧・下丁寧漁場の図



堰神威漁場の図

八月二一日に石狩役場裏の丁寧漁場の番屋にはいりました。番屋は二階建てになっていて、一間置きぐらいにガラスのはまった小さい窓がついていました。建物の左右と中央部分に二階に上がるハシゴが五カ所あり、床には荒むしろが敷かれていてまるで映画に出て来るセツトのような貧弱な寝床が用意されていました。

これが、雇い漁場での番屋と称されるものだと知りました。帳場さんの部屋はガラス戸で仕切られており、立派な畳が敷かれた八畳間で、座り机や棚が備え付けられていました。身分の違いを知らされました。帳場の部屋の正面の壁には、縦六〇センチ、横三メートルもある大きな板があり「掟」という文字が書かれていました。船頭頭、船頭、若者頭、川船乗頭、若衆の名前が、最後の方には岡船頭（岡廻り大工）、その後小さな文字で炊事係の名前あり、そして大きい文字で帳場さんの名前が書かれていました。一隻あたり一五名の組員でした。

翌朝早々に三組みぐらいに分かれ、船着き場や網曳場の準備に入ります。網曳場は八月の水量の少ない時なのですが、船頭の指示した個所に、直径三〇〜五〇センチ、長さ三メートル位の丸太の杭を打ちます。

出網止めで、出網を流れから支えてくれる杭です。二本組で五カ所曳き網が寄せられる個所まで打っていきます。

いずれの作業にも音頭がとられ一層力が出ます。「ヨイトチョンナ、もひとつ、チョナ」と繰り返され、掛け声が止まると作業も止まります。河岸には計算されたように二本ずつ杭が並びます。杭を打つには「カケヤ（掛矢）」という道具が使われますが、最初は杭が長いので「カケヤ



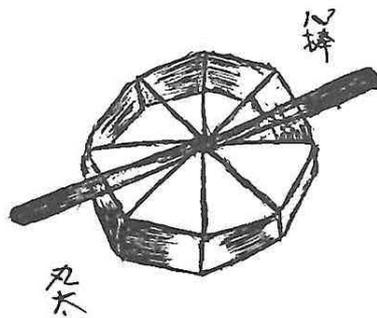
を逆に用います。「カケヤ」の重さは一人では持ち上げられないほど重いものです。

入網のロクロ場は、河岸より一段と高い所に位置し、少々の増水でも作業が続けられるように、大きな入網専用のもものと、ひとまわり小さな網揚げ専用のもものと分かれています。

ロクロの下の部分には重い鉄板に心棒が取り付けられていて、土に埋めてあります。

地曳を入れて、入網を持って若衆が河岸から五〇メートル位離れているロクロ場に走るので、徳長靴やカッ

パスボンを履いているため、若者とはいえ大変です。その重い入網を持って走って行く仲間を数人の若者が補助し、ロクロに網を仕掛



けます。「ヨイト巻け」との掛け声に他の仲間も加わり大合唱。音頭の声に合わせて作業は進められるわけです。「心棒は金だ」「頑張つて巻け」「姉ちゃん待つてるぞ」と、いろいろな言葉を掛け声にします。

網を入れる時は、昔の様に手漕ぎではなく、親船に抱きかかえられるようにしつつ、動力船で船頭の指示で操り入網を行い、漁が終わり

捕獲された鮭を川船に渡すと網を船に取り入れ次の漁に備えた。

今度はサツ權で川上の出船場所まで移動します。「オスコ」と船頭に合わせて、一斉に權をそろえて漕ぎだしま

す。音頭の節は地名やその時々々の天候や廻りの状況を取り入れたりします。

「浜益、毘砂別涙だこ幌よ」とか「一〇月小春俺のカカお春」「なんだ送毛、濃昼までよ。厚田渡れば古潭、古潭」などと、故郷に帰りたいという意味で、上手に音頭に取り入れられているのがわかります。今でも船頭の名台詞が、懐かしく耳に残っています。

その頃、やまたま村田商店の食堂に「リンゴの歌」の並木路子が食事に行った時、若衆の音頭を聞きたいという話から、下丁寧の若衆が一〇名ほど呼ばれたことがありました。

船漕ぎ音頭の「オスコ」から網揚げの「ソーラン節」、鮭を川船に捲る音頭を歌ったのですが、座敷と漁労中ではちよつと異なる音頭となりました。

*

昭和三一年から三三年まで、堀神威の帳場を命ぜられたのですが、先輩達、仲間達のお陰で無事勤めることができました。別な意味でも大きな人生経験になったことは、間違いありません。

帳場としての私の仕事は、若衆の一週間の献立と商店への注文、川船船頭からの鮭の受け取り、日報の記入、即売り鮭の店頭並べ、若衆の胴付きや雨合羽の用意等です。商店からは買掛で買います。現金の扱いは組合事務所の人が行う仕事でした。手の空いた時は、番屋や事務所の清掃が仕事でした。

帳場と言っても帳場の部屋は使うことはなく、若衆と同じムシロを敷いてある部屋を使用しました。時折川の流れが早くなり、一日三回の食事が四回になったりする時があり、急いで納豆などを買いに走った事もありました。

若衆の食事が不足した場合には、炊事場の女子衆が裸踊りをしなければならぬ番屋の決まりがあるそうです。ご飯不足を知ると若衆が目で合図をしあい、無理にご飯を食べようとしま



堀神威漁場後獲り漁（昭和30年10月）

す。若い炊事場の女子衆は、今にも泣き出しそうな顔をしていましたが、古参の女子衆は「オヒツ」にお湯を入れて湯気を立ち上げさせ、「オヒツ」の縁を大きな「ヘラ」で叩き乍ら「若衆飯タントあるよ。よう働けよ」と声をかけます。若衆は諦め「こりやダメダ」と仕事に戻っていきます。

古参の女子衆の、その機転の早さに学ぶべき知恵と経験を感じ取る
ことがありました。

また、漁期の終わりに近づいた時、一人の若衆の行動に不審を持って岡から見えていました。鮭を追いつみ、袋網を途中で捻り、その部分に自分が入れた鮭が動けないように両足で鮭を押さえているのが見えました。

覗き見ようとすると、陸の船頭が目配りがあり、「見て見ないふりをすれ」との合図でした。後で船頭に聞きますと、切り上げが近くなると若衆の労をかう形で、ニシン漁も鮭漁も漁場では「見逃し漁」といってホマチを認めているといわれ、世間知らずの私は、人生の教訓として学びました。

石狩魚場の雇いでの人生経験は、家では学ぶ事の出来ないことが多かったとおもいます。鮭の寒干し、飯鮭の漬け方、筋子の樽漬けなどは、深夜業務が終わってから、アイヌの人からアイヌ秘伝の漬け方や保存方法を学ぶ事ができました。直接の指導でしたので口承では感じ取れない体験でした。

一〇月二〇日には切り上げ、後獲り漁の人達を残して番屋のメとあります。最後には給金の支払いが行われます。事務方から地方から雇われた若衆に給金が支払われます。

机に囲まれたところで、順番に盤に乗せられた給金を受け取りますが、出口には二ヶ月分の酒代、胴着、雨合羽、特長靴などの支払いがあり、それらの貸付金の支払いが終わると、次の漁場への旅費しか残っていないのが現状でした。

それでも若衆は、次の漁場の話をして、仲間を伴って仕事を求めて流れて行きます。思い思いに寝具や手提げ袋を持って、「またな」の挨拶で散って行きます。

私は、後始末のため遅れての切り上げとなりますが、組合員のため「給金無し」となり寂しいものです。しかし、石狩の自然で、多くの人達が開拓し、生活し、今日の石狩の歴史が文化として残されて来たことを思うと本当に感謝にたえません。



昭和31年頃の鮭の荷揚げ作業（筆者と平治さんの奥さん・堀神威漁場）



昭和30年頃の石狩灯台



昭和30年頃の筆者（堀神威漁場にて）

北海の粒買船早春の日本海を征く

吉岡 玉吉

はじめに

一、粒買船と練買付け

(一) 粒とは

(二) 粒買船

(三) 粒練の買付け

二、粒買船航海のあらまし

三、愈々生練満船して内地に向かう

四、第五長栄丸乗組員及び昭和十七年前後の所得

(一) 粒買船の乗組員

(二) 乗組員の所得

五、余話

(一) 厚田村青島丘陵から見る粒買船の勇壮

(二) 魚粕と米の物交の時代

(三) 河川港の河口の出入港は難航だった

おわりに

話者

資料①昭和一六年昭和一七年石狩三地区練生積漁(粒買) 船調

参考資料

はじめに

昭和初期の本道の交通網は、内陸部は開けていたが沿岸部、特に地元海岸部の陸路は途切れ途切れの状態であった。しかし海路は必需品(諸物資)輸送で沿岸漁業の発達に伴い、運送は気帆船(漁船)の進出と共に需要を極めた。

本稿で紹介するのは、早春から五月中旬ころにかけ、北は樺太(現

サハリン)西海岸本斗(現ネベリスク)真岡(現ホルムスク)南は本州新潟まで主要食糧鮮魚である練を運搬し、往来した漁船の一端を纏めたものである。

練生買いが盛んになるにつれ、転用船が増え、不謹慎で「てんでんばらばら」(不統制の意)に行動する船舶もあった。時(昭和十年代)は戦時体制で配給統制も敷かれ、船主、従事者の規制、円満(円滑、適正)な運搬事業を図るため、練運搬船統制組合連合会(下部組織、石狩練運搬船統制組合など、総計船舶千二百七十九隻、昭和一七年三月発足)結成施行されるにいたった。

練の漁期は早春であるが、その地域沿革によって時期、潮流、水温等によって接岸の時期が変わるが、概ね次々と北上して行くのが習性である。

本道西海岸に於ける練来遊の枯渇を見るに大正十三(一九二四)年以降松前杜絶、昭和七(一九三二)年以後積丹以南皆無、最大漁場だった歌棄、磯谷来遊杜絶。昭和十(一九三五)年以降余市、古平方面杜絶となつて転換者が続出、当該海域以南は幻の魚となつていた。

扱、転換した漁業者や中小型漁船を所持する親方は厚田、浜益、増毛以北で今だ回遊漁獲する練を目当てに「生買」「生売り」「自家加工」を目的に運搬を始めた。

四月上旬から五月中旬頃まで留萌沿岸、「天売、焼尻」「利尻、礼文」尚、樺太西海岸まで生買いに馳せ参じた。

生練であるため、積載量の手頃で慣れ(生きがさがる。腐るの意)が少なくない独航船(二四、五屯前後・北千島鯉流網漁の漁船)が最適で遠距離航海にも適し四泊五日位を有する樺太西海岸から本州新潟港の運行にも堪える船体だった。

本稿では北海道、本州東北部粒買船(生買運搬船千二百数十隻、練運搬船統制組合連合会)のうち石狩港船籍二四隻中、転用粒買船(独航船)一〇隻を中心に北千島へ出漁(五月二〇日)までの一部を紹介

することとした。

一・粒買船と鯨買い付け

(一) 粒とは

広辞苑の解説、一部に人又は物の集合体を構成する個々の人または物。果物や細かいものを数えるに用いる語。とある。とれたて(獲れたばかり)の生鯨の呼称。ツブ(ボ)またはツブニシン(粒鯨)という。語源は粒立つ(多くの粒になって現れ出る。つまりあわだつ)ように、多量に群れをなして接岸するところから粒鯨の異名が生まれたものと推定する。

(二) 粒買船

「ツボカイセン」または「ツブカイ」と言う。一般では生鯨運搬船のことである。船は百屯以下のもので二十屯から五十屯位で小型内燃機関の漁船が主、他輸送船も当たっていた。漁船はダブル(船倉)にローリング(横揺れ)で荷崩れしないように仕切つて「ばら積み」して航海する。(以下拙著『北海道日本海漁労漁具用語辞典』参照)

(三) 粒鯨の買い付け

粒買船は鯨乗網の知らせて夫々の建場に至り浜値(時の相場)で交渉、鯨籠(割り竹で編んだもの石油箱一個半から二個位入る籠、古くなると二・五個位入るようになる)、豊漁の時は網元も船頭も大様なも時化早い春の海のこともあつて、早々に催す(処理)べく鯨籠の見面もこだわらず万棒(荷役など物品の数量を確定する数取る棒。『数取り』)を取る。(数えるの意)

網元は、沖売りは手間も省け安値になるが素早く現金になるので、筵旗を立てるなどして沖を通る粒買船を誘致した。昭和初期(昭和十年代)の買値は奥(北)へ行く程安くなり一籠五十銭から一円五十銭位を上下していた。反面売り値は酒田(山形)土崎

(秋田)新潟と南に行くほど、三倍、五倍の値で取り引きされた。時世は戦時色(日中戦争、昭和十二年七月支那事変)が強くなり昭和十二年には国民精神総動員運動が始まり国家総動員法が制定され同十五年には米穀の配給、同十六年には物資統制計画が一層強化され衣食住の諸物資は切布制から配給制へと移行し鯨もその一部となっていた。

米の値段 一九二七(昭和二)年一俵(六〇キロ)一三・五円
二〇〇三(平成十五)年では一万三七四八円よって一円が一〇一八円となる。(北海道の歴史がわかる本より)

昭和十一(一九三六)年白米一俵一・三六六銭。昭和一六(一九四一)年、同一、九五〇銭。

身近なもの値段 風呂貸大六銭、小三銭、ゴールデンバット八銭、昭和一八年になって風呂貸八銭、小四銭、金鶏二三銭。

昭和一七(一九四二)年石狩本町地区で五十銭持つて風呂に入り(七銭)石狩座で活動写真(映画)3本を見て(二五〜三〇銭)本町の岡田食堂で鍋焼きうどん(十五銭位)食べ帰つてもお釣り(二〜三銭)があつた時代。

昭和一六年頃までの鯨生買い付け、生売り業者はてんでんばらばら気ままに操業していたが戦時色厳しくなり統制経済が強化されるに従つて国の政策に則り昭和一七年三月小樽、函館、岩内、本道四海岸の船主操業者が中心となつて鯨運搬船統制組合連合会(二六単組一、二七九隻)を設立、適正な集荷配給、漁獲物の運搬事業の統制に服して運航した。

戦後(昭和二十年以降)尚諸物資不足し需要が見込まれたが、漁獲量の減少、その上樺太の放棄で回航不能となり、年を追うごとに運航を取り止める船主も出て組織も自然消滅的に解散するに至つた。

二、粒買船航海のあらまし

注(1) 本項は昭和一七、八年(一九四二、三)年四月上旬より五月十日頃まで、樺太西海岸から本州秋田県土崎港(現秋田港)に粒買船として航海した五月二〇日北千島鮭鱒流網漁に出漁する独航船、吉岡漁業部・船主吉岡三之助所有第五長栄丸(二五屯焼玉機関七五馬力、速力9ノット、積載能力一万貫)。及び金田漁業部船主金田寅之助所有第五吉星丸(三〇屯焼玉機関八〇馬力、速力9ノット、積載能力一万二千貫)の秋田一航海、新潟一航海の推定運行状況を記載したものである。

(二) 船舶の操縦運転について

二十屯以上の船舶は登記船(登簿船)と呼称し当時の運輸通信大臣が発行する海技免状(航海士甲、乙、丙種)の取得者でなければ操船、機関の運転はできなかった。

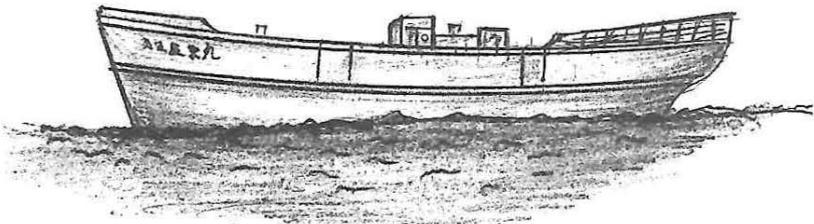
粒買船は石狩港を船出して一昼夜弱で樺太西海岸、本斗(現ネベリスク)真岡(現ホルムスク)沿岸の鯨場に至って即買い付けして満船し目的地に向かう。樺太西海岸から土崎港まで凡そ五二五哩。樺太西海岸から新潟港まで凡そ八七九哩(一哩は一、六〇九メートル)

昭和十年代頃の小型漁船(二十屯以上)や小型運搬船(二十屯以上)それ以下でも海図、定規、羅針盤を頼りに操船、陸の基点、岬を見て、船長(船頭)始め堪能な乗組員によってラット(操舵輪)を取って航海したものである。生鯨など満船すると速力は二割から三割方落ち、それを見越して航海することが肝心であった。此の処の鯨の回遊は時代を経つに従って北海道西部海岸を厚田、浜益、増毛と群来は北上し四月中旬から五月中旬頃まで天売、焼尻、利尻、礼文、樺太西海岸(本斗、真岡)まで移動して行き、多くの粒買船も北へ北へと積み込みに殺到した。

漁船に冷凍設備のない時代ダンブル(船倉)にばら積みするた

第五長栄丸(独航船)概要 5/17.8.

船舶番号 41744 船籍港 石狩港 総トン数 24.93
 公称馬力 75馬力(無塩水三気筒) 速力 9.2 (17K)
 積載能力 1万3千石
 所有者 石狩郡石狩町大森棧町 吉岡三之助



注 粒買船の転用は例年5月下旬北千島鮭鱒流網漁に出漁し、土崎港に帰港し、船倉に網籠を積り、漁具を積み、操業した。

め、こなれ(生きが下がる。くたくたになること)をなくし鮮度を維持するには十屯未満の小型船が適すが、遠洋航海で秋田、新潟まで行くには積荷に比重のかわらないですむ二〇屯から三〇屯級の漁船(独航船のような船)が最適だった。

漁船は主に木造であったが造りは頑丈に出来ているため慢心して慾も手伝って必要以上に積荷をする乗組員(船長)もいた。

満船すると停止しても甲板の低いところでは海水が浸き、長靴でなければ歩けないほどで航海、ヤマセ(南東の風)の強い日、

波浪に向かつて進み波間に突つ込み浮力を失いそのまま沈没した漁船もあった。

注「愛冠のヤマセ」「寿都の出し風」「茂津多のヤマセ」早春から初夏にかけて本道西海岸の航海の難所であった。

三、愈々生鯨満船して内地に向かう。

注 粒買船（積船）は、満載すると凡一〇、〇〇〇貫（三七、五〇〇キロ）ほどになった。この時代北海道人は本州を内地という。多くの船は新潟港を目指した。本斗沿岸の鯨建場（定置網）で買付けし荷重に出航、樺太南端のノトロ岬を交わして右手に浮かぶ海馬島（現モネロン）を見ながら本道西端の野寒布岬（稚内町、現稚内市）に進路を取る。稚内港（粒買船四九隻（昭和一七年時）陸揚港（生売り、自家加工）避難港）、日和を見ながらビルジ（塗、船底にたまった汚水や積み荷（ニシン）から出た水）を手押しポンプで汲み出しながら礼文、利尻島の山岳、残雪の残る利尻富士（利尻岳、一、七二メートル）を仰ぎ見ながら利尻水道を南下、天売焼尻島に進路を取る。留萌港（粒買船三二隻、陸揚港（生売り、自家加工）避難港）を左手に見て通過。

風では積丹半島（積丹岬）にコンパス（注 羅針盤、進路の俗称）を執るが出し風（ヤマセ）の強弱によつて小樽高島岬、強風になれば雄冬岬、続いて愛冠岬（十屯以下の漁船では通常のコース）と石狩平野から石狩湾に吹き下ろすヤマセを避けながら陸伝えに航海し、古潭沖あたりから高島沖に暫時コンパスを合わせる。

○浜益村（粒買船九隻、陸揚港（生売り、自家加工））

○厚田村（粒買船十一隻、陸揚地（生売り、自家加工））

○石狩港（粒買船二十四隻、陸揚港（生売り二三隻、自家加工六隻、

生売り自家加工五隻、避難港）

○小樽港（粒買船二二〇隻、陸揚港（生売り、自家加工、避難港））

○余市町（粒買船一〇六隻、陸揚地（生売り、自家加工））

○美国・古平（粒買船五〇隻、陸揚地（生売り、自家加工、避難港））

積丹岬を越すと即神威岬、過ぎる海路は開け嘗ては鯨のメツカ神恵内、泊漁港。

○神恵内村（粒買船八隻、陸揚地（自家加工））

○泊村（粒買船十八隻、陸揚地（生売り、自家加工兼用））

神恵内村川白岬の沖合まで来ると岩内の雷電山（一三二二メートル）から下りる雷電岬が迫り進路を執る。スケソウ（スケソウダラ）の主産地、岩内港を左手に見ながら進む。

○岩内港 三月四月はスケソウはい縄漁は魚閑期となり在籍中の漁船は粒買船として就航した。（粒買船二五三隻、陸揚港（生売り、自家加工））

山岳地帯の海岸は、ヤマセは山系に遮られ穏やかだが雷電岬（刀掛岩）交わして磯谷（寿都）沖に差し掛かると寿都港に吹き降ろす「寿都の出し風」（注 狭い平野部から吹き降ろす南東風。春、秋最も強く吹く。小型船舶の難所）

○寿都港（粒買船二九隻、陸揚港（生売り、自家加工、避難港））
強いときは寿都港に入りながら航行するが弱い時は宜候（直進のこと）弁慶岬（寿都）に針路を執り、交わすと鳥牧、狩場山（一、五二〇メートル）地から下りる白糸岬に梶を取り交わすと船舶の難所と云われている茂津多岬（その昔、西蝦夷三嶮岬（雄冬、神威）の一つであった）当該岬を過ぎると西方に奥尻島が見え島肌に向けて舵を取る。近づくに従つて島の難所と云われる稲穂岬（賽の河原）が行く手に迫る。周辺は遠浅で幾多の船舶が乗り上げる。海難事故があつた由、海図を睨みながらラット（舵輪）を握る。

ヤマセの強く吹くときは茂津多岬から海岸に沿つて北檜山の水垂岬、尾花岬、大成町の帆越岬にコンパスを執り交わすと熊石、乙部、江差の街並を左に見て進む。右手後方に奥尻島、右西方向に

松前町の大島、小島が見え本土(注 奥尻島釣懸(奥尻港)の人々 本道の呼び名)と小島の間を航海。津軽海峡を横断、時化も様 ときは福島町白符(注 文安四(一四四七) 年陸奥(現青森県 下、一部岩手県、下北半島の市)の馬之助を云う人がこの地に来て始めて鯨漁をしたところ)周辺のエンカマ(小満漕)。尚、 その右手、山頂に白雪を頂く白神岳(一二三二メートル)、裾野を海に落としているように見える。小型漁船などの航海はエンジンの音、風の音、波を蹴立てる音以外何も聞こえるものはなし。 退屈だが、どっこい「板子一枚地獄」船乗家業の宿命と眠気を覚ましてラットを握る。

やや沿岸部に入ると秋田音頭の歌詞にもある「八森ハタハタ」の八森の街並が開け、続いて能代港(河川(米代川)港、避難港) 平野部の一角に霞むに見え、やがて生剝、「男鹿ブリコ」で有名な男鹿半島が迫り随一潮の流れ(入江、小湾)に入り避難、納まるのを待つて青森県竜飛岬から小泊岬に針路を執る。

○函館港(粒買船七九隻、陸揚港(生売り、自家加工))

○青森港(粒買船二二四隻、陸揚港(生売り、自家加工))

○青森県八戸市(粒買船二六隻、陸揚港(生売り、自家加工))

小泊岬を交わすと鯨ヶ沢(河川(赤石川)港、避難港、一部生売 港)の大戸瀬岬に進み、続いて津軽最西端の黄金崎、艦作崎、 右西方に久六島を眺めながらラットを握る。左手に名峰岩木山 (一六二六メートル)を遠望するにつれ速入道崎、半島のシンボル本山(七一六メートル)を一巡して良港「船川港(現男鹿港、 避難港)に入港するか」となったが、積み荷は生鯨日和も良好、「航海は急げ」と第二の寄航港土崎港。(現秋田港、河川(雄物川)港、 生売り、避難港、石狩船は多く陸揚げする港)

新潟港に向かう。船は男鹿半島入道崎から出羽山地より降りる平野を左手にしながら東北の名峰鳥海山(二、二三〇メートル山形

県領)を遠望しながら右手に浮かぶ飛島(山形県)との間を進む。 やがてかつては北前船の日本海随一の寄港地であった酒田港にいたるが。

○山形(酒田港、河川(最上川)港、粒買船一一隻、陸揚港(生売り、自家加工))

寄航せず、土崎港より新潟港の海路凡そ三五四哩を粟島(新潟県)を右に見て進路を新潟港に執り、凡そ三泊余(八四時間強)の航海を終えてレット(測深索)を打ちながら新潟港に入港。

○新潟港(河川(信濃川)港、粒買船八隻、陸揚港(生売り、自家加工))

予め契約していた荷受人に引き渡し荷揚げし一泊の休養を取り出航。乗組員六名のうち三名出身地新潟県北蒲原郡南浜村大字島実見浜(現新潟市北区島見町)を横目(懐かしく哀愁を込めた)で見ながら五月二〇日北千島鯉流網出漁を待つ僚船の石狩港を目差して粟島を左に見て帰路についた。

注 往路は鯨満船、その上対馬海流に向かって進むので船足は遅いが帰路は空船、対馬海流に乗って寄港することもなく一路石狩港に来るので二昼夜弱(四八時間弱)の航海だった。

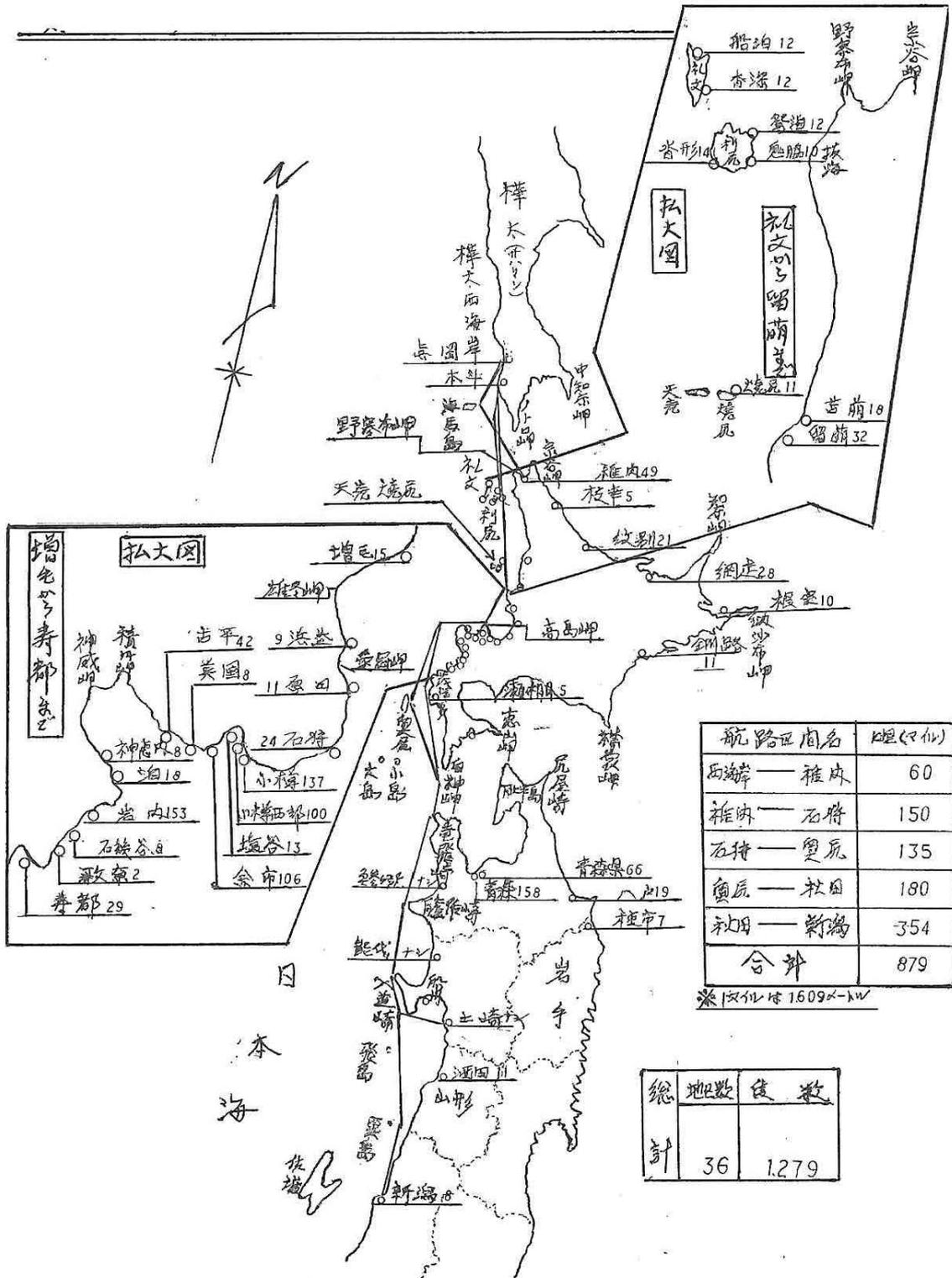
注 昨今新日本海フェリー小樽(新潟)間(からいらつく、一八、二二九屯速力二二、七ノット)往きは十八時、帰りは十六時間で航海している。

四、第五長栄丸乗組員及び昭和一七年前後の所得

(一) 粒買船の乗組員

粒買船は鯨漁期の一時的に業とする船で専門の船ではない。手頃な漁船(独航船)がその任に当たった。

注 二〇屯(三十屯)では五人から六人の乗組員だった。 第五長栄丸(二四、九三屯、七五馬力、九ノット)



鯨生買（生売り）船主港及び粒買船（独航船）航路概要図

船長 吉岡芳美 明治四二年九月五日生（父母 島見浜生れ 石狩町）

機関士 岩本勇作 明治四五年三月3日生（石狩町新町）

水夫長 小畑六太郎 大正四年一〇月六日生（石狩町横町）

油差 有田助次郎 大正十一年八月十七日生（島見浜）

水夫 有田三郎 大正十三年三月一〇日生（島見浜、助次郎の叔父）

水夫 山田竹雄 大正十五年一月三〇日生（島見浜）

(二) 乗組員の所得 注 粒買船の乗組みは本業に非ず臨時収入である。

給料

船長 百二十円

機関士 百十五円

油差 八十円

水夫長 八十五円

水夫 七十五円

歩合金

水揚げ純利益の七分を歩合金とする。但し生鯨買入資金、燃料其の他鯨買入売り場に用する一切の費用通信費、消耗品等を差引きたる利益金。食料費は乗組員一人に付一ヶ月拾八円の割りで支給される。以上連合会。

航海手配など

昭和十七年三月九日石狩鯨運搬船統制組合生鯨運搬船協定事項

(一) 航海手当支給の件

各自任意に支給すること

但し乗組員数ヨリモ一人分多ク船主ヨリ支給ス

其ノ配当方法、船長五分、機関士三分、水夫長二分ノ割合トス

(二) 漁夫歩合金ノ件

水揚げ純利益ノ七分ヲ歩合金トシテ支給スル事

但シ生鯨買入資金燃料、其ノ他 鯨買入売場二用スル一切ノ費用通信費、消耗品等ヲ差引キタル利益金

(三) 乗組員の食費支給ノ件

食料費ハ乗組員一人ニ付一ヶ月拾八円の割ヲ持テ支給ス

(四) 買入品以外ニ乗組員個人ニテ別途積込セル鯨其ノ他鮮魚ト言ヒ全部船主ノ収入トスル事

右四項ハ大型船ニノミ適用ス

入会金並ニ損害金徴収ノ件

① 石狩町漁搬組合ニ加入セル漁船一隻ニ付年拾円也ヲ会費トシテ納入スルコト

② 右ニ加入セシ漁船ハ損担金トシテ公称馬力一馬力ニ対シ年參拾錢ノ割リニテ納入スルコト

右会費負担金ハ即時漁業組合ノ係員ニ納入スルコト

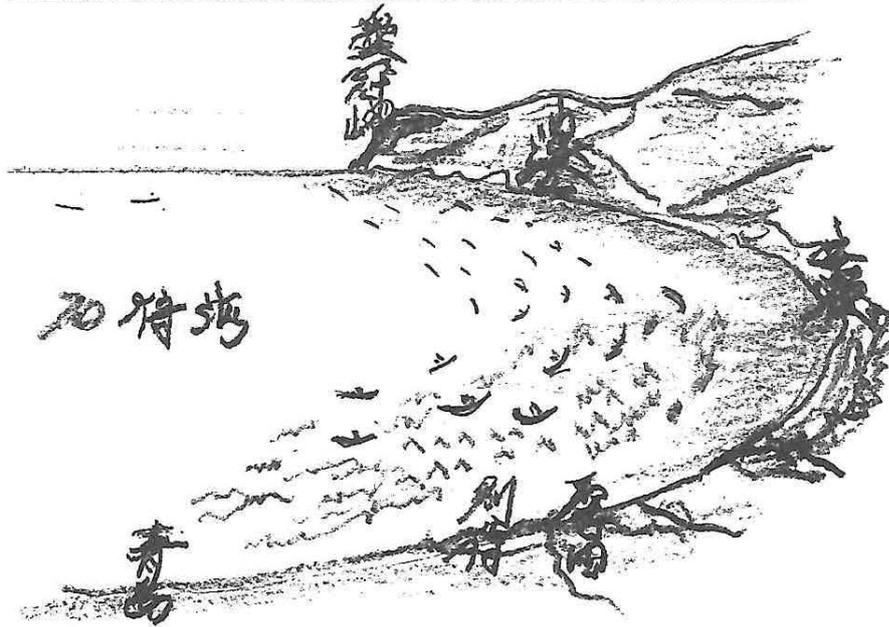
取り決め時漁組内に漁搬書記を置き同十七、八年は順調に処理されていたが、十九年二十年は戦争終盤になり海運危険に陥り解散状態になり戦後（昭和二十年以降）船主個々の運営になった。（金銭取り引きより物々交換が横行し、公定価格が無視され闇値の時代に）

五. 余話

(一) 厚田村青島丘陵から見る粒買船の勇壮

厚田村（現石狩市厚田区）の青島（小谷村）のガンケ（崖）に立ち満船して進み来る粒買船の波を蹴立てる勇壮を一同悦に入つて見守る。昭和十二年（一九三七）年筆者小学校六年生の五月上旬である、厚田浜の鯨漁は四月中旬頃が最盛期で近海の粒買船の往來は終わっている。今時の子供らは集まって路傍を走る自動車の車種やら色、ナンバープレートを当て合い悦になつていようように、

昭和十二年五月、石狩湾を航する船



昭和十二年五月月上旬厚田村青島から愛冠岬を望む。ヤマセ（南東の風）強く吹くため昼粒買船が生練を積船して数十隻岸寄りに航海していた。悪友と海を蹴立て進む雄姿と数を競って楽しんだものである。筆者小学校六年生。

この頃の子供らも海上を往き来する船舶の容姿や数などを競ったものである。

石狩湾を航海する船は風の日は遠近に点在し船の大小、数を数えて楽しむが、ヤマセ（南東の風）が強く吹く時は雄冬岬から愛冠岬と岸寄りに進んで来る。特に石狩湾の四月、五月は出し風（ヤマセ）の猛烈に吹く時期で「寿都の出し風」を凌ぐ恐さがある。

この時期は奥（利尻、礼文、天売、焼尻）から粒買船が喘ぎ喘ぎ愛冠岬を交わして小型船程岸寄りして来る。大型船でも風波を避け湾内を航行する。四、五人の悪童が「オレは五十五隻数えた」「オラは五十七隻数えた」中には「そつたらに居ねえべー五十五隻が本等だべ」と交々。船は大小様々（一〇屯〜一〇〇屯まで）、数も然ることながら速さや船の格好も見極めの対称だった。

何艘もの船が白波を蹴立てて風浪に突っ込んで船を上げて来る様は活動写真で見る軍艦（駆逐艦）宛（さなが）らである。波を掻き分けて進んで来る姿は軍艦マーチを歌いながら雄姿を見守ったものがある。見ている間に白波を分け進んでいる船が一瞬見えなくなり「アレ、出てこない、沈んだ」と叫んでいる間に頭（舳）をもたげて乗り切つて進む、皆が「格好良いな」「駆逐艦みたいだな」と叫んで悦になっていた。時化時の操船の苦労も知らず早く大人になってあのような船の船長になって舵を執つて見たいと思つていた。

（二）魚粕と米の物交（物々交換）の時代

昭和十年代は戦争最中（日中戦争、太平洋戦争）の時代で諸物資（衣食住）は日増しに苦しくなり、統制経済著しく金銭売買より物々交換が主体となって、尚戦争が終わつて何とかなるだろう思いきや一層物交が激しくなった。統制は解けず推移する中で非公式に船舶による魚粕と米の物交が始まった。

秋田県土崎港（現秋田港）に行き、米処の大曲（現秋田県大仙市大曲）に行くとき魚粕一俵（正味二十四貫（九〇キロ）、米三俵（一俵十六貫（六〇キロ））と交換する。米を積んで利尻、礼文島に行くときなどは米一俵で魚粕三俵で交換するという漁家と農家が欲しい物品を船速（速力）の速い独航船が北千島鮭鱒流網漁に出漁する漁閑期、片手間に二、三回航海し乗組員の臨時収入とした。闇商売であり粒買船のグループとは別行動であった。

この頃、大曲の農家では普通一段歩では米三俵しか獲れないが一段歩に魚粕一俵入れると七俵の収穫があり北海道から物交を好んでいたと云う。

(三) 河川港の出入港は難航だった

河川港の河口は砂泥底が多く年毎に浅深が変わり船舶の出入りは困難だった。石狩川河口を認めると、川幅は優に三九九・六メートル(昭和二十年頃まで)であるが、水深は本流で四、五メートル、その幅は四、五十メートルで左右は二、三メートルで浅い。波のある日は波立って分かるが穏やかなときはどこが深いか分からない。

出入りは一〇屯前後では容易だが二〇屯以上の船では苦勞する。一番深い所で二〇屯級の空船でも出る時うねりによって船底(竜骨・キール)がドスンと叩いて気味が悪い。生鯨を満船しては一〇屯前後の船しか入港できず、時化早い早春では生売りは小樽港に回航した。

見極めは波のある時、左右川尻側は細波が立ち三角波が伴い浅いと分かるが風のときは蕩々としておりどこが深いか分からない。その時は舳に立って陸(地形)を見ながら水面を見る。川水の流れの早い所、海水を押し切り若干盛り上がり、水面が小刻みに走り、そこが河口深部と分かる。(注 石狩籍船舶の乗組員の体験)夜間は陸上来札、聚富の境界附近に河口航路標燈(柱)が設置されており堤に従って入港することが出来た。(注 当時は不定期に修整されていて増水によって若干の河口移動があり注意して活用することがあった。何処の河口港で相当熟練しなければ出入港出来ない航海者の難所であった。

石狩港では二〇屯以上漁船を中型船と呼称し備え付けの測深索(レット)でエンヂンを低速にして水深を計り河口を乗り切ったもので、当時本道西海岸では留萌港、本州では青森県鯉ヶ沢港、

秋田県能代港、土崎港(現秋田港)、山形県酒田港、新潟県新潟港などの河川港で入港時は昼夜を問わずレットを使用したものである。

注 航路標記燈

灯光、形象、彩色、電波などにより、安全で経済的な航路を示し航行の安全性を確保するための目標物或いは信号装置の総称である。

おわりに

昭和初期(昭和三〇年頃まで)の中小型の漁船は漁撈上木造であるが堅牢で機関(馬力)も一般運搬船より強力なものを設置して(無注水 油発動機、焼玉エンヂン)二〇屯以下は単筒(シリンダー一機)二〇屯以上は概ね二気筒シリンダー二機 復筒とも云う、三気筒(シリンダー三機)を搭載した。二気筒、三気筒は比較的故障は少なくない機関で、速力も一般輸送船は五、六ノットであるが漁船(独航船)は八、九ノットで走行していた。

エンヂン(神戸鉄工所(通称神戸の赤。シリンダーを赤にしてあるところから)新潟鉄工所、本間鉄工所) 快適三昼夜四昼夜走り続けても異常なく樺太西海岸から内地(本州)新潟県新潟港まで三、四日凡そ七、八百哩寄航せず異常なしと。乗組員は「板子一枚下は地蔵」と云いながら荒波と闘い日本海を航海した。

主たる内容は本会顧問田中實氏秘蔵の昭和十七年度石狩町漁船組合長金田寅之助所管の漁船組合関係綴を踏襲し、当時各船乗組員であった先輩、同僚からの経験談及び拙い自らの体験を合わせ、忍んで記載したものである。内容等に未だ不十分な部分もあるが話者等に感謝し、相違点があればご叱責、ご批判下され御指導御教授戴ければ幸甚です。

終りですが監修して下さった田中實郷土研究会顧問のご健康とご活躍を祈念するとともに、いつも拙稿を校正点検し、入力にご尽力いただいている三島照子氏に厚く御礼申し上げます。

筆者 齢八十九歳

貴重な体験談をお話頂いた大先輩諸氏に敬意を表し、改めてお名前を挙げさせていただきます。

話者

第五長栄丸船長

吉岡芳美

明治四二年生

船場町

第五吉星丸船長

金田清吉

明治三七年生

船場町

福運丸後第五長栄丸船長

金田平治

明治四四年生

横町

長栄丸船長

石黒石松

明治三九年生

横町

吉岡漁業部 三之助孫

吉岡治男

大正十五年生

横町

山田竹雄

大正十五年生

新潟県南浜村

有田次郎

大正十一年生

新潟県南浜村

佐々木五郎

大正十一年生

横町

金田漁業部長男

金田芳夫

大正十二年生

船場町

岩本勇作

明治四五年生

新町

小畑六太郎

大正四年生

横町

長谷川清一

大正八年生

横町

後藤漁業部三男

後藤国男

大正十五年生

親船町

山下義一

大正九年生

八幡町来札

大河原幸次郎

大正三年生

古平町

阿部孝太郎

大正二年生

横町

資料 ①昭和十六年昭和十七年石狩三地区鯨生積漁(粒買)船調

参考資料

石狩町漁船組合関係資料

昭和十七年三月九日

組合長金田寅之助

鯨生積漁(粒買)船調

昭和十六年三月 船主 吉岡三之助

北海道の歴史が分かる本

平成二十年 桑原真人ほか 亜璃西社

水産百科事典

昭和四七年

水産百科事典編集委員会編 海文堂出版

日本の船

昭和三二年 石井謙治 東京創元社

広辞苑(第三版)

昭和五八年 岩波書店

石狩漁業協同組合史

平成一四年 田中實ほか

石狩町年表

昭和四三年 田中實編

北前の記憶

平成十年 井本三夫 桂書房

北海道の地名

平成十二年 山田秀三 草風社

北のさかなたち

平成三年 北海道新聞社

石狩町誌中巻二

平成三年 石狩町

北海道の地名

平成一八年 平凡社

樺太文学の旅(下)

平成六年 木原直彦 共同文化社

蝦夷地から北海道へ

平成一六年 田端宏編 吉川弘文館

旅といこい(第一二版)

平成二年

警察共済組合監修・あさひ共済編

北海道日本海漁撈漁具事典

平成一五年 吉岡玉吉編

船(もの)と人間の文化史(二)

昭和四三年

須藤利一編 法政大学出版局

資料① 昭和 16 年、昭和 17 年石狩三地区鯨生積漁（粒買）船調

組合名	登録番号	船名	屯数	馬力	積載能力	運搬目的	陸揚地	運搬主氏名
石狩運搬船統制組合	947	第三熊野丸	30.81	65	11000	自家加工	小樽 留萌	福岡 長次郎
	948	第三相生丸	18.00	55	7500	生売	小樽 厚田	田村 兵松
	1002	間瀬丸	24.94	51	7500	生売 自家加工	小樽 留萌	金田 寅之助
	1003	萬歳丸	10.36	16	2500	生売	石狩	忠海 多兵衛
	1004	第一北洋丸	11.43	25	2200	々	石狩 小樽	宮下 定吉
	1005	第二吉星丸	24.94	80	10000	々	小樽	金田 寅之助
	1006	昭栄丸	5.44	12	1500	々	石狩	相原 重治
	1007	長栄丸	25.21	54	10000	自家加工	小樽 留萌	吉岡 三之助
	1008	第五長栄丸	24.93	75	10000	生売 自家加工	々	々
	1009	共徳丸	23.73	63	7000	自家加工	小樽	々
	1010	白龍丸	24.96	70	8500	々	々	後藤 要次郎
	1011	第五白龍丸	24.84	60	8000	々	石狩	々
	1012	龍生丸	24.93	75	10000	生売	小樽 留萌	柴田 久吉
	1013	第三南丸	11.94	25	6500	々	小樽 石狩	南 甚一郎
	1014	南丸	5.70	8.0	1500	々	々	田中 周作
	1015	第五昭宝丸	24.96	70	7500	生売 自家加工	小樽 留萌	吉田 庄助
	1016	第二長運丸	27.11	80	10000	々	々	有田 留三郎
	1017	第二田村丸	9.00	12	2000	生売	小樽 石狩	有田 久治
	1018	第 幸徳丸	11.38	12	2500	々	々	高澤 貞雄
	1019	扇松丸	10.00	25	3500	々	々	鈴木 傳吾
1020	昇龍丸	6.74	13	2500	々	々	吉岡 興平	
1021	第三梅丸	24.94	60	7500	生売 自家加工	小樽 留萌	吉岡 綱雄	
1022	第二柏丸	19.38	50	6000	々	々	内山 昇	
1023	稲荷丸	5.80	8.0	1200	生売	小樽 石狩	岸 庄平	

計 24 隻

注、24.5 屯級の漁船は秋田土崎港、新潟港に一航海した。

組合名	登録番号	船名	屯数	馬力	積載能力	運搬目的	陸揚地	運搬主氏名
厚田運搬船統制組合	567	第二金比羅丸	8.39	16	500	生売	小、留	
	568	宝盛丸	4.80	8.0	1500	々	小	
	569	第三崑盛丸	18.73	40	4000	生売 自家加工	小、留、厚	チャーター船
	570	厚生丸	17.88	60	8000	生売	小、稚	チャーター
	571	久吉丸	9.90	12	2500	々	小	
	572	八幡丸	10.00	12	4500	々	々	
	573	更生丸	10.00	10	3000	々	々	
	574	第二共盛丸	10.00	12	3500	々	々	
	575	八幡丸	19.50	40	5000	々	小、留、稚	チャーター
	576	第一漁吉丸	19.50	60	6000	々	々	チャーター
577	大和丸	19.97	50	6000	々	々	チャーター	

計 11 隻

粒買船主、小山幸一、西田幸一郎、佐藤（大正湯）、八島政雄、佐藤常三郎、櫛引岩蔵、住谷治、伊藤市之、佐藤久五郎（濃昼）、竹田盛爾（古潭）、河内久蔵（古潭）

組合名	登録番号	船名	屯数	馬力	積載能力	運搬目的	陸揚地	運搬主氏名
浜益運搬船統制組合	1032	はま丸	19.95	50				浜益漁組
	1033	第一石狩丸	18.46	30				藤原 右蔵
	1034	第三〇和洋丸	19.9	60				加賀谷 多三郎
	1035	八幡丸	19.02	60				工藤 勘次郎
	1036	幸徳丸	10.39	12				浜益漁組
	1037	長栄丸	10.00	21.83				
	1038	萬盛丸	9.50	29.73				中島 春吉
	1039	進盛丸	19.00	35				工藤 勘次郎
	1040	大福丸	4.80	6.0				高橋 銀次郎

合計 44 隻

石狩湾漁業協同組合にみる近年の石狩市漁業のあれこれ

高瀬 たみ

はじめに

私は石狩市郷土研究会で学んだことを何処かで役にたてたいと思い、いしかりガイドボランティアの会の会員となった。

当会では、旧石狩市の発祥の地である本町地区に来てくださる観光客、団体を案内している。

来訪者（観光客）は海辺の厳しい環境で育つ海浜植物を含めた自然、石狩は鮭の場所として古く、その江戸時代からの歴史を求めて来て下さる方が多い。

年に二、三回であるが対象が厚田区・浜益区を含めた団体もあり、広い地域になるので大変である。平成の市町村合併で、ニシンで賑わった江戸時代からの歴史ある厚田村・浜益村が加わったのである。

その新石狩市の魅力は、なんといっても変化に富んだ美しい海岸線にある。そこで石狩市の漁業を学ぶことが必要となった。それは「何処でどのようにして漁獲するのか」という質問だった。またバスの中で「今、海ではこんな魚が獲れています」と案内すると、乗客は一斉に海を見て、魚が泳いでいる情景を思い浮かべているように見え、リアルな案内に興味を示すのだ。

そこで、どのように尋ねていいのかも解らない農家育ちの私は、迷惑を顧みず漁組、石狩市林業水産課、漁業経営者の皆さんに伺いとめたのが左記である。

一・石狩湾漁業協同組合

石狩湾漁業協同組合は石狩市の漁業者の協同組織である。

平成一七年一〇月に石狩市・厚田村・浜益村の協同組合が合併して結成された。合併に先立ち、前年の同十六年一月に三漁協が合併し、石狩湾漁業協同組合が誕生、本所を厚田に置く。

その範囲は日本海に面した海岸線約七五kmに及ぶ。七五kmというのは、石狩湾新港建設に伴い、小樽市との行政区域を、港の中央水路に変更した陸上の境界までの距離ではなく、従来どおり小樽内川まで生かされた漁業権海域の距離である。

石狩の砂地、浜益の岩礁地帯、その中間で砂地と岩礁地帯もある厚田では、そこに生息する魚種・海藻に違いはあるが、捕れる種類は多い。漁協で取扱っているのは約三〇種類以上である。

地域の気候は、対馬海流（暖流）の影響による海洋性気候で、春から秋まではしのぎやすい。冬季は北西の季節風により波浪の強い海域であるが、気温は零下一〇度以下になることが少なく、本道の中では比較的温暖である。

漁業者数をみると、平成二六年一二月現在の正組合員数（*）は、石狩支所四三名、厚田支所三九名、浜益支所三五名、法人の三を入れて計一二〇である。年齢別にみると三〇代までが二〇名、四、五〇代が四二名、六〇代以上が五五名、平均年齢が約五八歳で構成されている。最近の推移は同二年の一四六名、同四年は一三三名、そして同二六年一二〇名で年々減少傾向にある。

* 正組合員数については、後記に昭和二五年の漁業者の正組合員数を記載した。現在と資格基準が違っているので後記としたが、ニシンが来なくなった影響が、いかに顕著に現れているか参考としたい。

二・漁業権区域

・旧漁協組合ごとに持つ単有共同漁業権

石狩は石狩川幅中心〜小樽内川の区間で、海岸線約一六km×距岸（*）約一〇kmまでの範囲。

厚田は、石狩川幅中心〜濃昼川までの区域で、海岸線約二五km×距岸約一〇kmまでの範囲。

浜益は濃昼川〜雄冬（石狩市の行政境界）までの区域で海岸線約

三四km×距岸約一〇kmまでの範囲。

・複数の漁協が持つ共有共同漁業権の海域は、距岸約一〇kmより沖二〇〜約三二kmの範囲で、石狩市浜益区雄冬から積丹町の区間で設定。この海域は、一定の漁場を共同で利用する入会(いりあい)海域となる。

・内水面(石狩川) 共同漁場

石狩川河口から一二km上流の学園都市線辺りまで。茨戸川は観音橋までが、内水面共同漁場となっている。

* 距岸とは、陸地の端から水面に対する奥行き長さ。

三. 石狩の特色

石狩川に沢山の鮭が遡ることから、江戸時代の一六〇〇年代に松前藩の石狩場所が設定されて以来、鮭漁業が営まれてきた地である。鮭は現在も石狩漁業の大宗を占め、鮭漁の豊凶が旧石狩漁組・石狩湾漁組に影響を与える魚である。

昭和時代に入って鮭は衰退の時期を迎える。その打開策として戦前戦後の北洋漁業に活路を開いた。石狩川の汚水で鮭はもとよりワカサギやヤツメウナギなどが激減し、生計がたたなくなつたときは、北海道の奨励する副業の養豚・椎茸栽培を受け入れるなど漁業者は苦労を重ねた。道による鮭の孵化事業、川の汚水防止運動などの努力が実り、昭和五〇年代から鮭の漁獲量が増え回復する。

石狩の海域は砂質泥土のため根付魚種が少ない海域だったが、石狩湾新港建設で防波堤・埠頭に海藻が育ち、それに付随して、ニシン・ナマコ・タコなどが増え、特にニシンは、二〇〇〇年前後から捕れ、厚田につぐ漁獲量である。

ほぼ中央に流れる大河石狩川では、ワカサギ漁・カワエビ漁・ヤツメウナギ漁の、内水面漁業があるのが特色といえる。

四. 厚田・浜益の特色

岩場・断崖の続く海岸に古くから豊かな海産物を求め、石狩同様一六〇〇年代から北前船による交易があった地である。やがて北上してきた鯨が群来、厚田・浜益両場所はニシンの千石場所となり、江戸時代以来、鯨を主とする漁業が営まれてきた地である。

鯨の大漁は一年間暮らせる利益があった。厚田・浜益の沿岸には鯨番屋・加工施設などが建ち、網元は鯨御殿を建てた。

しかし、ニシンは両地区とも昭和二九年を最後に来なくなった。それでも網や船を保存し、ニシン刺網の修理をしていた者もあった。厚田・浜益の漁業者はニシンを追って北へ、樺太までニシンの出稼ぎ、道路工事・トンネル工事にかかわり生活を支えたという。

その間、四〇年余りニシンは幻の魚となった。

そんな中、道による「日本海ニシン資源増大プロジェクト」が始まる。実行してきたのは種苗放流と資源管理などで、その結果、平成一〇年頃よりニシンの群来(くき)がみられ漁獲量が増加した。

サケの漁獲高では、近年一〇年間の統計をみると、厚田が石狩を抜いて多く、浜益の順となっている。

地域別には特徴的魚種があり、タコ・ナマコの漁獲が多く、特に厚田のハタハタは特産品となっている。浜益はホタテ養殖事業が盛んである。

五. 主な漁業の種類と経営者数

(資料:石狩湾漁業協同組合)

・刺し網漁業(ニシン、カレイ、ハタハタ他) 四九〇経営体

・サケ定置網漁業 一二経営体

・ナマコ桁曳網漁業(けたひき) 五三経営体

・ホツキ桁曳網漁業 三八経営体

・ホタテ養殖業 五経営体

・採介藻漁業 一一一経営体

	品目	数量 (kg)	金額 (円)
鮮	かれい	82,181.3	28,611,461
	かすべ	26,834.0	13,446,898
	あんこう	3,797.9	2,301,730
	ひらめ	61,217.2	48,903,635
	たこ	93,896.0	51,476,676
	にしん	690,745.5	250,782,283
	そい	20,174.9	11,836,030
	いか	695.5	361,483
	ます	3,245.8	1,905,832
	はたはた	7,805.8	7,373,036
魚	かじか	2,134.4	560,443
	なまこ	75,635.6	265,338,963
	しゃこ	46,575.5	74,041,261
	ほっけ	678.9	98,750
	いわし	15.0	4,725
	ぶり	21,893.3	3,221,353
	しらうお	102.5	328,330
	さけ	925,515.4	405,548,303
	かに	9,362.5	5,186,853
	わかさぎ	10,829.1	3,918,400
類	その他の鮮魚	8,602.9	2,744,697
	うに	4,489.2	18,028,936
	ほっき	46,253.0	19,113,443
	あわび	528.6	2,987,437
	ほたて(成貝)	211,928.9	45,581,146
	ほたて(半成貝)	164,603.0	37,798,110
	ほたて(稚貝)	466,249.1	148,176,835
	その他貝類	7,141.4	1,321,190
	ぎんなんそう	210.5	210,500
	こんぶ(加工品)	3,204.5	3,818,048
合計	2,996,027.2	1,455,026,787	

表-1 平成26年の生産高(資料:石狩湾漁協)

	漁業種類	数量 (kg)	金額 (千円)
1	定置 サケ定置網漁業	925,515	405,548
2	許可 ナマコ小型機船底引網漁業	75,635	265,338
3	共同 ニシン刺網漁業	690,745	250,782
4	区画 ホタテ養殖漁業	842,779	231,555
5	共同 シャコ漁業	46,575	74,041
6	共同 タコ漁業	93,896	51,476
7	共同 ヒラメ刺網漁業	61,217	48,903
8	共同 カレイ刺網漁業	82,181	28,611
9	共同 ホッキ貝小型機船底引網漁業	46,253	19,113
10	共同 ウニ	4,489	18,028

表-2 平成26年金額上位10種(資料:石狩湾漁協)

・タコ漁業
 ・春先の小型定置
 三〇経営体
 九二経営体
 六・漁業生産高
 表・1 平成二六年の漁業生産についてみると、総漁獲量一、九九六トン、総金額約一四億五千五百万円となっている。同一六年の漁協合併時は六千トン以上だった漁獲量が、同一〇年には半分近くまで落ち込み、さらに、同一六年には三千トンをきった。しかし、金額においては合併から五年間の平均より二一%の程度の減に留まっている。その理由として、近年ニシンの漁獲が多いのと、サケ・ナマコの単価が

高いことがあげられる。
 なお、表・1では、石狩湾漁協の取扱品目を全て記載した。取扱高の少ないものはその他で扱っているが、種類においては、三〇種以上の海産物が捕れる豊かな海であることがわかる。
 同一五年の漁業生産(資料:石狩湾漁港)をみると、総漁獲量は約四、〇五五トン、総金額約一七億一千二百万円。前記の二六年との違

いは、約一、三八一トンというニシンの豊漁にあった。金額にして約四億五千万円。いかにニシンが重要な魚であるかがわかる。それは漁業者・石狩湾漁組・石狩市・北海道のニシン増大に向けた各機関の取組みの成果であった。

表・2では、平成二六年の金額上位一〇種である。これをサケ定置網が全体金額の約二八%を占め、続いてナマコ底引き一八%、ニシン刺網一七%、ホタテ養殖一六%で、この四種で全体金額の約八〇%を占め、石狩市の水産を支えている。

七. 漁業資源の維持増大の取組み (栽培漁業)

・水産基盤整備事業 (漁場づくり)

コンクリートブロックや自然石を海底に設置する事業。魚類やウニなどが害敵から隠れる場所となり、餌となる海藻を育て、ミズダコなどが生息・産卵しやすい魚礁の設置は、昭和五〇年代から継続している。

厚田小谷地区では、主にハタハタが産卵する茎のしっかりしたフシスジモクという海藻の産卵藻場造成を、平成二七年から実施して生息地域回復に努めている。

一方では豊かな海を守るため、植樹などの活動もしているという。

・放流

種苗孵化放流 (稚貝類) ……アワビ・ウニ

孵化放流 (魚類) ……サケ・ヒラメ・ニシン・ハタハタ・ワカサギ

・養殖 ……ホタテ

八. 漁船隻数

平成二六年の漁船隻数は三五三隻となり、同二一年の三六六隻からみると、一三隻少なくなっている。トン数別でみると五トン未満の船外機船は二六五隻で全体の七五%を占め、主に刺網漁業、ウニやアワ

ビなどの採介藻漁業、定置漁業などに操業している。三トンまでが一二隻、三〜五トン未満が四五隻、五〜一〇トン未満で二三隻で全体の二三%、一〇トン以上の船は八隻で二%、大半がサケ定置網漁業に着業している。

九. 主要魚貝類について

(一) サケ定置網漁業

八月末になると、沿岸ぞいに来遊してくる鮭を取り込んで捕獲する定置網 (建網) の設置作業が始まる。その数は石狩に四カ統、厚田に八カ統、浜益に三カ統の一五カ統。海岸から沖約二、〇〇〇m前後以内の沿岸に網を入れる。一カ統とは一場所のことを指すようである。

生れた川に戻ってきた鮭を捕るために仕掛けた定置網の仕組みは、垣根のように張った垣網 (手網) で、運動場と呼ばれる鮭を誘い込む身網 (囲い網) と、逃げられないようにした落とし網 (袋網) からなる。石狩の定置網は一カ統に約六〇〇もの錨を海底におろし固定しているというが、それでも大時化などで網が破損したり流されたりする被害がでる。

鮭の漁獲は昭和時代になって、石狩川流域の開発が進むにつれ工場排水・生活用水が川に流され、とくに石狩の鮭が著しく減少した。昭和三七年、石狩町が中心となって石狩川流域市町村に呼びかけ、石狩川汚水被害防止を北海道・国・各企業に訴え、一方では鮭孵化推進事業により、昭和五〇年代から徐々に漁獲量が増え始めた。

「北海道水産現勢」による旧三漁協の統計をみると、平成七〜一六年度まで一〇年間の年平均漁獲量は、約二、六五九トン、金額にして五億五千八百万円。平成一七〜二六年まで一〇年間の年平均は、約一、一七三トン、四億二千九百万円である。尾数にすると先の十年間は年約八六万尾で、後の一〇年間は年約三八万尾であった。この減少は温暖化による高水温の影響でないかといわれている。

石狩・厚田・浜益三支所別にみる過去三年の年平均尾数は、石狩と厚田は共に約一三万尾、浜益が約九万尾であった。

平成二七年の放流は、京極町で孵化飼育した稚魚二〇〇万尾を厚田川の支流、三〇〇万尾を浜益川で二次飼育して放流している。なぜ二次飼育をするのかという点、ふるさとの川の匂いなどを覚えさせ、回帰率を高めるためという。石狩川には千歳ふ化場などから放流している。鮭は餌が豊富なオホーツク海・北太平洋・ベーリング海・アラスカ湾の北洋を四年前後回遊して母川回帰する。

秋になると浜が活気づき、漁業者は血が騒ぐという鮭漁。その定置網の準備は、八月二〇日過ぎから枠入れが始まり、九月一日に網を入れると漁がスタートする。盛漁期は一〇月二〇日頃まで約二ヶ月間ある。

石狩支所は石狩湾新港建設によって、海域が約三分の二になった。生活を保障するために、個人で持つサケ定置網の権利を組合が買い、資本の効率化、所得の分配を図るために鮭の生産組合をつくった。よって石狩支所の鮭漁は「石狩さけ定置網漁業生産組合」が経営する。浜益の二経営体は有限会社が経営する。そのほかの厚田、浜益は個人経営である。計一二経営体。

操業漁船の規模は一〇〜二〇ト前後が主流で、石狩に三隻、厚田に八隻、浜益に三隻ある。

操業は夜明け前の五時前後に出航し、七時前後（漁があれば八時頃）に陸揚げされ、仕分け作業が始まる。オス・メス・銀毛・成熟したブナ・傷物などに仕分けられ出荷先に運ばれる。石狩の鮭のほとんどは佐藤水産㈱に出荷されるという。厚田は漁連の石狩工場、浜益は道南方面に出荷しているという。

サケ漁以外は朝2時過ぎに起きて3時過ぎには出漁する。

(二) ニシン刺網漁業

厚田・浜益は江戸時代からニシンで賑わったが、昭和二九年を最後に捕れなくなった。その頃のニシンは、サハリン沿岸からオホーツク海まで回遊する「北海道・サハリン系群ニシン」で、春ニシンといわれ三月末〜五月に押し寄せた。

近年増えているニシンは「石狩湾系群ニシン」で、漁期は厳寒期の一月末から始まり〜三月と早い。

道によるニシンの種苗生産と放流は、平成八年〜一九年度にかけて取組まれた。ニシンの増大と安定した資源利用を目指した「日本海ニシン資源増大プロジェクト」である。

資源管理面では、鯨が来ない辛さ、親たちの苦勞を見てきた漁業者たちが、自主的に網目を大きくする網目規制と操業期間を統一して資源を守った。現在は「日本海北部ニシン栽培漁業推進委員会」が事業を継続している。

平成八年以前は漁獲量が一〜四トン未満の間を低迷していたが、同九年頃から回帰がみられるようになった。そこに資源増大プロジェクト・自主規制などによる成果が加わり、同一〇年以降は四〇〜二〇〇トン近くまで増えた。

そして同一六年の過去最高の豊漁を迎える。同年四月二六日付け北海道新聞の記述によると「日本海沿岸でとれる石狩湾系ニシンが今春、過去最高の千二百トン記録した。（中略）驚異的な水揚げで浜は沸いた」とある。石狩湾漁組はそのうちの七五五トン、金額にして約二億八千二百万円であった。

以来、上下はあるが、「北海道水産現勢」による石狩湾漁協の統計をみると、同一七〜二六年まで一〇年間の年平均漁獲量は、約八二〇トン、金額にして約三億三千一百万円で、将来を託せる漁業に復活した。これを三支所別にみる一〇年間の年平均漁獲量と年平均金額は、石狩二七五トン、一億七百万円、厚田四一四トン、一億七千一百万円、浜益一三二トン、五千三百万円である。

平成二五年は豊漁で、三支所併せて約一、三八一トンあり、約四億五千五百万円となっている。同年度取扱金額一位だった。

種苗放流は、厚田産の親魚を羽幌で採卵し、約6cmになった稚魚を石狩は新港の西埠頭、厚田は古潭、浜益は幌の海に放流している。ニシンは沖合の深いところに棲息して、三、四年で産卵期を迎え、海藻の生えている沿岸の浅瀬にやってくる。

資源保護のため一箱三五尾以上になると小さいので獲らない。一箱五^{*}詰め三五尾以内で出荷している。

(三) ホタテ養殖漁業

ニシンが来なくなった打撃は大きかった。その新たな活路となったのが、昭和五年から着手したホタテの養殖だったという。

厚田と浜益に区画漁業権を設定、両地区あわせて五経営体。

成貝・半成貝・稚貝の養殖を行なっている。稚貝はオホーツク方面の猿払・枝幸に出荷。半成貝は東北の宮城・岩手に種苗として出荷。成貝は韓国に生食（活貝）として活魚車で運ぶ。三、四日で着くという。韓国向けの活貝が堅調なことから、韓国向けの活貝の増大を目指しているという。

ホタテ養殖には、稚貝を海に放流し海底で育てる地撒方式と、稚貝を籠に入れて一、二年海中に吊るし育てる垂下方式がある。厚田と浜益は垂下方式で施設一台当たり垂下連数四〇〇連以内とする。

平成二四・二五・二六年の過去三年間の平均生産高は、数量で一千万トン前後、金額で二億八千万円前後であった。全金額の約一八%を占める重要な資源である。

(四) ナマコ漁業

漁場は岩礁・転石地帯の浜益が最も多く、厚田・浜益両地域とも二桁台のトン数。ところが石狩湾新港（*）の防波堤を守るため外海、

内海に積んだ石や四トンブロック、テトラポットが魚礁となり石狩でも捕れるようになった。環境条件が整ったのだ。

平成二六年の漁獲高は約七五トン、金額二億六五〇〇万円で上位四種目に入る。生のまま出荷。

保護のため漁獲量を取り決め、決めた漁獲量に達したら終了。ほかに漁期・サイズの制限も行い徹底した資源管理をしながら操業。

中華料理として人気の高いナマコは、中国経済の成長に伴い需要が増え、北海道のナマコはブランド品だという。

ナマコ漁は専用の桁曳き網を使う。桁と網との間にある鉄のチェーンの衝撃で、ナマコがゴム鞠みたいになって岩から離れ網に入る構造になっている。ナマコ漁は最も危険なので穏やかな日だけ操業するという。

*石狩湾新港での漁は突起物に支障のない限り使用可能。

(五) シャコ刺網漁業

シャコの漁場は、厚田と石狩地区の水深一〇〜三〇メートルの砂泥地。砂と泥が混じったところに潜むシャコは、産卵期を迎えて這い出して来る。波があるとふわりと体が浮いて網にかかるので、波のた

ときの方がかかりがいいという。漁期は五、六月。漁港内で茹で上げ、朝市でその日のうちに完売する人気商品。特に厚田の朝市は、当日漁獲したものが売り捌けるほど盛況だという。

(六) タコ漁業

漁場は主に浜益・厚田で、ミズダコを漁獲する。自然石・コンクリートブロックなどを設置して栽培漁業に取組んでいる。

身を守る堅い殻を持たないタコは、普段は害敵・潮流から体を守るため海底の岩場に隠れている。潮流が穏やかになると砂場で小魚・

貝などを餌にするが、隠れる場所のない砂場は危険で、そこにタコ壺と呼ばれる箱があれば隠れ場所となり中に入る。それを捕獲するが箱漁業で、一張りに二五〇百個のプラスチック製の箱が付く。浜益では、イサリという仕掛けを付けた樽流し漁業で捕る。イサリを獲物と思いついてきたとき、樽が浮き沈みするのでかかったことがわかる仕掛け。

生きたままか、茹でて出荷する。

(七) カレイ・ヒラメ漁業

沖合いの砂浜に生息するカレイ類。そのうち主にマガレイ・スナガレイ・ナメタ・ソウハチ・アカガレイが捕れる。近年、幻の魚といわれたマツカワも漁獲されるといふ。

ヒラメは、カレイ類と同じく刺網や底建網で漁獲する。

日本海のヒラメ種苗が平成七年に始まり、以降漁獲は伸び、同十二年には一〇一トン、金額一億四千万円までになった。近年は六〇トン前後で金額五千万円前後である。活魚として札幌市場に出荷している。毎年、北海道栽培漁業羽幌センターで生産された種苗を放流している。カレイ・ヒラメは砂地に生息するで、砂地の石狩が最も多く漁獲している。

(八) ホッキ貝(うばがい) 桁曳き漁業

漁場は主に石狩で、石狩川が運ぶ土砂によって形成された砂泥地帯。石狩湾新港を挟む沿岸地域だが、近年五〇トン前後の漁獲高のため、石狩では新港の南地域だけとなった。漁期は七、八月の年一回にして、資源管理の徹底を図る。

(九) 採介藻漁業(*)

漁場は、厚田・浜益の岩礁域で、ウニ・アワビ・コンブを捕る。ウニ・アワビは種苗放流をしている。

漁業関係者から通称ノナと呼ばれるキタムラサキウニが主に捕れる。ほとんどが浜益で漁獲。エゾバフンウニ(ガンゼ)は捕れなくなってきた。浜益では、船上からのぞきガラスで海中を見て、ウニ・アワビを捕っている。厚田では酸素ボンベを背負って海に潜る漁法。

コンブの漁場は嶺泊から安瀬の間で採集している。

*採介藻(さいかいそう)とは、素潜りや小さな船上からヤスなどの道具を使って、貝や海藻を採捕する漁業。

(十) ハタハタ

漁場は厚田・浜益で、漁期は一月〜二月。

平成一〇年より「ハタハタ増殖研究会」が設立、除々に漁獲が伸び同一年に二五一トン、同二〇年に一〇八トンあったのが、同二四年から三年間は一ト、八トン、八トンと著しく減少した。沖捕りが原因でないかといわれる。

近年激減したため漁協青年部が主体となり、自然孵化放流事業の取り組みを行っている。産卵場所はフシスジモク・ツノマタ・ホソメコンブなどの海藻群落となることから、平成二八年からは、厚田の小谷地域で産卵藻場造成に取組むという。

ハタハタという漢字は、鰯・鰯と書いてハタハタと読む。鰯はとどろく雷(神鳴り)の意味。鰯はカミナリウオ、雷が鳴るほど海が荒れる季節に、深海から沿岸に産卵のために寄るのを漁獲する。ゆえに一月〜二月の漁はハタハタに限らず危険な漁である。

(十一) 内水面漁業(石狩川)

漁区域は本町から札幌大橋辺りまで。それより上流の石狩川は江別

漁業組合の漁区となる。ワカサギ・ヤツメウナギ・イトヨなど川での漁は、川中央が深いので川淵で漁をしているという。

ワカサギ漁には石狩地区の組合員のほぼ全員が操業。

シジミは昭和四十六年から移植放流が始まったが、平成十八年から漁は無くなる。

十・取組みと課題

・漁組が取組む各地区で開催する朝市（直売所）にて、新鮮な魚介類、加工品を提供し浜の魅力向上に努めている。

・漁業者の高齢化・減少に対して、担い手の育成、新規漁業就労者の確保に道・石狩市が取組んでいる。

・トド・オットセイ・アザラシによる食害と漁具被害は、来遊数が増えた近年、深刻な影響を与えている現状の対策として、強化網・銃器による追い払いなどを行っている。

・現在、建設中の火力発電所の海に与える影響、計画中である洋上での風力発電の影響が懸念されている。等

十一・後記

（資料：『水産業協同組合要覧』北海道水産部漁政課）

	正組合員
浜益漁協	六二五名
厚田漁港	三二〇名
石狩町漁港	二六〇名
石狩地区定置	三九名

表-3 昭和25年度三漁協の組合員数

謝辞

資料作成にあたり、石狩市林業水産課、石狩湾漁業協同組合厚田本所、石狩支所、前石狩漁業組合長藤井重行氏にお世話になりました。特にニシン漁の季節に漁組厚田本所に伺った際は、お世話になりました。関係者の皆様、本当にありがとうございました。

また石狩市郷土研究会顧問の田中實氏からは、力強いご助言をいただきました。ありがとうございました。

参考資料

『浜益村史』 一九八〇年 浜益村
『石狩漁業協同組合史』 二〇〇二年 田中 實筆
『石狩百話』 一九九六年 鈴木トミエ筆
『浜益村勢要覧』 二〇〇〇年 浜益村
『石狩市漁業振興計画Ⅱ』 二〇一〇年 石狩市
『北海道水産現勢』 二〇一〇年 北海道
『石狩管内水産業の概要』 二〇一五年
石狩振興局産業振興部水産科
『浜の活力再生プラン』 石狩地区地域水産業再生委員会
北海道新聞「ニシン物語 厚田村から上・下」
二〇〇〇年三月二二日、同年三月二四日付
北海道新聞「石狩湾系ニシン過去最高の豊漁」
二〇〇四年四月二六日付
北海道新聞「石狩ニシンの遺伝子」
二〇一二年一月二四日・二五日・二六日付

年間漁業スケジュール

石狩湾漁業協同組合

..... 石狩
 _____ 厚田
 - - - - - 浜益

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
海面沿岸漁業	かれい					刺網・小定置
	かすべ			_____	_____					_____	_____	刺網 えい、ともいう
	あんこう											刺網
	ひらめ				_____		_____	_____	_____	_____	刺網・小定置
	たこ			_____	_____	_____			_____		箱漁業 樽流し漁業
	にしん	_____	_____									刺網
	そい						_____	_____						刺網
	まめいか						_____							
	ます					_____	_____							混獲
	はたはた											_____	_____	刺網 小型定置網
	かじか											_____	_____	
	なまこ										

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
海面沿岸漁業	しゃこ										刺網
	ぶり											いなだ
	秋さけ										定置網
	うに											採介藻漁業
	ほっき											桁曳き漁 暫く年一回
	あわび											採介藻漁業
	ほたて成貝										養殖
	ほたて半成貝										養殖
	ほたて稚貝												養殖
	もくずかに									
内水面	しらうお											石狩川河口 特別許可
	わかさぎ											石狩川 小定置、刺網、曳 き網

八幡町の古老田岡定男が残した石狩空襲の記録

昭和二十年七月十五日空襲見たままの記

三島 照子

はじめに

この文章は、故田岡定男氏が書き残してくれた原稿を活字化したものです。

戦後七十年が過ぎました。昭和二十年に石狩の地に空襲があったことが忘れ去れようとしています。新たに空襲の体験記がここに記されます。記録し、後世に残すことはとても大事なことと思います。

なお、田岡定男氏は、石狩市八幡町で呉服や米穀を扱う「田岡商店」の店主であり、かつて石狩町の教育委員などの公職を務め、消防団でも活躍していました。また、昭和六十年四月二十九日に消防功労で、勲六等単光旭日章を受賞されています。

△

その頃のアメリカの本土空襲は益々激化し、戦略的に価値のないように見える都市郊外の小集落を攻撃して退路を断って、その後中心都市を攻撃するドーナツ作戦とか今までにない戦法が取られるようになっていた。

そうなると中心都市札幌を攻撃するための、近隣小集落といえ、差当たり石狩は石油パイプの鉄塔などもあり最初の目標とされる。「石狩あたりは明日かもしれないな」などと町内の物知りが大解説をする。それに半畳を入れて「アメリカ参謀頭張れ」などと大笑いになる。

暑いので路上の空箱に腰掛けて、夕涼みを楽しみながらいつもの通りたわいのない話で賑わっていた。明日の大事を知るものは誰もいない。

△

昭和二十年七月十五日は、朝から薄曇りで日は照っていないが、暖かくおだやかな風が心地よい日和だった。朝食の一刻、ラジオから流れる各方面の戦況ニュースを他人事のように聞いていた。その時である。「樽川でアメリカの飛行機に牛が撃たれた」と路上で大声で話しているのが聞えた。又、別の誰かが走りながら「飛行機が船を追っかけている」「石狩病院の沖だ」と、向いの酒屋の大屋根から若衆が叫んでいる。「見える、見える」と沖を指さしている。方々の屋根にも沢山の人が登って、沖を見ている。「本物だ」町は騒然となった。急いで我が家の屋根に登って見ると、遠く川向この砂丘にも沢山の人が沖を見ている。

丁度、石狩病院の遙か沖合に、小さな発動機船が見えた。飛行機が機首を下げて向っていたのが今機首を上げるところであった。その瞬間黒い煙が上がり、船首が高く上がった。音は全く聞えない。まるで無声映画を見ているようだった。気持が上ずり、音が耳に入らなかったのだろうか。

「やられた。凄いなんだなあ」屋根同志が大声で叫ぶように話しあっている。下の路上では又別な誰かが「札幌で苗穂機関庫がやられている」「丘珠の変電所も機銃掃射を喰っている」、又別な声で「小樽がやられている」「小樽は煙幕を張って真っ白だそうだ」「石狩の船も行っている」「宝栄丸がきのう行ったばかりだ」。

こんな事態になって、現実が目の前にあるのに、次にこの町が爆撃を受けるとは、まだ誰も思ってもいなかった。だがしかし、なんとなく不安で仕事着手に着かない。あっちこちに人だかりができて、何か喋っている。後で知ったがこの時の噂話はほとんど事実であった。

電話が数十台しかないこの町に、どこからながれた話だったのか、その謎はとけない。ラジオは相変わらず軍艦マーチを流して戦勝のニュースばかりで、北海道の片隅に起きた小船のニュースなど。つい

に石狩沖の小船の爆撃事件はニュースにならなかった。

町内の警戒警報のサイレンが鳴ったのは、この一騒ぎの後だった。本町に行くべく渡船場に行ったが、他に渡る人もいなく、サイレンが鳴ったので船も通さないようだ。「サイレンをいいことにして来ないな」。

日頃でも人がかたまらないうちはなかなか来ない渡船だからこんな騒ぎに来るわけないさと、あきらめて、友だちの漁師の磯舟を借りて、若生町側の岸伝いに川上に少しづつ漕ぎ進んだ。

川向かいの(役場裏テイネ)に渡るうとして、石油油送管を渡してある鉄塔の付近で、方向を変えたところ、不意に川下の方から真つ黒い飛行機が超低空で来た。見たと思ったら、次の瞬間、機は頭の上にいる。機内の飛行士の下を向いた顔がはっきり見える。

石油パイプに触れるほどの低空飛行で来た。船を漕ぐ力も失せて、ただ茫然と見上げていた。飛行機はそのまま向きを小樽に変えて飛び去った。

監視哨のサイレンは鳴らない。無事に川を渡り、早速みんなに知らせたが誰も信用しない。それほど低空で川の上を飛んだので知らない人が多かった。これが第一回目の飛行で偵察の目的だったのだろうと後で知る。

△

町役場の内外は、今朝の一騒動の余韻が残っていて、いつもの朝と違う感じだった。

この日は役場で「米供出の促進」の打ち合わせがあり、関係者が町内各地区から集まることになっていた。

樽川の話も、札幌の話も、小樽の煙幕のこともみんな知っていた。格別に新しいニュースもないが、それでも新知識を広げるものを中心に、話は弾んで本題の会議は開けそうもなかった。渡船も運行が平常通りでないし、人も集まりが悪い、打ち合わせは時間を延ばすことに

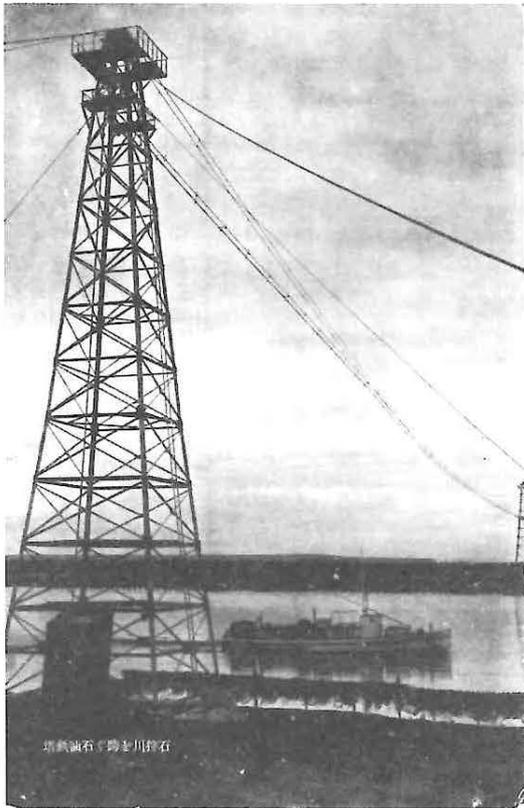
なって席を立つ者もでた。

役場付近の人もなんとなく、落ち着きが悪い、町のお城である役場門前に集まり、新しい話でも聞けるかと人だかりしていた。既に東京で空襲を体験した者もあり、「防空壕に入った方がいい」、「石狩なんか来ないさ」等々だが一時間後の大惨事を何となく予感したものもいた。

再び議場に集まり始めた頃、「望来に真つ黒な煙が見える」と騒ぎ出した。程なく「望来農業倉庫に焼夷弾が落ちた」、「死傷者も出ていくらしい」。この知らせが入って間もなく監視哨のサイレンが鳴り出した。敵機襲来。人々は顔色を変えて防空壕に走った。しかしまだ場内では、安易な気持で様子を見ている者が多く、壕にも入らず、自席にすわっている者が多かった。

△

小樽方面の沖合いに爆音が聞こえた。機銃の音はする。窓から見ると、真つ黒い塊の様な飛行機が先端から火を吹いて来る。次に「キー



石狩河畔の送油塔

ン」という発射の連続音だった。間を置かず雷のような音と空気の振動感だった。発射音と爆音が同時に聞こえる。全く同時に警察所の玄関ガラスの破れる音、事務所の戸棚の破れる音、法規類集の大棚が落ちる。

然し、これらは総べて同時進行で一瞬の出来事である。次の瞬間空気が動いて、落雷のような音が頭を過ぎた、飛び去った音だろう。今更ながら防空壕に入らなかつたことを悔いる。恐怖！恐怖！どうする。頭は空っぽで、第一、身体の動きが止まったようだ。

女子職員も声が出ない、泣き声もなく床に座ってしまう。飛行機は掃射をしただけで、対岸の若生町の方に旋回し去った。町の中には別な一機が来ているらしく、機銃音と爆音が聞こえる。悲鳴が聞こえたが、これも飛び去ったのか、一切の音は遠くなった。「これで終わつたんだらうか」。表に出て見るが、人影は全く見えない、どこも変わった処もなく、唯静かだ。

△

若生町を旋回した飛行機は、若生小学校に機銃掃射と爆弾一個をグランドに落して行った。学校のガラスは一枚もなく破れ、校長室にあつた若林久男氏寄贈の飾りケースを打ち抜いた。後日修繕したが、「作る時より手間がかかつた」と贈り主は笑つていた。

機銃の一弾は学校の付近の民家の屋根を抜き、逃げ遅れて押し入れで布団を被っていた角井の母さん（角井ミサオ三十七歳）に当たつた。町内の人が見つけた時は息がきれていたという。それでも病院にと運び出した。渡船の棧橋まで来たときは、再び爆音が聞こえたので、遺体を置いて逃げ出した。

誰も添う者もなく棧橋に放置されての状態だった。夫は当別に出張中の出来事だった。この人が両岸最初の犠牲者だった。

△

此の時の攻撃は終わったのではなく、始まりだということが後で思

い知らされた。

町を出て体勢を立て直して来たのである。灯台の方から来た一機が、本町の家並み沿いを屋根すれすれに、超低空で来るのが見え、機銃の音と先端からの火が見えた。

次の瞬間、焼夷弾であろう一発が町の中心に落とされた。三上さん宅に直撃だった。地響きを立てて、火柱が立ち、同時に大音響がする。黒い煙が天にまっすぐ立った。機は小樽方面沖に去つたが、町中は蜂の巣を突いたような騒ぎになった。

男たちは、日頃の訓練は此の時の為だ、とばかりポンプ置き場に走る者、ホースを引き出す者、駆け回っていた。「機銃にやられた者がいる」、この人は米供出の打ち合わせに来ていた筒井豊次さんだ。腹に銃弾を受けて、電業所の壁に寄り掛かっていた。本町側の最初の負傷者だった。

犠牲者が出たことが、口伝えに伝わると、「俺の出番だ」と気負い立つた連中や、ヤジ馬で火事場には人集りが出来た。此の時、ただ避難することだけ考えていれば、その後の傷も少なかったであろうに、振り返ると悔やまれる。

消防団の一行は一所懸命動いて、どれほど時間が過ぎたのか、多分五分くらいにすぎないと後で思った。「来た来た」と叫ぶ声が泣き声になり、消火に向かつて行った者を今度は「逃げる、逃げる」と大声で叫びながら走つた。

黒い塊から火が見え、強く張つた糸を弾くようなするとい音、全く同時にガラスの破れる音、そして悲鳴、泣き叫ぶ子供の声、逃げ遅れて負傷した者が何人も出たのは、この爆撃の時が一番多かった。

横町一带に爆弾を投下したのも、一帯の火災を引き起こしたのも沢山の被害が出たのも、みなこの時の数機の飛行機の一斉攻撃だった。

△

役場と警察所（部長派出所）は隣り合つて建っている。防空壕がそ

の前庭に二カ所、警察横に一カ所あり、職員とその家族は最初の銃撃を見て、早々に入って避難した。

第三波の飛行群を見た見張りの男性組は、気が動転し、自分の決められた壕に入らず、手近な壕に飛び込んだ。壕は不意の入居で満員になり、入りきれない人がでた。

入りきれない数人は役場裏の畑に走った。飛行機は火を吹く、機銃の音と金属音が一緒になって、真つ黒い塊になって向かってきた。役場裏は小使さんの芋畑になっている。おりよく培土が終わったところで溝が深く身体を入れて伏せるのに都合がよかった。

ここに伏せていた者がそれからの町の様子を自分の目で確かめていたため、後々の世話人になった。畑に身体を伏せると同時に、至近距離に地響きを立てて爆弾が落ちた。真に直撃命中であった。警察所が天を覆う土煙の中にあつた。煙をとおして中程は饅頭の餡のように、かたまつた真つ赤な火だつた。

見たときはまだ役場に延焼していなかった。しかし延焼するには時間はいらない状態にみえた。旋回した機か、又、別の機か、機銃の音は、間断なく続く。「キーン」という空気切る金属音が間近にする。雷鳴のような音を立てて空気が動くのは頭上を飛び去った時の音だろう。地響きが身体に伝わってくるのは爆弾投下の爆発音であろう。

芋畑の盛土にブスブスと土煙が一行に走る。戦争映画の一シーンそのままである。もつともこれはその時感じたのか、思いの中にあつたのかは不明である。

死を恐ろしく感じたのも少し後でなかったか、その時は真つ白であつた。

遠くから地響きがする。横町の方から煙が立ったのは宮下さん宅の爆撃だったのか。弁天町の方から上がる土煙は高橋さん一家三人が飛ばされた時のものだったのか。

続けさまに能量寺付近の土煙は、望来から銃の弾を作る為に集め



焼失した海浜ホテル

た貨幣を背負った若者が爆風に飛ばされた時の音であろう。役場の前からの爆発音は、郵便局の角におちたものだった。大穴が何日も放つてあつた。

飛行機は海上に出て旋回し、また向かって来る。海浜ホテルに集中攻撃を仕掛けているのがよく見えた。後にこの焼け跡から信管が十本も見つかった。「二十三本あつた」「いや三十本はあつた」など先に焼け跡から一本拾つて来た者が、数を想像して話の種にしていた。これらの噂話でもい

かに攻撃が激しかったのを伺わせる。

このホテルは十六日から、兵隊適齢期の青年で身体の弱い者を集めて特別訓練をする所謂健民道場（健民修練所）であつた。既に寝具類が梱包の状態で積んであり、機材等も運びこまれてあつたが総て灰になつた。当然訓練は取りやめになつたが、一日早かつたら犠牲者が出たであろうと関係者は胸を撫で下ろした。

△

時間にしてどのくらい経つたのか。十分か十五分ぐらいか、そんなに長い時間でなかつたような気がする。気がつくと機銃の音も爆音も消えて、ただ別な不気味な音が地表から伝わってくる。この響きは壕の内にいる者にも聞こえたそうだ。まだ空に飛行機がいるかのように錯覚をおこして、人々は壕からでられないでいた。

町内は静かだ。火のはじける音だけする。一切のものは動かない。

人声も勿論ない。この静けさは何だろう。不気味だった。死の世界とはこんなものかと思われた。一瞬間の人は全部死んだのではないかと思つた。地表を伝わつて来た音は、一波目の来襲の時に消防車がエンジンかけたまま逃げた、そのエンジン音だと気がついたのは後のこと。「残念なことをした」大いに悔しがったが後の祭りであつた。

川向こうの北原さんの納屋の窓から火が見えた。今なら消せるのに誰も気づいていない様だ。しかし知らせる術もなかつた。

△
本町を襲い対岸の若生に向かつた何機かは、大きい建物は学校と農業倉庫よりないこの集落にも、何発かの爆弾を投下している。農業倉庫を狙つた爆弾は、不幸にして目標がはずれて関さんに落下した。爆風と共に、隣の石狩病院出張所に家屋ともに覆い重なり、病院を押しつぶして、二戸共木屑にしてしまった。

消防団員だつた関さん（関多一・五二歳）は蹄鉄屋が本業で、此の日は朝から消防番屋に詰めていたが、何か用事で帰つた処へこの一弾、家族とも飛ばされていた。仲間が気づいて探し出したときは、家の中で畳の間に挟まれて亡くなつていた。若い時に苦勞をして不幸な人だつた。町内の人も日頃を偲んで悲しんだ。

別な一弾が、北原さん宅に落下、油脂爆弾とかで、火は見る間に広がつた。寺尾倉庫、寺尾別家物置、尾崎軍平、北原風呂屋、岩淵馬具屋、松木食堂、平賀洋服店、次々に火はうつり七軒が焼け落ちた。手押しポンプより使えない貧弱な消防力では、勢いづいた火は止められなかつた。

自動車ポンプを町内一番に入れて消防力を誇っていたのに、本番になつて故障して動かない、町はずれの林の中に放置してあつた。後々まで消防は人々に抗議を受け、悔いを残した。

△
一方本町側では、警察所から移つた火は、小使室から役場本庁舎に

燃え移り、火の勢いは益々大きくなるばかりであつた。

この時、壕から二人の職員が飛び出し、火の廻つた建物に入り、戸籍簿と兵籍簿を運びだした。何度も入る内に体に火が付きそうであつたという。

職員の二人は、中島武、眞田一郎の両氏で人々は金鷄勲章物だと賞賛した。丸焼けの庁舎から出されたものは、この十数冊の原簿だけであつた。

△
会議室と書庫には、町内から戦争のために供出された色々の物資が運び出される寸前で、中には各寺の仏具や、家々の貴重な金属類であつた。いずれもその家にとつては重要なものであつたが、猛火の中で跡形も無くなつてしまった。

隣の警察所は直撃の故か土台石が数個転がっているだけで、木片の燃えがらも残らなかつた。生活物資が配給制になり、ゴム長靴が、米一俵と交換された程品不足となつたこの頃に、役場に久しぶりにゴム長靴が配送されて、到着したばかりで会議室に積まれていたので、真つ赤な火の塊になつてしまった。口惜しうに形だけ残して灰になつている靴にさわつてみたが、崩れるだけだつた。

△
芋畑で火の廻るのを見ていて、後で考えると十分運び出せたのにと思つたが、気が動転して体が動かさなかつた。情けない有様で人には語れない話であつた。

芋畑に伏せた一人が呻き声を出している。隣の溝に伏せていた小枝のトツチャだ。肩から首のあたりが血でビショビショだ。這い上がったのを見ると、肩に機銃の弾が当たつたの出血だ。「今まで声を出さずに我慢した」、「声を出すと敵に知れる」可哀相だつた。さっきの目の前に小さな土煙をあげて刺さつた時の一弾だつたのだろう。

何とか止血でもと思つて、包帯替わりに足に巻いていた巻き脚絆を解いて、着物の上から肩をさつく巻いたが応急処置にならなかつたが、

気を鎮めるのには役に立ったようだった。

「家に帰る」と言つて歩き出した。その後札幌の病院行きのバスに乗れず手当が遅れて、回復に長いことかかったのは気の毒だった。

△

巡査部長の上山さんが土手下の笹藪から出てきた。防空壕に入るのが間に合わず、川辺の窪地に入っていたとか。互いに無事を喜びあひながらも、つい数分前まであった役所も住宅も何にも無い。数個の石ころだけで総て灰になって、これから家を建てるために地ならしをしたような光景を見て、唯、茫然としているだけだった。

渡辺巡査も壕に入れないで、付近の溝に入っていたが、「人の声があるの」と言い残して家族の入っている壕の方へ走り去った。

学校の建物は被爆から逃れて建っていた。屋根から白い煙が所々見えた。後で聞くと塚谷先生が横町から火の粉が飛んできたのを、バケツの水で消し止めた名残の白煙だった。

大手柄であった。学校が残ったので町はその後どれほど助かったとか。臨時の役場になったり、公民館になったりずいぶん働いてもらった。

飛行機の気配が無くなったので路上に出てみると、遠藤校長と女教師の橋場先生が、能量寺の裏手から出て来るのが見えた。片手に教育勅語の入った細長い箱を持ち、別な手に天皇陛下の御写真を下げている。

意味にならない言葉を呟いてふらふらと歩いてきた。普通の精神状態には見えなかった。奉安殿に銃撃を受けたので、取り出して持ち歩いていたものだった。

奉安殿を守る奉仕の青年、佐藤さんが銃撃で倒れたのを見て、気が動転した模様だった。佐藤さんは学校の玄関に運ばれたが、出血多量で重体であった。病院に運ばれたが、ついに息を引き取って、一家の大黒柱を失った。家族は大変気の毒であった。

能量寺の方で声がする。例の貨幣を持って札幌に運ぶ途中の若者が、爆風の破片が無数に刺さって全身血まみれになっているのを、近所のひとが防空壕に運んで手当をしているところだった。傷は浅く割合元気だった。仮病院で破片を抜いたが、九十個以上の鉄片が出たそうだ。付近には貨幣が散らばっていたが、誰も見向きもしない。次の日同じ所を通った時は一枚も残っていないかった。どこかに消えたのだろう。

横町は火の海だった。消防ホースを引く人もなくバケツリレーもない。唯一その家財を一つでも多く運び出すのに懸命な人。怪我人が出て騒いでいる人、みんな夢中だった。寝ていた吉岡与平さんは火勢が強くてまだ運びだせないとか。泣き声、そして家族の励ます声。

金大亭の庭に、人間の足が降ってきた。電線に人間の目玉が下がっている。まるで秋味のバラ子のようだ。電柱に肉片が貼り付いているとか。町の中は地獄絵図を見るようだった。

この時兩岸で三十六戸が焼失、全壊家屋三十八戸、小中被害百五十戸、死者十三名、負傷者十三名出した。余煙はまだまだ。憲兵がサイドカーに乗って、町に来たのは丁度この頃だった。「町に憲兵が来てくれた」頼りにするのは「兵隊さん」だけだと、みんなは何か期待した。しかし、車から降りる訳でもなし、町の人に話し掛けるわけでもなく、唯一廻りして帰って行った。「何しに来たんだ」みんな不満いっぱいだった。一言ねぎらいの言葉をかけたら、みんなは納得したのに。

△

午後四時を過ぎた頃か、怪我人が続々と石狩病院前庭の草むらに集まってきた。病院では折から若先生（鈴木繁蔵）が、軍医に招集されて休業状態だった。

この日は、先生は休暇で帰っていたが、薬も機材もなく応急の止血をするのが精一杯だった。札幌に送るのにしても、いつ空襲があるのかわからない状態では動いてくれるバスもない。みんな暗い気持ちに

なっていた。この時中央バスの斉藤さんが運転して、一台のバスが来てくれた。地獄に仏とはこのことかと拍手を送りたい気持ちになった。日頃バスに乗るときは、無口で無愛想な人だったが、こんな時に人の真価がわかるものだと、後々まで語り継がれてその後バスに乗る度感謝した。

病院前の草むらで、腹を撃たれたじいさんが日頃腹痛の時治療を受けた痛み止めを思い出し、「先生いつもの薬さ打ってくれ」と呻き声を上げていた。哀れだった。

痛みのため気を失いかけている子供を叱る母親が悲痛な声を上げている。こんな状況に危険を冒して来てくれたバスのお陰でみんな一気に元気になった。バスが小型なので全員乗れそうにないのが心配になった。

バスの両窓を開けて、ロープを通して戸板をのせると二階建てのバスができる。全員を乗せる最もいい考えだ。話が決まれば、機転のきく漁師町のみなさんだ。早速近所からロープを借り出し、戸板を並べて、立派な二階建てバスが出来上がった。

今度は怪我人を乗せるのに大苦心だ。体の大きい筒井さんなど押す人引く人で大騒ぎになって、二時間以上もかかってようやく全員押し込んだ。バスは札幌に向かったが、今度は家族の足がない。これを工面するのに家族は苦労したらしい。

この頃になって、花畔、樽川、生振方面から警防団が救援にきてくれた。焼け跡の始末やら、残り火の処理に夜を徹して手助けをしてくれた。

バスが発して一息ついた頃、江別方面から飛行機の爆音が聞こえてきた。「又、来た」大騒ぎになって防空壕に走り込んだ。飛行機は大型で、何となく様子が違う、近づいて来たのを見上げると、両翼に鮮やかに日の丸が見える。みんな路上に出て手を振った。「日本にはまだ飛行機があるんだ」「したらなしてやられている時来ないんだ」

喜びと不平が入り混じって賑やかになった。

「生振の防風林にゼロ戦を隠してある」「ドラム缶も一杯積んである」「まだまだこれからだ」みんな一ヶ月後の敗戦を想像出来なかった。

△

防空壕で一夜を明かして翌朝、又磯舟を借りて川を渡った。今朝は爆音もなくいつもの通りだが、役場前の惨状を見て、今更ながら恐怖がよみがえった。

「あれ何だ」桑田農場の方から頭から布団をかぶり、手に鍋、小物とか七輪を下げた大集団が来る。全町民ではないかと思われる大人数だった。様に顔は汚れ、目を窪ませて、疲労のあとありありとし、声もなくとほとほと歩いて来る。聞いてみると不安で町に居られず、「柏木」の林の中で一夜を明かしたとか。

後にその夜野宿した連中を、談笑の中で「あの行進は二度と見られないなあ」人間は布団と鍋があれば事足りるもんだ」と大笑いしたが、その時はみんな真剣に生きることだけ考えていた。

若生側でも、また空襲が来るかと、一家を連れて山に逃げようと、馬車を仕立て走り出した佐藤さんが、気が付いてみると家族を乗せるのを忘れて、ぬか漬け一樽だけ積んで走っていた。「これは大変」と引き返してきた。沈んだ町に、この愛嬌のある大慌ては町内に時ならぬ笑いを振りまいて気休めとなった。

鈴木さんは日頃から話題の多い人だったが、この日も足に大袈裟に白布を巻いて、町角に座って通る人ごとに「俺はアメリカと闘って名誉の負傷だ」と言っていた。実は立木に上って様子を見ている内に、飛行機があまりに早いので慌てて木から落ちて転んだと言う話で苦笑いをしたが、これも沈んだ町に少しでも笑いでもと気遣いだったのだろう。

札幌は空襲が心配だと石狩に疎開してきた阿部さんの親類の親子連れが、サイレンが鳴り出しても決まった入る壕もなく、信教寺境内の

スモモの木の下に座っていた。これを見ていた田岡のじいさん「危ないから入れ」と声を掛けた。早くも飛行機は川向こうに見える。大急ぎで子供を引き連れて走り込んだ。ほとんど同時に物凄い爆発音が近くで聞こえた。

壕の上が動いて仕切の板の間から砂がこぼれる。生き埋めになるのかと心配した。「なんまんだ」とみんなで叫ぶように手を合わせたそ

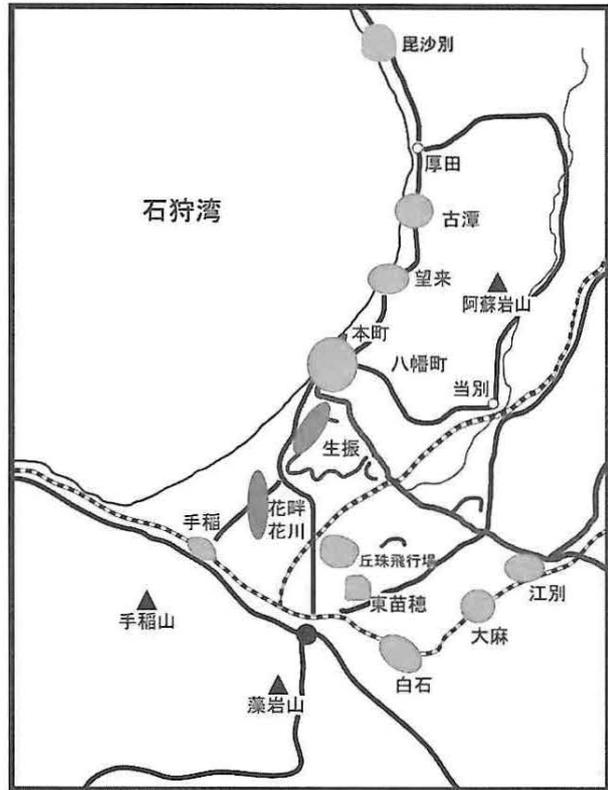
うだ。
壕は無事で全員助かったが、壕から顔を出してみると、先程まで座っていた木がない、かわりに大きな穴があいていた。木に命中したわけで、爆発音はここにおちたものだった。もしあのまま座っていたらと、背筋が冷たくなった。命を助けられた一家は早々に札幌に帰った。「運の無い人とはこんなものだ」不運の見本を見るようで気の毒だった。それから毎年七月十五日には、わざわざ命の恩人にお礼を言うために顔を見せていた。律儀な人だった。この話は評判になり、じいさんは大層株を上げた。こんな話は町のあちこちにあつて、後々まで親類付き合いをする家などがあつた。

この木におちた爆弾の爆風は、一番近いお寺は勿論のこと、下の町並みの家々の窓を抜き、障子を倒し、家具を壊して命中弾と同じくらいの悪さをして復旧には大いに苦労をした。

「関さんのようにならなくていい方だ」と近所の者は話していたが、それにしても「関さんや焼けた人は気の毒だね」が話の落ちで、当分語られた。

△

そのころ周辺の集落ではどうだったんだろう。町から東の石油鉞山はどうだったのだろうか山には行かなかつたが、途中五の沢集落では、誰が知らせたのか、見たのか、「望来の米倉庫がアメにやられた」、「若生にも飛行機が来た」と二十戸余りの住民全員と思われる人数が、中心地の学校の前に集まって来た。



(林恒子 1982 「札幌空襲の実態」より)

町の方から地響きが伝ってくる。間を置かずには黒い煙が立ち上がるのが見えた。何年か前に石油鉞が爆発した時と似ている。「きつと爆弾だ」。みんな心配だったが、低空飛行なので山越えには見えなかつたらしい。

望来方面の煙は山越えでも高く昇っているのによく見えた。あの大きな農業倉庫が丸焼けになった。火だつて見えたのである。望来集落より更に一里余り行ったところが、古潭村だ。朝八時頃から小樽方面に白い煙が見える。いつものガスと違うぞ、何か変わった事が起きている。「煙幕でないか」と物知りが出て説明していたと言つた。

「石狩の沖で飛行機が飛んでいる」神社の丘から石狩のみんなが見たあの光景だったんだらう。「これは本物の空襲だ」村に一つ大きい壕を掘つてあつたそこへ走り込んだ。然しこんな小さな村にとの思ひはあつたらしい。

昼近くに浜益方面から爆音が聞こえてくる。早いものだ。何だか爆音がしたなと思ったら村中火の海になっていた。十七戸が一度に燃えている。

この集落の近くの一軒家の草屋根に機銃を撃ち込んで来た。鶏が異常に驚いて逃げ回る。旋回する飛行機の機銃掃射。低空で来るので乗員の顔がはっきり見えたと言う。まるでスポーツを楽しんでいるようだった。後日前庭から機銃の弾を、小ザルに一杯拾ったそうさ。

浜伝いに厚田村を少し過ぎたところに、送毛という十戸程の集落がある。朝から飛行機が機銃の音と爆音を響かせて押し寄せてきた。みんな防空壕にはいつて息を殺していたが、この集落には一発の弾も来ない。村の片側に切り立った岩を目標とつけて撃っている。岩に向かって撃つ、そして上空に回転してきて又、撃つ、何回も繰り返して練習をしているように見えた。そのうち沖に一隻の小舟が舫ってあった。この小舟に爆弾を投下し始めた。太い水柱が立って船が見えなくなる。「やられた」と息をのんだが、水柱が消えると船が見える。何機も繰り返したが船は生きていた。見ている者もその度に「万歳」と叫んで大拍手にわいた。

飛行機は諦めたのか、石狩方向へ行つたが、間を置かず古潭村から火が上がるのが見えた。「当たらないから腹いせに古潭を、やつけている」「爆弾って当たらないものだな」「下手くそだからここで稽古していたんだべ」何の被害もなく幸いだった。この人達は勝手な事を言っただけで笑ったり漁師仲間の古潭の人達を気の毒がったりして、持ち寄りの昼飯を壕の前で食べた。男どもは配給の酒を持ち出して、大宴会となったそうさ。

それにしても石狩の目標は大きかった故かよく当たった。石狩の七月十五日は、百年経つても忘れることのできない程長い一日だった。

注 関連文献として、

『石狩の空襲を語りつぐ』（A5—1—16頁）

石狩郷土研究会発行、昭和六十二年があります。

石狩市内の戦争に関連する石碑、遺構

工藤 義衛

1. 本町地区

(1) 石碑

① 彰徳碑

所在地 親船町共同墓地

建立年月日 明治三九(一九〇六)年四月

建立者 不詳

備考 旧「忠魂碑」を戦後改称、改刻

文献 石狩の碑第二輯、一〇頁

② 戦死者墓碑

所在地 親船町共同墓地(彰徳碑の左右)

建立年月日 昭和一二(一九三七)年三月

建立者 石狩町軍友会

備考 日露戦争以後昭和一二年までの石狩町内の戦病死者12名の墓誌

文献 石狩の碑第二輯、一一頁

③ 「日露戦役」の碑

所在地 親船町共同墓地

建立年月日 不明(昭和五年前ころか)

建立者 不詳

備考 碑文ほか石碑表面摩滅のため大部分が解読不能

文献 石狩の碑第二輯、一二頁

④ 殉国軍馬霊碑

所在地 親船町・某氏住宅地内

建立年月日 昭和一六(一九四二)年一〇月

建立者 盛辰次郎

(2) 遺構

① 中島家の墓

所在地 弁天町・曹源寺境内

建立年月日 明治二〇(一八八七)年

備考 石狩町随一の中島商店を経営した中島家の墓。墓石上部の破損は、昭和二〇年七月一五日の石狩空襲時に曹源寺に落とされた爆弾によるもの。

文献 石狩の碑第三輯、一九頁

② 石狩市指定文化財旧長野商店

所在地 弁天町

建設年月日 明治二七(一八九四)年

備考 旧長野商店は、石狩空襲の際に店の正面二階部分に爆弾によって壁に穴が開いた。平成一六年に親船町から現在地に移築され、壁の穴も解体修理の際に修復されている。

③ 海浜ホテル跡擬定地

所在地 石狩市海浜植物保護センター付近

経緯 海浜植物保護センターの敷地内からコンクリート製の土台様のものが発見されており、これが昭和二〇年七月一五日の石狩空襲で焼失した海浜ホテルの土台では

備考 日支事変等で徴用され犠牲となった軍馬の慰霊碑。建立者の盛氏は、元石狩郵便局長。

文献 石狩の碑第二輯、九頁

2. 花畔・花川・樽川地区

(1) 石碑

① 戦勝記念燈籠

所在地 花畔神社境内

建立年月日 明治三七(一九〇四)年九月一〇日

建立者 花畔村氏子中

文献 石狩の碑第二輯、四五頁

② 明治廿七八年戦役記念碑

所在地 花畔神社境内

建立年月日 明治四〇(一九〇七)年九月一〇日

建立者 發起人会

備考 日露戦争の戦勝記念の碑。題字は乃木希典陸軍大将の書。道内からの召集者を中心に編成された旭川の第七師団は、旅順

要塞攻略戦で多くの死傷者を出した。乃木將軍は旅順攻略戦の総指揮官。

参考資料 石狩の碑第二輯、四六頁

③ 戦没者慰霊平和祈念之碑

所在地 花畔神社境内

建立年月日 平成九(一九九五)年八月一五日

建立者 花畔地区戦没者慰霊平和祈念之碑建立協

賛会

備考 前大戦における花畔地域の戦没者35名の氏名と戦没地が刻まれている。

ないかとする説がある。石狩海浜ホテルは札幌の建築家田上義也氏設計の洋風ホテル。

参考資料 石狩の碑第二輯、四八頁

④ 忠魂碑

所在地 樽川神社境内

建立年月日 明治三七(一九〇四)年一二月五日

建立者 不明(樽川村有志)

備考 日露戦争の戦死者慰霊のため樽川村有志の寄付により建立。碑文は摩滅して解読

できないが、台座に寄付者の氏名が刻まれている。なお樽川村は日露戦争で3名の戦死者を出している。

文献 石狩の碑第二輯、六三頁

(2) 遺構

① 軍用機格納庫跡

所在地 不詳(花川南防風林内及びその周辺の砂丘と言われるが位置は特定されていない)

建設者 不詳(日本陸軍?)

備考 花川南防風林内や付近の砂丘にコンクリート製のカマボコ型の格納庫が数ヶ所

作られたという。二人乗りの軍用機を見たという証言もある。琴似につながる四番通を滑走路にする計画もあったと言われる。

文献 石狩百話、三二二頁、第五五話「防風林に格納庫を…」

3. 生振地区

(1) 石碑

① 戦没者慰霊平和祈念碑

所在地 創生園内(生振五線北)
 建立年月日 平成二(一九九〇)年八月一五日
 建立者 生振村百二十年記念事業協賛会
 備考 生振地区の戦病死者86名の氏名を刻む。
 生振村開村百二十年記念事業であり、また生振の墓苑である弘照会ばらと霊園の一〇周年として同教会会長佐藤隆宝師からの篤志寄付を受けて建立された。

文献 石狩の碑第三輯、一一九頁

② 戦没者慰霊平和祈念碑の石灯籠

所在地 創生園内(戦没者慰霊平和祈念碑の両側)
 建立年月日 平成八(一九九六)年七月
 建立者 生振遺族会
 文献 石狩の碑第三輯、一二二頁

5. 浜益区

(1) 石碑

① 忠魂碑

所在地 群別
 建立年月日 大正四(一九一五)年一〇月
 建立者 田中九五郎
 備考 陸軍中将宇都宮太郎題字。大正天皇即位記念事業として建立か。石碑の正面に砲弾の葉莢が置いてある。もとは茂生にあつたが高台のためお参りしにくいことから現在地に移設された。

文献 石狩の碑第五輯(浜益区編)、一五〇頁

② 萬国戦死殉難死者之霊位

所在地 豊隆寺境内裏
 建立年月日 昭和五五(一九八〇)年八月吉日
 建立者 第五世住職 白井宏道
 文献 石狩の碑第五輯(浜益区編)、一二三頁

③ 故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級岩谷富雄之墓

所在地 大心寺境内
 建立年月日 昭和九(一九三四)年一〇月五日
 建立者 岩谷富太郎
 備考 岩田富雄氏が戦死した戦闘は昭和六年に起こったいわゆる満州事変で、満州国に接する熱河省の戦闘であつた。
 文献 石狩の碑第五輯(浜益区編)、一一〇頁

4. 厚田区

(1) 石碑

① 平和祈念碑

所在地 望来神社境内
 建立年月日 平成四(一九九二)年七月一五日
 建立者 祈念碑建立遺族会
 備考 昭和二〇年七月一五日の北海道空襲(望来空襲)の際に犠牲となつた11名の氏名が刻まれる。

参考資料 石狩の碑第四輯(厚田区編)、三〇頁

文献

石狩町郷土研究会編 一九八〇 石狩の碑第二輯

